

255.1

196



0042327000

0042327-000

255.1-196

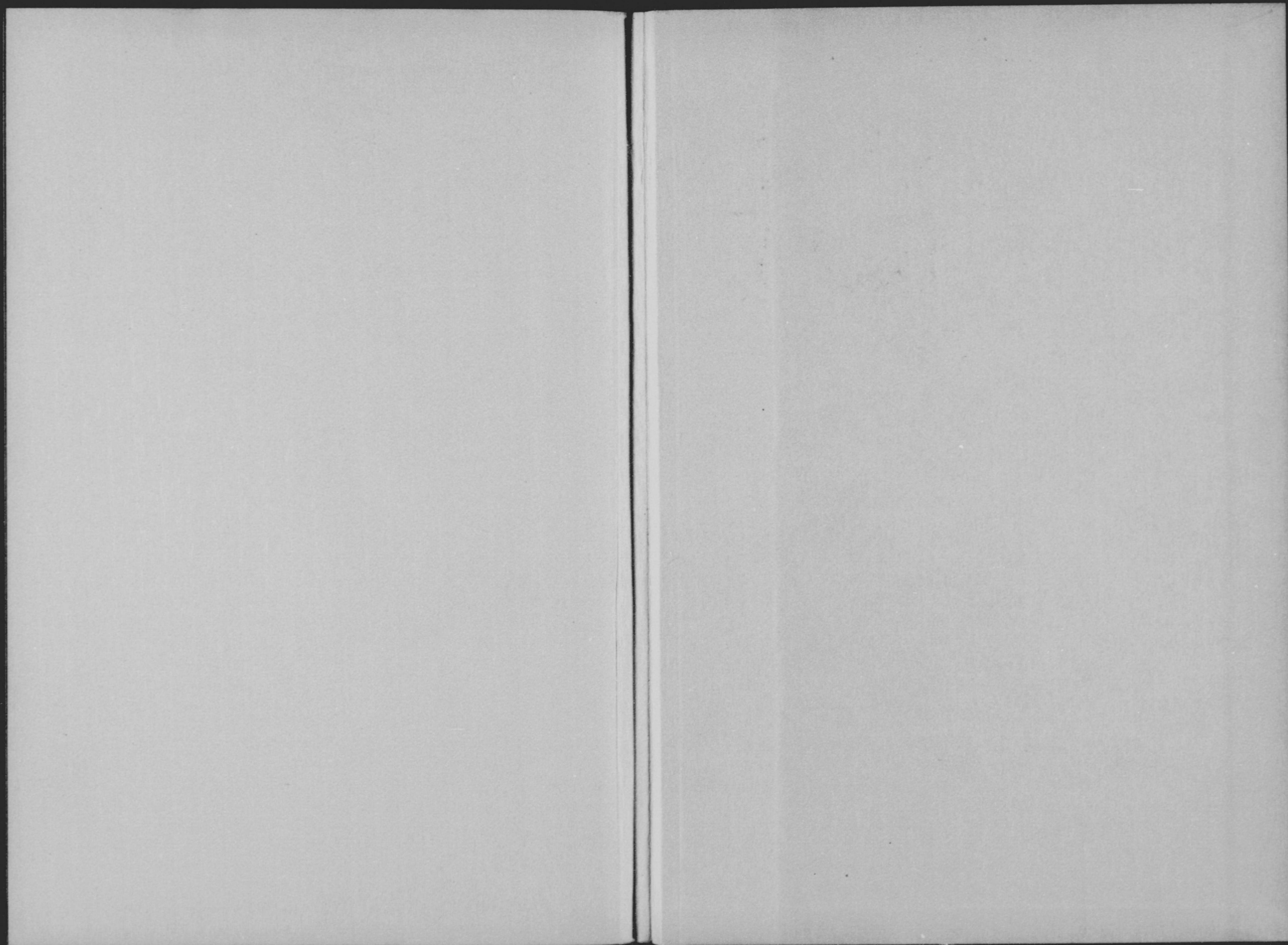
東京都教育会六拾年史

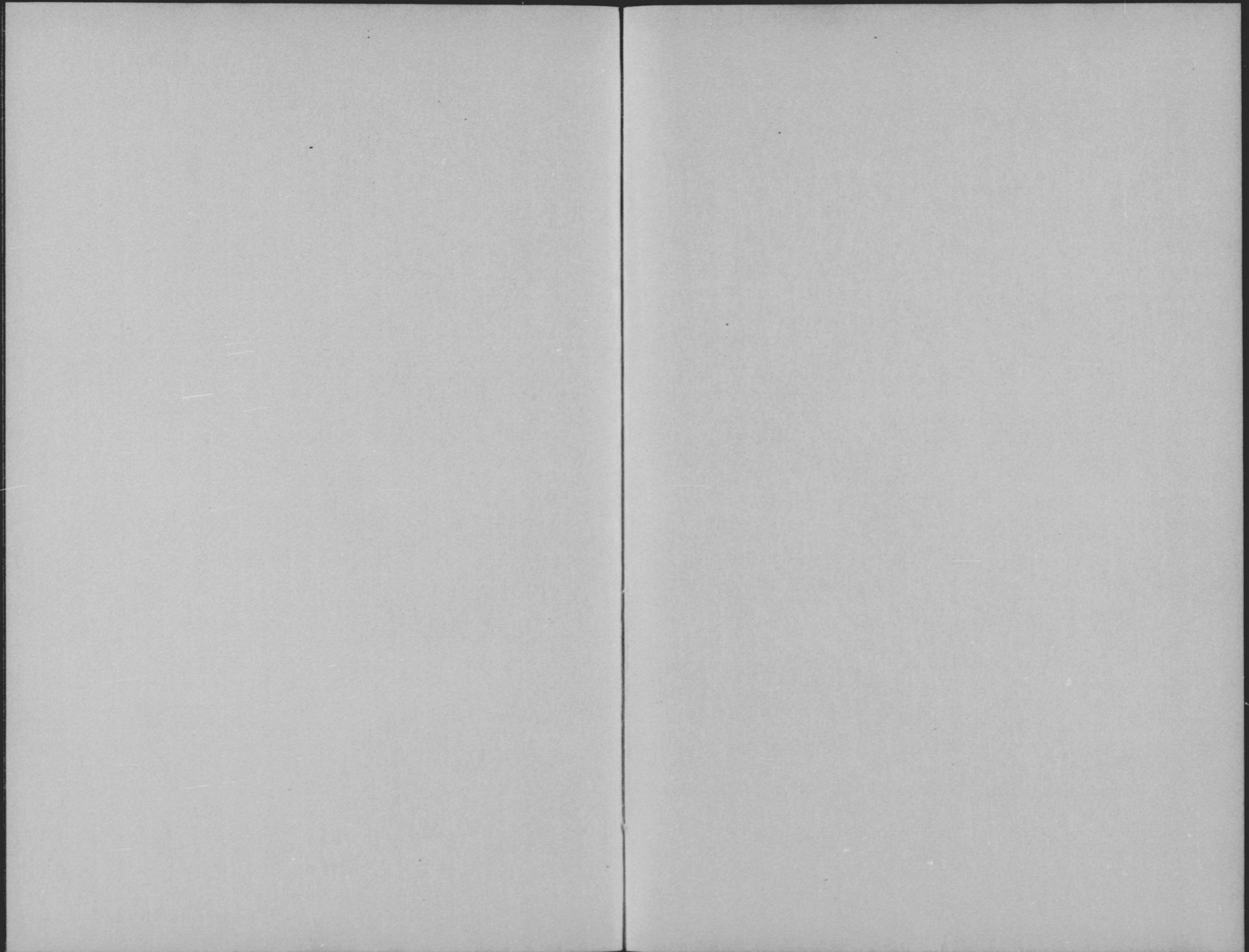
東京都教育会・編

東京都教育会

昭和19

AHC





27L23

2541
196

東京都教育會六拾年史

東京都教育會

255.1-196



東京都教育會六拾年史



發行所寄贈本

東京都教育會



松平會長

自大正十五年一月



中野副會長

自昭和九年一月



長會前尻田

(會育教市京東)
月六年九正大自
月六年一十同至



長會前崎尼

(會育教市京東)
月四年八十三治明自
月一十年六正大至



長會前星

(會育教市京東)
月七年三十三治明自
月六年四十三同至



長會前野芳

(會育教府京東)
月二十年六十二治明自
月四年二十三同至



長會前藤後

(會育教市京東)
月七年一十正大自
月二十年四十同至



長會前木高

(會育教市京東)
月一十年六正大自
月四年九同至



長會前原江

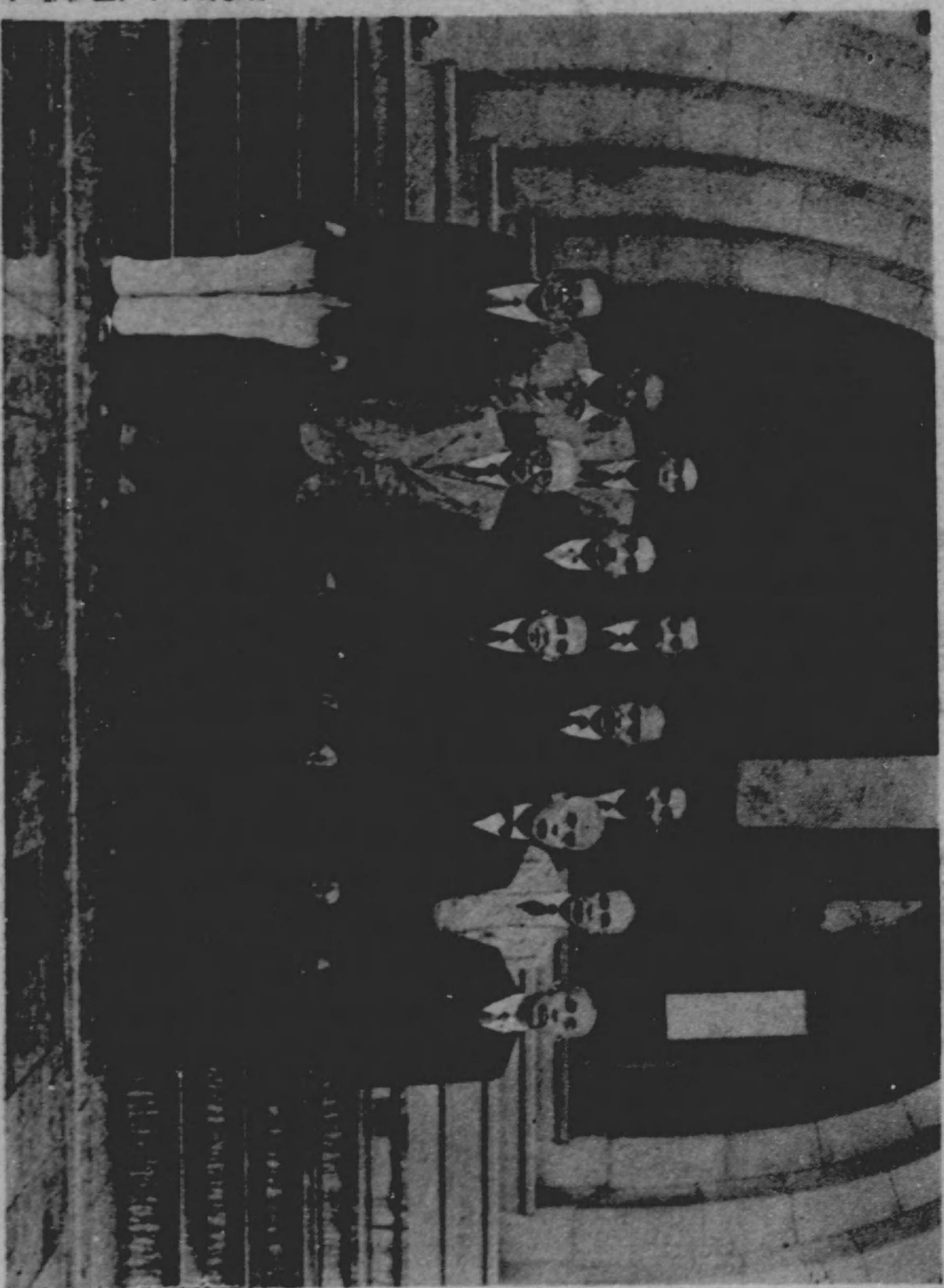
(會育教市京東)
月七年四十三治明自
月三年八十三同至



長會前部岡

(會育教府京東)
月五年二十三治明自
月二十年四十正大至

田中書記
宮内常務幹事
中澤常務幹事
金成六十年史編纂委員
藤岡常務幹事



後列
井上主事
井上常務幹事
見山常務幹事
小倉常務幹事
細谷常務幹事
西村副議員會副議長
松崎副議員會議長
前列
中列

例言

一、本書は我が東京都教育會創立六十年を記念するが爲に編纂刊行したものである。
 本會の前身であつた東京府教育會の遷移は明治十六年七月一日であり、東京市教育會の設立を見たのが明治三十三年六月廿五日であつて、前者は府下全部を範圍とし、後者は市部を範圍として並び活動すること凡二十六年間、大正十五年一月十五日に至つて初めてこれを合併統一し、帝都教育會と稱するに至つたのであるが、斯くて又拾有七年、前後を推算して滿六十年に當る昭和十八年七月一日といふ記念日を以て、恰も東京都制が實施せられ、會名も亦東京都教育會と改名せられるに至つたといふことは極めて奇しき因縁といふべきである。
 一、本書は固より教育發達史でもなければ教育思想史でもない。單に本會の組織運営事業等の大要を叙して聊か先人努力の跡を偲び、これを永遠に記念せむとする沿革史たるに過ぎぬ。但し發般の下帝都の地は我が帝國文化の中樞であり、又我が帝國を代表する國際都市である關係上、本會の活動史は總て又我が國教育の變遷發達の跡を纏める側面史たるの價値がないでもない。是等は一に讀者の活眼に俟つ。
 一、本書は第一編に本會の草創時代たる東京府教育會の事績を叙し、第二編には東京府教育會時代を一括してこれを左の如く四題に分ち、その變遷發達の概要を述べ。

例 言

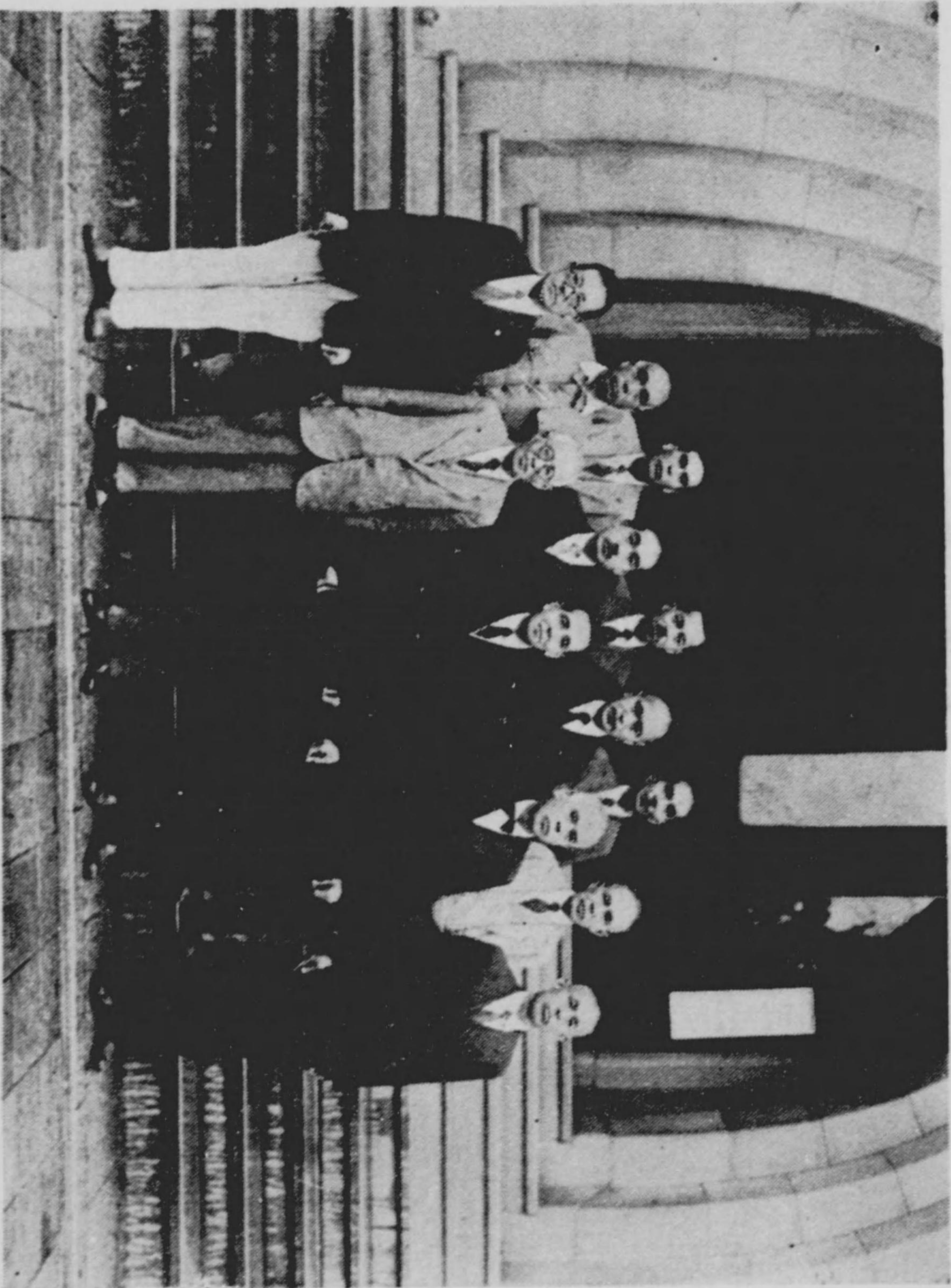
一、本書は我が東京都教育會創立六十年を記念するが爲に編纂刊行したものである。

本會の前身であつた東京府教育會の濫觴は明治十六年七月一日であり、東京市教育會の設立を見たのが明治三十三年六月廿五日であつて、前者は府下全部を範圍とし、後者は市部を範圍として並び活動すること凡二十六年間、大正十五年一月十五日に至つて初めてこれを合併統一し、帝都教育會と稱するに至つたのであるが、斯くて又拾有七年、前後を通算して滿六十年に當る昭和十八年七月一日といふ記念日を以て、恰も東京都制が實施せられ、會名も亦東京都教育會と改名せられるに至つたといふことは極めて奇しき因縁といふべきである。

一、本書は固より教育發達史でもなければ教育思想史でもない。單に本會の組織運営事業等の大要を叙して聊か先人努力の跡を偲び、これを永遠に記念せむとする沿革史たるに過ぎぬ。但し輦轂の下帝都の地は我が帝國文化の中樞であり、又我が帝國を代表する國際都市である關係上、本會の活動史は總て又我が國教育の變遷發達の跡を釋ぬる側面史たるの價値がないでもない。是等は一に讀者の活眼に俟つ。

一、本書は第一編に本會の草創時代たる東京府教育談會の事績を叙し、第二編には東京府教育會時代を一括してこれを左の如く四期に分ち、その變遷發達の概要を述べ、

田中書記
宮内常務幹事
中澤常務幹事
藤岡常務幹事
金成六十年史編纂委員



後列
井上主事
井上常務幹事
見山常務幹事
小倉常務幹事
細谷常務幹事
西村評議員會副議長
松崎評議員會議長
前列
中列

第一期	(自明治二十年七月 至同三十一年四月)	基礎確立時代
第二期	(自明治三十一年四月 至同三十六年七月)	社團法人設定時代
第三期	(自明治三十六年七月 至同四十五年七月)	神田橋事務所時代(上)
第四期	(自大正元年七月 至同十四年十二月)	同 (下)

第三編には明治三十三年六月東京市教育會の設立より大正十四年十二月兩會の併合に至る迄を記し、第四編に於ては帝都教育會時代のことを竹早町時代と教育會館時代との二期に分つて記述した。

一、本書編纂の議が決せられたのは昭和十三年九月の常務幹事會に於て、當時の會長は松平伯爵閣下副會長中野勇治郎氏、常務幹事は中澤留、藤岡眞一郎、細谷章、宮内與三郎、見山正賀(五十音順)の五氏であつた。それより藤岡幹事擔當左記十氏に委員を委嘱して材料の蒐集整理を進めた。

安西國太郎	加藤 因	金成龜次郎	小林 順
佐口安治	風當朝朗	細井安清	前島卯市
茂串小市郎	井上宗助	(五十音順)	

更に昭和十五年六月には規程改正により常務幹事に小倉育之介、井上宗助二氏を加へ七名の常務幹事によつてこれが進捗が圖られた。

編纂委員諸氏は先づ材料蒐集整理の方針を定め年度別に分擔して、府市兩會誌及帝都教育會誌に主として資料を求む

ることとなつたのであるが、府教育會雜誌(自明治三十六年一月)二十三年間分及市教育會雜誌(自明治三十七年四月)二年間並(自明治四十年七月)一年間分は全く散逸したが爲に一方ならざる困難を極めた。

そこでその當時會務に執掌せられた奥田茂太郎氏、風當朝朗氏、山田弘毅氏、金成龜次郎氏、井上善人氏等を煩はして坐談會を催したり、雜誌帝都教育に毎月連續廣告を掲げて該誌の所有者を求めたり、又夫々の傳手を求めて濱野氏多田氏、秋廣氏等に問合をなしたり、あらゆる手段を盡したのであつたが、遂に十分その目的を達することが出来なかつた。

一、斯くて不十分ながら昭和十六年十二月を以て材料の蒐集整理を終ること、なし、翌十七年一月これが執筆を金成龜次郎氏に依頼したのであつた。金成氏は達つて辭退せられたのであつたが、會の事情に最も能く精通し文筆の才能最も豊かなる點に於て、同氏を措いて他に人なきを以て強ひて御依頼致さざるを得なかつたのである。

斯くて執筆の間金成氏は令聞の重症による入院、引續いて遂に御逝去の如き重大なる家庭的災厄に遭遇せられつゝ、材料不備の補填等にも甚大なる努力を輸され、その勞苦は實に想察するに餘りあるものがあつた。しかも同氏の強き強き責任感に遂にこの大業を完成せられ茲に刊行を觀るに至つたのであることを附記して特に同氏に對し深き感謝を捧ぐる次第である。

一、本書表紙の文字は本會會長松平伯爵閣下の御揮毫に係るものであることを特記して御鑑賞を請ふ。

一、本書の刊行については中野副會長常務幹事七氏及編纂委員の十氏並に森川前主事井上現主事の努力を煩はしたと

が多大であつたことを附記して置く。

昭和十八年十一月 日

東京都教育會

東京都教育會六十年史目次

口 輪

- 一、現會長・副會長
- 二、歴代會長
- 三、現常務理事・評議員會議長・副議長

例 言

第一篇 東京府教育談會時代

(明治十六年七月—同二十年七月)

目	次
一、創設の經過……………	一
二、當時教育界の情勢……………	三
三、會則と役員異動……………	五

第二篇 東京府教育會時代

第一章 東京府教育會第一期 (明治二十年七月—同三十一年四月)

四、事業の概要……………七

一、會則の大改正と新陣容……………一〇

二、常議員會の活動……………一五

三、森文相の學科教授法・府知事諮問の答申……………一八

四、教員保姆養成事業……………二二

五、教育品展覽會の開設……………二八

六、教育效績者推薦問題……………三三

七、府下教育界の事情・公私立小學校の對立……………三四

八、小學校制度要領取調……………三六

九、參事員・商議員の新規程……………四五

一〇、各府縣聯合教育會……………四八

第二章 東京府教育會第二期 (明治三十一年二月—同三十六年七月)

一、社團法人の設定・岡部子爵の會長就任……………七七

二、東京府市補助金の交附……………八六

三、調査部の開設……………八七

四、前調査委員の成果……………九一

五、教員養成事業の概況……………九三

六、講習會の開設……………九六

七、通俗講義録の發行……………101

八、東京府聯合教育會の開催……………103

九、全國市教育談話會……………111

一〇、關東教育大會……………112

一一、雜誌發行及圖書出版……………117

一二、本會功勞者の人々……………119

一三、創立滿二十年當時の役員……………121

第三章

東京府教育會第三期

(明治三十六年七月—同四十五年七月)

一、創立滿二十年祝賀式・澤柳局長の教科書演說……………125

二、第六回東京府聯合教育會……………128

三、文部廢省問題と市教育界の動搖……………131

四、東京府市教育會の合併問題……………135

五、日露戰役と教育界・教育獎勵の御沙汰……………137

六、戰時下の府市教育會・事務所移轉と樂堂新築……………142

七、第八回東京府聯合教育會・第三回關東聯合教育會……………144

八、第十七回總會・第四回關東第九回府聯合教育會……………147

九、教員傳習所の狀況・選獎校長の祝賀會……………153

一〇、義務教育年限延長・小學校教員の優遇……………154

一一、全國教育家大集會・第五回關東聯合教育會……………156

一二、保姆傳習所の再興・第十回府聯合教育會……………160

一三、第十一回府聯合教育會・第六回關東聯合教育會……………162

一四、第十九回總會・岡部會長の司法大臣就任……………165

一五、第十二回府聯合教育會・第七回關東聯合教育會……………168

一六、第廿一回總會・女子夏季講習會開催……………173

一七、第十三回府聯合教育會・關東東北聯合教育會……………175

一八、小學校教員優遇問題の解決……………176

一九、通俗教育部の設置・岡部會長頌德會開催……………180

二〇、小學校長の委任待遇・教育振興の御沙汰奉讀式……………一八四

二一、第十四回府聯合教育會・第九回關東聯合教育會……………一八六

二二、明治天皇の崩御・教育會の神宮奉建請願……………一八九

二三、小學校學用品標準調査・政府財政の整理緊縮……………一九〇

第四章 東京府教育會第四期 (大正元年七月—同十四年十二月)

一、第二十三回總會・本會に對する文部省の選賞……………一九二

二、第十五回府聯合教育會・第十回關東聯合教育會……………一九五

三、第十六回府聯合教育會・全國教育者大會の計畫……………一九八

四、第十一回關東聯合教育會・岡部會長に感謝決議……………二〇一

五、全國教育者大會の開催……………二〇六

六、通俗教育に關する調査……………二〇八

七、勅語下賜二十五年記念式・歐洲戰亂勃發と教育界……………二一四

八、第十七回府聯合教育會……………二一六

九、第二十五回總會・御大禮記念全國教育大會……………二一九

一〇、第十八回府聯合會・第十二回關東聯合教育會……………二二三

一一、本會研究部調査の二懸案・教育者の海外視察……………二二九

一二、第十九回府聯合教育會・第十三回關東聯合教育會……………二三四

一三、白耳義國兒童義捐金募集・歐洲大戰地歴講習會……………二四〇

一四、第二十回府聯合教育會・第十四回關東聯合教育會……………二四五

一五、小學校男女教員の適當なる割合調査……………二五五

一六、東京植民貿易語學校の設立……………二五七

一七、第十五回關東聯合教育會・義務教育費増額請願……………二五九

一八、本會定款の一部改正……………二六六

一九、第廿二回府聯合教育會・第十六回關東聯合教育會……………二七三

二〇、第十七回關東聯合教育會・市町村教育費整理反對……………二七九

二一、全國教育大會の開催……………二八五

二二、第十八回關東聯合教育會……………二八九

二三、本會通常總會……………二九四

二四、第廿四回府聯合教育會・教育費國庫負擔増額祝賀會……………二九八

二五、臨時總會の定款改正・大正十二年度歳入出豫算……………三〇一

二六、關東大震災と本會の善後處置……………三〇六

二七、第廿五回府聯合教育會・震災後教育上要考慮事項……………三一三

二八、第十九回關東聯合教育會……………三二六

二九、第廿六回府聯合教育會・第廿回關東聯合教育會……………三三五

三〇、通常總會・中等學校入試撤廢期成同盟會……………三三三

三一、第廿七回府聯合教育會・第廿一回關東聯合教育會……………三三七

三二、府・市兩教育會の併合成立……………三四八

三三、岡部會長の薨去……………三五二

三四、併合當時の本會の概況……………三五五

第三篇 東京市教育會沿革

第一章 創業時代(星江原會長)(明治三十三年七月—同三十七年六月)

一、創立の經過……………三五八

二、經營事業調査と雜誌の發行……………三六六

三、研究機關の常設・市教育行政統一問題……………三七〇

四、第一回總集會の開會・星會長の薨去……………三七五

五、後任會長の選任・實業補習學校の設置……………三七九

六、社團法人設定と幹事改選……………三八三

七、法人組織後の第一回總會……………三八八

八、第二回總會と評議員會の活動……………三九一

九、附設學校の改廢・第一回講習會の開催……………三九五

第二章 尾崎會長時代(明治三十七年七月—大正五年十一月)

一、日露戰後の教育趨勢・第七回總會……………三九七

二、第八回總會と講習會開設・義務教育年限の延長……………四〇二

三、第九回總會・實用夜學校の設立……………四〇五

四、市學政統一問題の再燃……………四〇八

五、第十回總會と内務省助成金・通俗講談會の開設……………四一二

六、第十一回總會・市及本會の通俗教育事業……………四一六

七、名譽會員の推薦・效績者表彰規程の設定……………四三二

八、第十三回總會・「都市教育」第百號記念特輯……………四三五

九、憲政教育に關する調査……………四三九

一〇、第十四回總會と表彰式・定款の一部改正……………四三三

一一、第十五回總會・井上府知事の教育者海外派遣……………四三九

一二、市教育會の回顧十五年……………四四四

一三、第十六回總會と表彰式・府市教育會合同問題……………四四九

一四、教育研究部の設置・第十七回總會……………四五二

一五、大都市聯合教育會の開催……………四五六

第三章

高木會長時代

(大正六年三月—大正九年四月)

一、高木男爵の會長就任・田川副會長の辭任……………四六五

二、第二回大都市聯合教育會……………四六九

三、定款改正の臨時總會・第十九回總會……………四七六

四、米國教育視察團の派遣……………四八一

五、第三回大都市聯合教育會……………四八五

六、第二十回總會と顧問創設・大音樂演奏會……………四九三

七、神宮並御陵參拜團の實施……………四九四

八、第四回大都市聯合教育會……………四九七

九、東京市小學校教員會の創立……………五〇四

一〇、第二回神宮參拜團・第二回音樂大會……………五〇六

第四章

田尻後藤會長時代

(大正九年六月—大正十四年三月)

- 一、第二十回總會・田尻子爵の會長就任……………五二一
- 二、市小學校教育改善要項……………五二四
- 三、中等學校入學者選抜問題……………五二九
- 四、東京市教育行政統一案の成立……………五三二
- 五、第五回大都市聯合教育會……………五三七
- 六、第廿一回總會・高木前會長一周年追悼會……………五三三
- 七、第廿二回總會・後藤男爵の會長就任……………五三八
- 九、江原評議員會議長逝去・澁谷幹事辭任……………五四二
- 一〇、第七回大都市聯合教育會……………五四四
- 一一、第廿三回總會……………五五〇
- 一二、大震火災と本會の活動……………五五三
- 一三、第八回大都市聯合教育會……………五六三
- 一四、東京市の教育復興狀況……………五七〇
- 一五、第廿四回總會・物故せる本會の三功勞者……………五七一

- 一六、内鮮聯合教育會の開催……………五七六
- 一七、第廿五回總會・府市教育會合同決議……………五八〇
- 一八、解散手續と殘務整理・創立以來の事業概要……………五八二

第四篇 帝都教育會時代

第一章 本會の更始躍進 (大正十四年十月—昭和八年八月)

- 一、社團法人帝都教育會の新定款……………五八八
- 二、第一回臨時總會・松平伯爵の會長就任……………五九四
- 三、會務擴張案の決定・事務所移轉と顧問推薦……………六〇〇
- 四、第二回以後の總會(第二回より第十二回まで)……………六一七
- 五、教育效績者の表彰(第一回より第十一回まで)……………六二四
- 六、調査會の組織と其活動・史蹟調査の問題……………六三七
- 七、社會教育部の事業……………六四四
- 八、雜誌「帝都教育」の發行・圖書及練習帳出版……………六四四

九、 兒童用學習帳の編纂發行……………六五一

一〇、 教員保姆養成事業……………六五五

一一、 東京府聯合教育會……………六五八

一二、 關東聯合教育會……………六六七

一三、 內鮮滿聯合教育會……………六八三

一四、 六大都市教育協議會……………六八八

一五、 中等學校入學試驗撤廢運動……………六九一

一六、 御大禮奉祝と全國教育大會……………六九五

一七、 教育擁護運動……………六九九

一八、 復興帝都の教育指標……………七〇三

一九、 湯地副會長の急逝……………七〇六

二〇、 師表德化の勅語奉戴式・鳩山文相の教員優遇……………七〇八

二一、 市域擴張と本會の調査事項……………七〇九

二二、 松平會長の表彰祝賀式……………七一三

二三、 教育界の二長老の長逝……………七二五

二四、 本會事務所の移轉……………七二六

第二章 本會最近の活動 (昭和八年八月—同十八年七月)

一、 總會と役員の異動……………七二八

二、 教育效績表彰者氏名……………七三九

三、 調査部會其後の活動……………七四三

四、 史蹟調査部の成果……………七五三

五、 社會教育部の活動……………七五五

六、 機關雜誌「帝都教育」……………七五九

七、 學習帳其他の出版……………七六四

八、 教員保姆傳習所の經營……………七六六

九、 東京府聯合教育會……………七七〇

一〇、 關東聯合教育會・教育效績者表彰……………七九八

一、時事對應の本會の活動……………八〇七

二、本會會計及資産の現状……………八四一

三、本會事業の功勞者……………八五〇

(附 録)

一、社団法人東京都教育會定款……………八五四

二、本會々員數……………八六〇

三、本會現在役員及職員……………八六一

四、本會顧問及各種委員……………八六五

東京都教育會六十年史 目次(終)

帝都教育會六十年史

第一篇 東京府教育談會時代

明治十六年七月—同二十年七月

一、創設の經過



我が帝都教育會は創立の當初「東京府教育談會」と稱し、後約五年を経て「東京府教育會」と改め、更に大正十四年東京市教育會と合同するに及びて、三たび改稱して現在の「帝都教育會」となつた。之を舊記に徴するに其の創設は明治十六年七月であつて、今を距ること實に六十年の昔である。而して創立當時の記録として今日に現存するものは、明治三十六年十二月、創設二十周年記念として編纂刊行せられた東京教育雜誌の臨時増刊『東京府教育會沿革誌』が唯一冊あるのみで、然かも其の際既に「此の書を編纂するに當り最も困難を感じたるは、創立以來明治二十一年に至る間の記録散佚したるが爲め、其の材料を得ること能はざりしことゝす」云々と、巻頭の凡例中に特記

してあるのである。況んや爾後更に四十年を經過した今日に於ては、當時本會の創設に關與した有志先輩も殆んど故人となり、其の情況を質すに由なく、纔かに遺つた前記の『東京府教育會沿革誌』の記事によつて、其の梗概を窺ひ得るに過ぎない。

『沿革誌』によれば「我が東京府教育會は明治十六年六月、東京教育社員長倉雄平、日下部三之介等の諸君發起人となり、府下學事に直接の關係を有する者と、特に教育に篤志なる者とに就きて、府下教育の氣脈を通暢し併せて其の改良進歩を計らんには、有志者の結合を求むるを以て最便法とする意を開陳せしに、賛成の有志者凡百二十餘名に達せり。即ち同月三日を以て始めて京橋區木挽町東京府商法講習所内の商工會議所に於て集會を催し、終に府下に一の教育會を設置することに決したり。乃ち同年七月一日を以て更に有志の協議會を同區内公立文海學校に開き、規則を議定し東京府教育談會と命名し、正副會長、幹事等の職員を置き、一年二回の開會をなせり。即ち會長には銀林綱男君、副會長には長倉雄平君其の選に當り、爾後該規則に由り定規の開會をなせしこと都合十四回に及びり。後規則の修正、職員の改選ありしかども、大體に於ては變更せず、而して此の間會員客員の演説をなせしこと前後四十七回、東京府學務課よりの諮問案並に會員よりの提出に係れる論題を討議せしこと七回、通俗教育會を開きしこと一回、其他他郡區委員を置きて學事的情況を諮詢し、或は議員を置きて重要な事件を議し、各郡區に部會を設け會員を派出して演説談話せしめ、又は東京府知事に向ひ建議せし等、主として府下教育の改良進歩を謀れり。」云々と。

是によつて見れば「東京府教育談會」の成立は明治十六年七月一日であつて、其の後特に發會式を行つたといふ記事もないから、或は之を略したのであらうか。會長銀林綱男氏は時の東京府書記官であり、副會長長倉雄平氏は同學務課長であつて、孰れも本會の創立には初めから發起人として關與して居た。而して幹事には文部省出仕日下部三之介、小學校長須田要、及び木寺安教の三氏が選舉せられて共に會務の處理に當つたのである。

二、當時教育界の情勢

是より先、我が東京府には既に明治十一年十二月に、府教育關係の有志によつて東京教育會と稱する會が組織せられ、事務所を日本橋常盤小學校内に置き、毎月一回會合して教育に關する演説討論等を行つて居た。その翌十二年には又別に學習院關係の人達によつて東京教育協會と稱するものが組織せられ、略ぼ同様の事を行つて居たが此の兩者は遂に明治十五年五月に至つて合併して東京教育學會と改稱し、西村貞氏を會長として新に會務の擴張を圖つた。これが現在の帝國教育會の前身たる大日本教育會の濫觴であつて、前記『沿革誌』の「東京教育社員長倉雄平、日下部三之介等の諸君」云々とあるは、此の東京教育學會とは別に「東京教育社」と稱するものがあつたものと思はれる。

當時我が國には自由民權の思潮横溢して、社會のあらゆる方面に其の影響を及ぼし、殊に明治十四年十月國會開

設の大詔煥發するや、政黨組織の實際運動が熾烈な勢を以て勃興し、世情極めて騒然、政談演説討論等都鄙到る處に盛に行はれ、教育界も亦この餘波を受けて、學校教員、殊に青春の血に燃える若い教員中から往々にして教職員としての常規を逸する者が出たので、時の文部卿福岡孝弟氏は明治十四年六月「小學校教員心得」を發布して教員たる者の本分を訓示し、同年十二月には教育會の監督取締の爲に「府縣（又ハ町村）に於テ學事ニ就キ諮詢攻究ノ爲教員會ヲ開設セントスルモノハ其ノ規則ヲ具シ可伺出、且右開會ノ都度議事ノ顛末可届出、此旨相達候事」と嚴達した。而して一方には「小學校教員免許狀授與方心得」を布達して、各府縣をして學校教員の資格檢定を行はしめ、又一方には「學校教員品行檢査規則」を設けて教員の行動に就て查察を行はしめ、同十六年八月には小學校教員の資質改善の爲に府縣に對して教員講習所を開設し、同時に督業訓導を置きて學校を巡回指導せしむることを勸奨する等、種々畫策する所があつた。

我が東東京府教育談會は實に此の如き時代を背景として生れたのであつて、その後二ヶ月を経た明治十六年九月九日、文部大書記官辻新次氏を會長とした大日本教育會が、曩の東京教育學會を改組して「同志結合して全國教育の普及改良及上進を圖り併せて我が政府の教育上の施政を翼賛する」を目的として、盛大なる發會式を舉げ華々しきスタートを切つたのである。

三、會則と役員異動

東京府教育談會創設當時の會則は左の如きものである。

東京府教育談會規則（明治十六年七月一日制定）

- 第一條 本會ハ府下教育ノ氣脈ヲ通暢シ併セテ其改良進歩ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ノ目的ニ同意ノモノハ何人ヲ問ハズ會員タルコトヲ得
- 第三條 徳望アル人ニシテ本會ニ裨益アリト認ムルモノハ名譽會員トス
- 第四條 本會ハ毎年二回即チ三月九月ニ於テ總會ヲ開キ左ノ事ヲ舉行スベシ
 - 一 本會ノ庶務會計及成績ノ報告
 - 一 教育ニ關スル演説及討議
- 第五條 本會ハ前條總會ノ外會員在住ノ郡區ニ於テ獨立或ハ聯合シテ毎月若クハ隔月一回部會ヲ開キ左ノ事ヲ舉行スベシ
 - 但シ部會ノ名稱ハ東京府教育談會何郡區部會ト稱ス
 - 一 部會ノ庶務會計及成績ノ報告
 - 一 教育ニ關スル演説談話及討議
 - 一 教育ニ關スル學術ノ攻究
- 第六條 本會ハ名譽會員中ヨリ一人ヲ推シテ總裁トナシ本會ノ統攝ヲ請フモノトス

第七條 本會ニ職員ヲ置ク左ノ如シ

- 一 會 長 一人 本會一切ノ事ヲ總理ス
- 一 副 會 長 一人 會長ヲ輔ケ會長事故アルトキハ其代理ヲナス
- 一 評 議 員 會長ノ諮詢ニ對シ本會ノ利害得失ニ關スル事件ヲ評議ス
- 一 幹 事 五人 事務ヲ分掌ス
- 一 書 記 庶務ニ従事ス

第八條 部會ニ職員ヲ置ク左ノ如シ

- 一 會 長 一人 部會一切ノ事ヲ總理ス
- 一 副 會 長 一人 會長ヲ輔ケ會長事故アルトキハ其代理ヲナス
- 一 幹 事 十人以上 事務ヲ分掌ス
- 一 書 記 庶務ニ従事ス

第九條 本會部會ノ會長副會長及幹事ハ各其會ニ於テ投票ノ法ヲ以テ之ヲ選舉シ其任期ヲ各二ケ年トス

但シ改選ノトキハ前任ノモノヲ重選スルコトヲ得

第十條 評議員ハ各部會ノ會長副會長幹事ヲ以テ之ニ充ツ

第十一條 本會部會ノ書記ハ各會長之ヲ特選スルモノトス

第十二條 本會々費ハ壹名ニ付毎會金拾五錢トシ部會々費ハ各部會ノ定ムル所ニ依ル

第十三條 本會ハ每會報告書ヲ調製シテ會員ニ配付スベシ

第十四條 此規則ヲ執行スル爲ニ要スル細則ハ各會長ノ定ムル所ニ依ル

第十五條 此規則ハ會員十名以上ノ發議ニヨリ總會ノ議決ヲ經ルニアラザレバ變更スルコトヲ得ズ

當時の會員數は僅に百二十三名に過ぎなかつたが、其の翌十七年三月末には三百五十名に増加し、同十九年三月末までは殆んど増減なく、二十年三月末に至つて一躍五百四十一名に増加し、翌二十一年七月末には五百七十七名となつたのは、特に募集委員を設けて之が擴張を圖つた結果であつた。

此の間に於ける役員の変動は、明治十八年三月、發會當初の役員の任期満了により、總集會に於て改選を行ひ、會長銀林綱男氏及び幹事木寺安敦、須田要の兩氏は再選せられ、副會長には米本少藏氏、幹事には庵地保、金子治喜、松平忠恕の三氏新たに當選した。會則の幹事の定員五名は是で始て揃つたのである。而して翌十九年三月の總集會には臨時に副會長及び幹事の補缺選舉を行ひ、副會長には幹事の庵地氏、幹事には、庵地氏に代つて和久正辰氏、松平氏に代つて大東重善氏が新に當選した。

四、事業の大要

而して本會の事業としては、『談會』と稱した會名の示す通り、主として當時知名の學者教育者又は本會役員等の講話演説を行ふことであつて、總會に於ても部會に於ても常に行事の中心をなすものは此の講演であつた。『沿革誌』に列擧せる演題を通覽すれば、辻新次氏の「教育論」、高田早苗氏の「宗教管見」、英人デニング氏の「道德教

育」、大窪實氏の「國民教育」等の一般論もあれば、又三宅秀氏の「五官の用」、中川謙二郎氏の「化學の起原沿革」、山路一遊氏の「我國の教育と理科の必要」、後藤牧太氏の「音響論」、中川元氏の「色盲の說」等の學術講話もあり、或は「教育概論」、「學校の躰け方」、「女子の教育」、「讀方教授の談」、「地理教授の談」、「唱歌の必要」、「學校衛生、體育の必要」といふが如き學校教育の實際に關したものもあり、又或は「教育會の眞目的」、「團結力の要素」、「教育會を流行物たらしむる勿れ」、「府下教育の進歩如何」といふ如き教育會自體に關したものもあり、中にも奇抜なるは「英語を我邦語となすべし」、「下等人種を教育する學校の教授法」などいふ演題もある。

之を要するに『談會』時代の本會事業は此の講演會の開催と及び此の講演の概要を輯録印刷せる報告誌の發行とであつて、此の報告誌は「明治十六年七月より同二十一年七月に至る五箇年間に前後八冊に達し、内容は殆ど當今の雜誌と同様の材料を以て充たされたり」と、『沿革誌』の一節に傳へてゐる。

尙總會及び部會に就て『沿革誌』には、「明治十六年以後同二十一年に至る前後六ヶ年は總會の事業と通常會の事業との區別明かならず、只來會する人員の多少に由りて異なるが如くなりしも、彼の各郡區に部會支會を置くや、支部會に於て開くものを通常會又は常集會と稱し、本會に於て開くものを總會又は總集會と稱したり。而して其の舉行事件は演説討論を主たる事業とし、間々講義を加へ、或は役員選舉も行ひたるものとす。而して當時會堂として用ひられたるは今の外國語學校所在地にありし元東京大學理學部講義室にして（後に東京大學豫備門講義室となる）出席會員の數は常に百名内外、多きときも百五十餘名に達せしに過ぎざりき。其の他の件は今之れを知るに由な

し」と。以てこの時代に於ける本會の情況を略ぼ想見することを得るのである。

當時本會の事務所は便宜上、幹事在職の小學校内に置かれたものの如くで、幹事の異動に伴つて三たび其の場所を移して居る。即ち

明治十六年七月 本郷區弓町二丁目八番地（習性小學校？）

同 十八年七月 京橋區竹川町十八番地（熊谷小學校？）

同 十九年七月 芝區愛宕下町四丁目六番地

本會の事務といつても極めて單純で簡明であつたから、或はこれで間に合つたのであらうと思はれる。

第二篇 東京府教育會第一期

明治二十年七月—同三十一年四月

第一章 本會の基礎確立

一、會則の大改正と新陣容

明治十八年十二月、内閣官制改革最初の第一次伊藤内閣に文部大臣として森有禮氏の就任を見たことは、何といつても我が國の學制史上極めて重大なる意義を爲すものであつて、森氏は其の明敏犀利なる頭腦を以て、豫て文部省御用掛として研究計畫して居た教育制度全體に亘る大改革を斷行し、國家主義によつて一貫した教育方針の下に學制系統を確立したのみならず、教育會等に對しても其の重要性を認めて、明治二十年四月の大日本教育會第四回總集會の席上に於て、同會改革に關する詳細なる具體案を提出して、中央教育會としての組織の強化及び全國教育會の有機的統一に就て熱心に主張する所があつた。同會は此の森文相の意見に基いて其の後間もなく會則に重要な改正を行ひ、事業の上にも一大躍進を見るに至つたのである。

(10)

我が「東京府教育談會」も亦斯様な機運に促がされて、明治二十一年六月臨時總集會を開き、會名を東京府教育會と改め、従來の規則に大改正を加へ、茲に本會の基礎を確立して新に諸般の事業を企畫經營することになつた。即ち『沿革誌』の記事によれば、

明治二十一年六月二日、芝公園彌生社に於て臨時總集會を開き、従來の規則を改め「東京府教育會」と改稱し、従來郡區にありし部會を廢し、全體の力を中央に集めて改良上進の途を講じ、常議員五十名を置きて重要な事件を議し、隔月に常集會を開き、及び毎月雜誌を發行して會員に頒ち、又學術講習所を開き通俗講談會を催す等、専ら實際的の事業を興すこととせり。云々。

當時改定の規則は我が教育會として劃期的のものであるから左に其の全文を掲げて置くことにする。

東京府教育會規則 (二十一年七月一日制定)

第一條 本會ハ府下教育ノ改良進歩ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第二條 本會ノ目的ニ同意ノモノハ何人ヲ問ハズ會員タルコトヲ得

第三條 徳望アル人ニシテ本會ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請フテ名譽會員トナスコトアルヘシ

第四條 本會ハ隔月即チ一月三月五月七月九月十一月ニ之ヲ開キ左ノ事ヲ舉行ス

一 會務ノ報告

一 教育ニ關スル議事談話等

第五條 本會ハ職員ヲ置クコト左ノ如シ

一 會 長 一人 本會一切ノ事務ヲ總理ス

(11)

- 一 副會長 一人 會長ヲ輔ケ會長事故アルトキハ其代理ヲナス
- 一 理事 五人 庶務ヲ分掌ス
- 一 書記 庶務ニ従事ス

第六條 會長副會長ハ會員ノ投票ヲ以テ選舉シ其任期ハ滿二ケ年トス

但改選ノトキハ前任ノモノヲ重選スルコトヲ得

第七條 本會ノ理事書記ハ會長之ヲ特選スルモノトス

第八條 本會ハ常議員五拾名ヲ置キ重要ノ事件ヲ議ス

第九條 常議員二十五人ハ會長之ヲ特選シ二十五人ハ會員ノ投票ヲ以テ選舉シ其任期ヲ滿二ケ年トス

第十條 會員十名以上ノ連署ヲ以テ建議書ヲ差出シタルトキハ之ヲ常議員會議ニ附スヘシ

第十一條 會費ハ一名ニ付一ケ年分金六拾錢トシ一月七月兩度ニ前納スルモノトス

但新ニ入會スルモノハ其月ヨリ起算シテ納ムルモノトス

第十二條 十ケ年以上ノ會費ニ該當スル金額ヲ一時ニ寄附スルモノハ爾後會費ヲ要セス終身會員トス

但本文ノ寄附金ハ本會ノ資本ニ充ツ

第十三條 本會ノ經費ハ會員ヨリ徵收スル會費ト其他ノ收入金トヲ以テ之ニ充ツ

第十四條 本會ハ隔月雜誌ヲ刊行シテ會員ニ配付ス

第十五條 本會ハ特ニ學術講習所又ハ通俗教育談話會等ヲ開設スルコトアルヘシ

第十六條 此規則ヲ施行スル爲ニ要スル細則ハ會長之ヲ定ム

第十七條 此規則ハ總會ノ議決ヲ經ルニアラサレバ變更スルコトヲ得ス

これを前の東京府教育談會の規則と對照すれば、

- 一、各郡區の部會に關する條項を全部削除したること
- 二、總裁推戴の規程を省略したること
- 三、評議員は之を常議員と改め其の定員を五十名として、半數は會長の特選、半數は會員の投票によつて公選としたること
- 四、會費を年額六十錢として十ケ年分を一時に寄附するものを終身會員とすること
- 五、每會配付せし報告書を止めて隔月に雜誌を刊行會員に配付すること
- 六、學術講習所又は通俗教育談話會を開設する途を開いたこと

等が改正の要點であるが、更に其の後に至つて特に必要を認めたる爲か、同年中に左の一條を追加した。

第十八條 會員中本會ノ規則ヲ遵守セス若クハ本會ノ名譽ヲ汚ス等ノコトアルトキハ會長ノ見込ヲ以テ退會セシムルコトアル

ヘシ

この會則によつて同年七月改選せられた役員の名は左の如くである。

- 會長 渡邊 孝
- 副會長 元田 直
- 理事 大東 重善 目下部 三之介 小田 深造 小谷 茂實 鶴橋國太郎
- 書記 太田 安茂 淺 香 恒
- 會計委員 布施 仲男 小 谷 茂實
- 庶務委員 加藤 淡 岡田 元熙 戶 倉 廣 胖

常議員

大東重善	日下部三之介	木寺安敦	和久正辰	矢島錦藏
色川園士	小谷茂實	帖佐雄介	須田要	竹尾住清
丸山淑人	金子治喜	鶴橋國太郎	清水直義	戸倉廣胖
大澤彌治	丹所啓行	山崎彦八	棚橋正	梅澤親行
太田實	今井市三郎	石崎政汎	宮川盛	小澤政胤
伊藤正信	稻田政吉	石田爲邦	林厚德	林交周
穂積敬重	畑田正養	本莊太一郎	大河内正質	太田貞之
岡本益道	勝浦柄雄	田中直達	棚谷祐善	久住秋策
桑原戒平	藏田信	山下政愛	町田今亮	益田包義
藤井一虎	澤簡徳	北澤正誠	三淵隆衡	元田直

(以上公選)

(以上特選)

會長渡邊孝氏は東京府書記官第二部長であり、副會長元田直氏は東京府師範學校校長兼東京府學務課長であつて、其の他の常議員は孰れも本府の初等中等の校長教職員若くは教育關係者中の有力者を網羅したのである。

此の如く新に陣容を整へた常議員會は、其の後本會活動の中樞機關として屢々開會せられ、明治二十一年十月には幼稚園保姆講習所を開設し、翌二十二年六月には小學校教員速成傳習所を、同二十四年一月には家事專科教員傳習所を開設する等、次ぎ／＼に教員養成機關の常設的事業を創始せる他、二十二年五月には始めて小學校教育品展

覽會を開催して長くも 皇后陛下 皇太子殿下の行啓を辱うし、又當時に於ける教育上の重要問題に就て、或は東京府知事の諮問に對する審議答申をなし、或は本會の意見を具して其の筋に建議する等、直接會務に關する事項は勿論、後年特設せられた調査會に屬する調査事項も亦此の常議員會に於て委員を擧げて研究に努むるなど、頗る目覺ましい活動をしたのである。

當時本會の名譽會員は

子爵 芳川 顯正 侯爵 蜂須賀茂韶 渡邊 洪基 男爵 高崎 五六

の諸氏で、孰れも東京府知事として在職せられた人々であるが、新會則には前記の通り總裁推薦の條項は省かれてゐるにも拘はらず、二十二年六月の總會に於て改選せられた役員の中に最初に總裁男爵高崎五六の名を掲げてゐるのを以て見れば、こゝで總裁制を復活して始めて此の推薦を行つたものと思はれる。尙此の時の總會の役員改選では會長副會長には異動なく、理事には大東重善、矢島錦藏、日下部三之介の三氏當選して、常議員には數名の交替があつたが、これは皆東京府又は中等學校の職員の地方轉出による補缺である。而して會員數は明治二十二年三月末現在六百三名、同二十三年三月末現在六百十四名で、以後二三年間は多くも七百名に達しなかつた。

二、常議員會の活動

本會の常議員會は前項の規則改正以後殆んど隔月一回、毎年少くとも六回以上開會して諸般の會務を評議し、種

々なる事業を計畫し、其の重要な事項は特に委員を擧げて之に調査を委託し、成案は更に通常會又は總集會の議に附して決定し實行に移す等、常に熱心なる活動を續けた。今其の主なる事項を抄記すれば左の如くである。

- 一、森子爵の意見に係る學科教授法(東京府諮問——委員附託)
- 一、幼稚園保姆講習所設置の件(委員附託)
- 一、府教育に功績ある者を本會より勸奨する方法(可決)
- 一、府設置の唱歌體操英語の三講習所及び學術講義所を悉皆本會へ譲り受くる建議案(可決)
- 一、本會にて書籍出版事業を興し本會維持の資金と爲す件(否決)
- 一、教育品展覽會開設の件(委員附託)
- 一、小學校教員速成傳習所設置の件
- 一、小學校制度要領取調委員を設くる件
- 一、商議員會規則制定の件
- 一、裁縫科教員傳習所設置の件
- 一、教育上功績者推選の件
- 一、各府縣聯合教育會大懇親會開會の件
- 一、地方學事通則、退隱料遺族扶助料法、小學校令、教育に關する勅語等に關するものを編纂發行の件
- 一、本會の經費豫算を定むるの件
- 一、本會會計決算は年度末に議員の認定を經るの件

(以上二十三年)

- 一、雜誌原稿名譽寄贈者を置くの件
- 一、雜誌材料蒐集の爲め通信員を置くの件
- 一、習字帳字形大小調査結了府廳に建議の件
- 一、私立小學校代用に關する取調の件
- 一、習字帳改良及び小學校高等科生徒に修身書を持たしむるの可否
- 一、大日本教育會より依頼せられたる府下に於て一名の教育功績者を選擧する件
- 一、入會者あれば職員會にて一應身元取調べの上許否を定むる件
- 一、貧民兒童就學取調委員設置の件
- 一、會務擴張方案
- 一、故森子爵獎學金委託の件
- 一、小學校補習科施設の件(府知事諮問——委員附託)
- 一、幼稚園保姆講習所存廢の件(當分休業に決す)
- 一、東京市郷土地理歴史編纂の件
- 一、郡委員設置の件
- 一、小學校教員傳習所存廢の件(無期存續に決す)
- 一、體育振起策

(以上二十四年)

(以上二十五年)

以上は明治二十一年より二十五年に至る五ヶ年間の比較的重要な事項を擧げたのであるが、此の間に明治

二十三年五月常議員會は商議員會と改まり、定員を三十名に減じ、新に商議員會規程を定め、議長を互選して議事を統理せしむることとし、宇川盛三郎、元田直、伊澤修二の諸氏相次で議長となつた。

三、森文相の學科教授法

府知事諮問に對する本會の答申

明治二十一年七月、第一回の常議員會に於て眞先に議題となつたものに森文相大臣の學科教授法に關する意見書といふがある。これは同年六月に東京府知事から本會に諮問せられた問題で、本會は之を會長特選の矢島錦藏、棚谷祐善、石崎政汎、清水直義、山崎彦八の五氏を委員に擧げて調査せしめ、其の成案を更に通常會の議に附して決定の上府知事に答申した。其の全文は左の通りである。

學科教授法

森 有 禮

學科教授の理論は先覺説き盡して今新に論ずるを要せざる如しと雖も、本邦現行の教授法を目撃するに不完全の點甚だ多く、殊に學科體裁の教授法如何の問題に至りては論端をも未だ開きたる者無きが如し。實に是れ教育上重大の一問題にして、本會の如きは須らく進んで考究すべき事たるべし。余先づ之を一校一教師と一校數教師との二類に分ち此の問題に對する所の意見

を述べべし。一校一教師の教授法は生徒の數三十以内なれば一個の心腦善く諸學科を聯想し交も進め以て生徒をして不要の苦と時とを免れしむるを得るは容易なるべしと雖も、生徒の數増すに従ひて其の難きを加ふるや辯せずして明かなり。一校數教師の教授法は之と異り數個の心腦をして共同一致せしむるに非ざれば充分の效を見るを得ず、唯生徒をして種々の不利を受けしむるのみ。又學科を數個に分ち一教師一學科を擔當して他の教師の教授法如何を顧みず、或は擔當の學科時間のみを動むれば事足りりと心得る如き者は、要するに其の主とすべき教育に眼を着けず單に其の擔當學科を事とする者にして、斯の如き教師は其の教方の精粗を問はず概して教育の道を辨へざる者と見て可なるべし。而して斯の如き教授法の行はるゝ所の學校は概して不完全なりと豫定し得べし。一校一教師の教授法と一校數教師の教授法との異同は凡そ上述の如しと雖も、其の目的たる教育の要を得るは其の道一に由らざるを得ず。一個の心腦と數個の心腦とを以てするの別に拘はらず、其の教授法をして諸學科の聯進を期するに足るべき諸能力の共同一致を得せしむるの道に由るのみ。諸學科の聯進とは例へば地理科を教ふるに、初め之を一科として教へざるも歴史科讀書科算術科共に教科書中の地名等を地圖にて示し歴史中にて記憶すべき地理地名、讀本中に於て有名なる人物等の出所地名、算術中に於て殖産製造商路津港等有要の地誌地名を、一個人の心腦にても數個の心腦にても三科聯進を期し、一科の教は以て同時に他の二科の教を助け進む方法たるべきものとなすが如し。是れ則ち教育を達する方法を數條圖一の規に則り、一は以て生徒をして不要の苦と時とを免れしめ一は以て學校經濟の整理をして其の要を得せしむるにあり。

右に對し同二十二年六月本會調査委員の答申せる要領は左の通りである。

諸學科聯進の理論は實に正理を得たるものと信ず、然れども諸學科を混同して之を分別せざるは善ならざるが如し。其の理由は

一 各知識には自ら聯絡關係の厚薄深淺あり、其の厚く深きものは集りて一學科をなし、他の知識の同じく關係の厚く深きも

の、集り一科を爲すものと區別せらる。是れ各學科の區別ある所以なり。假へば數に關係する知識は集りて數學をなし、文字に關係する知識は集りて讀法となり作文となるが如し。教授の上には其の關係聯絡の最厚く深き知識を集め其の漸く遠く密ならざる者より分離するを要す。然らば一教授には一學科を專とするを正則當然のことと謂はざるを得ざるが如し。偶々他學科の事に互るは所謂變通のみ、唯教授に巧なる者のみ之を用ひて授業の純音を避くることを得べし。故に各學科は互に相分れて各一系統を爲し、勿論他の學科と關係はあれども各又區別判然として順序の整頓せるを要するなり。

一 凡そ知識を授くるに當つて其の效を奏せんには心智の辨別性に訴へざるべからず。善良なる記憶は辨別性に在りとは學者の既に一致する所なり。此道理は各學科の上に現はれ各時間の上に現はれて實際の效用を擧ぐることを得るなり。此上より考ふるも一概に諸學科を混同するは可ならざるが如し。

一 授業法の上に就きて見る時は純音の不快を避くるに注意せざるべからず、各學科を混同して來る時間も來る時間も大同小異なる者のみを教ふるは忌むべきものと如し。

一 今日教育の進歩は諸種の元素より成る者なれども諸學科の分別も亦其の一なるが如し、是れ教育上掩ふべからざる實際なり。

以上の理由に依りて各學科を混同して區別なき一體となすは善ならざるが如し。故に唯諸學科の關係聯絡を見て經濟的教授を施すは宜しく教育者の研究すべき所ならんと信ず。而して其の關係を見るに心意訓練上の關係、知識上の關係、授業上單に教師の注意によりて偶然生ずる關係の三種あり。而して此れ等の關係に至りては教育諸家の既に大に論ぜる所なり、故に益々教育學學校授業法及び管理法を研究せば期せずして大臣の意旨を達することを得べし。

箇様な學校教育の實際問題に就て文部大臣が自ら其の意見を發表して、教育會の考究を要望したといふことは極

めて異數の事例であり、然かも其の答申が偶々森文相不慮の薨去後四ヶ月を経て提出せられたこともまた感慨の深いものがあるのである。

四、教員保母養成事業

(一) 幼稚園保母講習所

明治二十一年七月、本會は府下に於ける幼稚園の開設漸く多く、隨て之が保育を擔當すべき適當なる保母の養成を必要とする情勢に鑑み、本會の事業として附屬保母講習所を新設することを決議し、主幹を木寺安教氏に、商議員を目下部三之介、稻田政吉、帖佐雄介、金子治喜、小澤政胤の諸氏に委嘱し、諸般の準備を整へて、十月五日芝公園内芝麻布共立幼稚園に於て其の開所式を舉行した。これが今日まで繼續して居る本會の教員養成事業の最初のもので、今を距ること五十五年の昔である。創設當時の規則は左の通であつた。

東京府教育會附屬幼稚園保母講習所規則

第一條 本所は幼稚園保母に必要な學科即ち開誘法諸遊戯及び唱歌等を修めんとする者の爲めに専ら速成を主として之を授

第二條 講習期限は凡六ヶ月とし授業時間は毎日三時間以内とし通常學校授業時間の外に於て之を定む

第三條 休業日を定むること左の如し

土曜日 日曜日 大祭祝日等

第四條 講習員たるを得る者は左の二項の一に該当するを要す

一 幼稚園保母若しくは小學校教員及授業生の職にある者

一 年齢十八年以上四十年以下身體健康品行端正にして相當の學力を有する者

第五條 講習を望む者は志願書に履歷書を添へ本會事務所へ差出すべし

第六條 講習を了りたる者には證明狀を授與す

第七條 本所に主幹一人を置き一切の事務を管理せしむ

第八條 本所に商議員五人を置き重要な事項を評議せしむ

第九條 授業料は一ヶ月一人に付金五十錢として毎月十六日(當日休業ならば翌日)之を徴收す

第十條 授業料は入學退學の際に限り修業半ヶ月を出てざる者は半額とし講習中は自己の疾病等により缺席するも猶全額を徴收す

第十一條 講習員病氣等にて課業を缺くときは其の時々講習所へ届出べし若し無断にて半ヶ月以上に涉るときは除名す

當時入所の講習員は十四名で、爾後毎年一回入所生徒の募集と卒業式とを行ひ、毎回十名乃至二十名の修了生を出した。

(二) 小學校教員速成傳習所

翌明治二十二年一月、本會は更に小學校教員速成傳習所設置の件を議定し、東京府の認可を得て直に其の實行に着手した。

小學校教員速成傳習所規則

第一條 本所は小學校教員たらんと欲するものに速成を主として必要の學科を教授する所とす

第二條 修業期限は一年以内とし授業時間は毎日凡四時間とす

第三條 休業日を定むる左の如し
日曜日 大祭祝日 歳末歳首(十二月二十八日より一月四日まで)

第四條 試業は大試業小試業の二とし小試業は隨時之を行ひ大試業は一期の末に至り之を行ふ

第五條 大試業に及第したるものには證明書を授與す

第六條 講習を望む者は左の二項のものたるべし

一 小學校教員となるべき志望のもの

一 年齢十七年以上にして身體健康品行端正教員の任に堪ふるもの

第七條 傳習員入學の期は毎年五月十一日の二回とし募集の人員日限等は豫め廣告すべし、但臨時に募集することあるべし

第八條 講習を望むものは志願書に入學試験手数料金三拾錢を添へ本會事務所へ差出すべし

第九條 授業料は一ヶ月一人に付高等科金七拾五錢尋常科金五拾錢とし毎月十六日(當日休業なれば翌日)之を徴收す

第十條 授業料は修業半月(日數を以てせず)十五日前後を以て區別す)を出てざるものは半額とす
傳習中自己の病氣等により缺席するものも尙全額を徴收す

第十一條 本所に主幹一人を置き一切の事を管理せしむ

第十二條 本所に商議員五人を置き重要な事項を評議せしむ

第十三條 學科程度並に試業法は別に之を定む

かくて會長は此の傳習所主幹を前本府師範學校長和久正辰氏に委囑し、三月更に商議員を竹尾住清、小谷茂實、岡田元熙、小田深造、棚谷祐善の五氏に委囑した。越えて六月講師四名を囑託し、學科を修身教育國語漢文算術習字の六科と定めて、同月三日開所式を京橋區木挽町東京商工會議所内に舉げ授業を開始した。これが本會教員養成所の嚆矢であつて、當時の入學生は六十四名であつた。同年十二月十一日第一回卒業式に於て卒業證明書を授與した者は其の中の十九名である。

爾後毎年十二月には保姆講習所と共に本所卒業生を府下教育界に送り出して、當時未だ甚だ不十分であつた小學校教員の補充に努めたのであるが、明治二十五年に至つて保姆講習所は一時之を休止し、新に家事專科教員傳習所を附設して、府下小學校の要求に應ずることにした。

かくて明治二十六年四月、東京府より本所卒業生に對して教員資格授與の件が認可せられ、茲に始めて傳習所の基礎が確立するに至つた。是より先本會は傳習所卒業生の資格檢定に關して東京府に稟請し、其の内示によつて傳習所の規則に大改正を加へ左の要項を具して認定を申請したのである。

一、本所は京橋區本材木町市立寶田尋常小學校を假用す

一、本所學科及其の程度、毎週教授時間は別表の通り(別表省略)

一、本所入學者資格は高等小學校卒業の者若くは同等以上の學力あるものとす

一、本所入學者年齢は滿十七年以上とす

一、本所卒業試験問題は傳習所に於て選定し小學校教員檢定委員の承認を受くるものとす

一、本所卒業試験答案は傳習所に於て精査の上及第と認むる者は小學校教員檢定委員の審査を受くるものとす

一、實地授業を練習せしむるに足るべき附屬小學校は當分日本橋區濱町二丁目十一番地相愛尋常小學校を以て之に充つ

(三) 家事專科教員傳習所

明治二十三年六月本會商議員會は更に裁縫傳習所設立の件を議定し、日下部三之介氏を所長として教務主幹を樋口米子氏に委囑し、翌二十四年二月假に神田區錦町私立錦美小學校内に於て授業を開始した。規則は大體保姆講習所に同じく、傳習期間は凡そ一ヶ年で毎日二時間の授業を爲し、傳習員の資格は小學校裁縫科授業生免許狀所有者若しくは年齢十八年以上四十年以下の女子の裁縫教員志望者といふ規定であつた。而して翌二十五年に至つて之を家事專科教員傳習所と改稱し、其の内容にも若干の變更を加へた。此の傳習所は同二十六年六月東京府知事より卒業生の無試験免許狀下附認可の指令を受け、こゝに本會附屬の教員養成所卒業生は總て無試験檢定によつて教員たるの資格を與へられることになり、卒業生も年を逐うて増加し、明治二十七年八月本科並に家事專科教員傳習所の

卒業式を東京府尋常中學校内に於て舉行した際には、卒業生有志の發起によつて同窓會の組織成り、永く傳習所との連絡を圖ると共に同窓相互の親睦を篤くすることになった。

同二十八年八月、一時授業を休止してゐた保姆講習所は規則を改正して再び開所することに決し、入所志願者を募集した。

幼稚園保姆講習所規則

- 第一條 本所は保姆を養成するを目的とす
 - 第二條 本所の教科目は修身、教育、理科、體操、手藝及保育法とす
 - 第三條 習業期限は凡一ケ年とし授業時間は毎日三時間とす
 - 第四條 休業日は日曜日、大祭祝日、夏季冬季とす
 - 第五條 講習員たるを得るものは年齢十七年以上にして身體健康品行端正且高等小學校(四ケ年)卒業の者又は之と同等以上の學力あるものとす
 - 第六條 講習員たらんと欲するものは願書に履歷書並に入學試験手数料金五十錢を添へ本會事務所へ差出すべし
 - 第七條 本所規定の教科を卒したるものには證明狀を授與す
 - 第八條 本所に教務主任一人を置き教務一切の事を掌らしむ
 - 第九條 授業料は一ケ月金七拾錢とす但在學中は缺席するも猶全額を徴收す
 - 第十條 講習員にして本所規定を守らざるものあるときは除名す
- 講師は岩谷英太郎、田中ふさ、植村くにの三氏に委嘱し、同年十二月三十四日大日本教育會講堂内に於て本科教

員傳習所及び家事科傳習所の卒業式を舉行すると共に、併て保姆傳習所の開所式をも舉行したのであつた。

明治二十九年四月、會長は太田安茂氏を傳習所主務員に任じ、又議員會の決議に由つて金子治喜、梅澤親行、多田房之輔、丹所啓行、奥村憲令の五氏に傳習所商議員を依嘱した。其の後右委員は屢々會合して種々協議を重ね、同五月に至り傳習所事務規定及び傳習所商議員規程を制定した。

傳習所事務規定

- 第一條 小學校教員傳習所家事科教員傳習所及幼稚園保姆傳習所に主幹一人を置く
主幹は會長の指揮を受け所務を整理し教授を擔任す
 - 第二條 主幹は參事會にて毎傳習所に三名の候補者を推薦し會員中に付き選任す
但其の任期は其の傳習所々定の修業期間とす
 - 第三條 教師の委嘱及解除は主幹の申告により會長之を行ふ
 - 第四條 主幹は所務執行上重要な事件あるときは之を會長に申告すべし
 - 第五條 各傳習所を通じて事務員一人を置き會長理事長及主幹の指揮を受け庶務に従事す
 - 第六條 事務員は會長之を選任す
- 傳習所商議員規程
- 第一條 各傳習所を通じて商議員五名を置く
商議員は各傳習所に關する重要な事項を商議す
 - 第二條 商議の事項は會長の諮詢又は商議員の發議に依る

第三條 商議員は議員會に於て會員中より公選す
第四條 商議員の任期は一ヶ年とす

此の規定によつて、同七月教員傳習所主幹には和久正辰氏が改めて選任せられたが、同九月に至つて角谷源之助氏代つて主幹となり、教育科の教授を擔當し、家事科教員傳習所主幹は丹所啓行氏、幼稚園保姆傳習所主幹は多田房之輔氏選任せられた。然しながら丹所、多田の兩氏は暫くにして之を辭退せられ、三十年一月には田中ふさ女史が代つて保姆傳習所の主幹となり、同年八月には谷田部じゆん女史が家事科傳習所の主幹となつた。孰れも其の前より各傳習所の囑託教員であつたのである。而して三十年七月以降傳習所の商議員は富岡總藏、山崎彦八、井上守久、市川雅飾、高橋磯八郎の諸氏之が選に當り、傳習所に關する重要事項は總て此等商議員の協議に依つて決定せられたのである。尙當時の教場は教員傳習所は前記京橋區寶田尋常小學校、家事傳習所は麴町區飯田町四丁目雅松小學校であつた。

五、教育品展覽會の開設

明治二十二年は、我が國萬世不磨の大典たる帝國憲法發布の年である。此の最も記念すべき時に當つて、全國民は勿論、輦轂の下に在る我が東京府に於ては特に種々なる慶祝の行事が行はれたのであるが、本會に於ても亦之を

記念する爲に小學校教育品展覽會の開催を企畫し、早くも二十一年十二月に常議員會の問題として、會長は直に之を特別委員に附託して調査せしめ、二十二年一月の通常會に於て左の規則を設定した。

小學校教育品展覽會規則

- 第一條 本會の目的は府下小學校の教育を奨励し且公衆をして普通教育の價値を知らしむるにあり
- 第二條 本會は東京府教育會に於て之を設く
- 第三條 本會會場は……と定む
- 第四條 本會は明治二十二年五月中二十日間開會するものとす
- 第五條 本會の陳列品は府下小學校及教員生徒の成績品なりとす
- 第六條 本會の陳列品は概ね左の項目に據るものとす
 - 第一項 小學校建物敷地の圖面
 - 第二項 小學校々規
 - 第三項 小學校諸表簿
 - 第四項 教員の工夫若しくは製作に係る考案教授用器械及標本類
 - 第五項 生徒の書畫作文裁縫其他製作品
- 第七條 本會は名譽會員の内より一名を推戴し總裁を請ふものとす
- 第八條 本會に左の役員を置く
 - 一 會 長 一名
 - 一 幹 事 長 一名
 - 一 幹 事 十名

一 書記 若干名
一 審査委員長 一名
一 審査委員 二十五名

第九條 會長は東京府教育會長之を稱す

第十條 本會役員は會長之を選任するものとす

第十一條 幹事長幹事は本會諸般の事務を整理し書記は幹事の指揮を受け事務に従事し審査委員は出品の成績を審査し其優劣を判定するものとす

第十二條 出品の優劣を分ちて三等とし其等差に應じて褒賞するものとす

第十三條 會費は有志者の寄附金を以て之に充て若し不足を生ずるときは東京府教育會より之を補ふものとす

第十四條 本會に關する細則は會長之を定む

かくて役員は夫々會長より委嘱せられて着々準備を進め、豫定の如く五月一日上野公園内博物館の一部を會場として華々しく開會せられた。此の會期中本會の最も光榮として特筆すべきは、前記の通り長くも 皇后陛下 皇太子殿下の行啓を辱うしたことであつて、之は全く 陛下の學事御獎勵の尊き思召によりての御事と拜察せられ關係者一同恐懼感激いたしたのである。併かも金壹百圓の御下賜金までも拜戴して重ねくの光榮に感激した本會は、會期終了後副會長元田直氏を委員長として特に十數名の委員を擧げ、爾後數回の委員會を開き極めて慎重に展覽會報告書を作製し、翌二十二年七月に印刷製本の上 皇后陛下並に 皇太子殿下に各一部を献納したのであつた。

本會の教育品展覽會は之を第一回として其の後明治三十年四月に第二回を、同三十五年五月には關東教育大會の

開會を機として東京市教育會と共同して第三回の展覽會を開催し、此の時にも亦長くも 皇后陛下には重ねて會場に行啓あらせられ、親しく陳列品を御巡覽あそばされた。尋いで東京府知事より左記の御沙汰あらせられたる旨を傳達せられ、且金貳百圓の御下賜を拜受したのであつた。

一、圖畫習字等は毎郡區の陳列場に於て少くも一綴り分を披かせ御覽遊ばされたり。

一、裁縫品陳列の場所に於て知事より同一のもののみ多數ある旨申上たるに品物は一樣なるも裁縫したる兒童は異なれば能く見ねばならぬとの御沙汰あらせられたり。

一、鳥嶼の陳列場に於て知事より小笠原島八丈島大島等の教育の模様を申上たるに深く御目を留めさせられ、鳥嶼の教育も此く迄進歩せしや誠に悦ばしき事なりとの御沙汰あらせられたり。

一、裁縫品其他成績品の優等のもの便殿の一隅に陳列し御覽に供したりしが、知事より献上仕度旨香川大夫まで申出たるに差出すべく御沙汰あらせられたり。

一、雨中多數の生徒を迎えを御覽遊ばされ此の雨中に可愛想なりとの御沙汰あらせられたり。

一、御覽後此の兒童の學藝の進歩する様教授する教員の苦心盡力は容易の事にあらざるべしとの御沙汰あらせられたり。

この優渥なる盛旨を拜して役員一同深く感激し府下小學校の全教職員と共に益々國民教育の爲に精進を誓つたのである。

六、教育功績者推薦問題

教育功績者の表彰は本會事業の一として夙に常議員會の議に上り、之を委員に附託して研究調査を進めることに決定したことは、前記二十一年の評議事項中に見る通である。然るに當時東京府下教育界の事情は甚だ複雑で、多數の中から特に一二の教育者を拔擢して表彰を行ふが如きことは實行上頗る困難であつたので、二十二年三月に常議員會及び常集會の決議を経た左の規程も、遂に其の實施を見るに至らなかつた。

教育功績者表彰方法

- 第一條 本會ハ府下ノ普通教育ヲ獎勵センガ爲左ノ各款ニ該當スル者ヲ表彰ス
- 一、公立小學校幼稚園等ノ職員ニシテ勤勞アルモノ
- 二、公立小學校幼稚園等ノ設置若クハ保護ニ關シテ特ニ効績アルモノ
- 第二條 表彰ハ表彰狀若クハ表彰品ヲ贈附ス
- 第三條 第一條ノ格ニ該當スルモノヲ査定センガ爲會長ハ特ニ委員ヲ設ケテ之ヲ調査セシム
- 第四條 會長ハ委員ノ調査シタル事實ヲ更ニ常議員會ニ附シテ之ヲ定ム
- 第五條 表彰狀若クハ表彰品ヲ贈附シタルトキハ其氏名ヲ廣告スベシ
- 第六條 調査ノ細則ハ會長別ニ之ヲ定ム

此の規程は其の當時實行に至らなかつたけれども、後年本會常例の教育功績者表彰の端緒を開いたものとして當に記念すべきのである。

明治二十四年十月、大日本教育會は全國聯合教育會開催の機會に於て全國教育功績者の表彰を行ふべく、同會制定の表彰條規に基き東京府よりも一名の功績者推薦方を本會に依頼して來た。然るに本會商議員會は前記の事情により到底斯様な狭い範圍にて選出することは不可能であるとの理由の下に、之が推薦を謝絶することを決議した。併しながら此の決議は折角の依頼に對し甚だ不穩當であるから、何等か適當なる方法によつて候補者を推薦するやうにとの銀林會長の意見で、商議員會の再議に附し、商議員會は然らば適格者と認むる者を幾名にても選定して之を報告すべしと決定し、爾後數回の特別委員會に於て左記二十一名の候補者を擧げ、之を本會通常會に報告することにした。

木寺安敦	大東重喜	丹所啓行	水野浩	日下部三之介
小澤政胤	金子治喜	市川雅筋	佐藤正興	末吉忠晴
山崎彦八	梅澤親行	杉浦恂太郎	矢島錦藏	岡村増太郎
松本貫	須田要	井上行信	色川罔士	朝川庄介
石關利兵衛				

此等の諸氏は孰れも當時に於ける本府下の教育功績者であつたけれども、斯くの如き多數では固より問題になら

ない。そこで會長は更に之を商議員會に諮り、此の中より五名の候補者を選出させ、最後に總會に於て右五名の候補者に就て記名投票を用ひて一名を選挙することにした。かくて結局大多數を以て當選した金子治喜氏を大日本教育會に推薦したといふやうな、頗る面倒な経緯があつたのである。

七、府下教育界の事情

公立小學校と私立小學校との對立

明治五年學制頒布の當時、東京府に於ては先づ東京市を六大區に分け各區に一校づゝ六つの小學校、第一校（芝源流院）、第二校（市谷洞雲院）、第三校（牛込萬昌院）、第四校（本郷本妙寺）、第五校（淺草西福寺）、第六校（深川長慶寺）（番町、軒繪、常盤、湯島、明治、育英の前身）を設立した。尙續て各區の寺子屋を公立小學校に改め、各區長をして寺子屋の師匠に説かしめて其の儘公立小學校教師として生徒と共に公立小學校の方へ收容するといふやうなことが諸方に行はれた。其の結果約六十の公立小學校が設立されたが、此時猶ほ公立に改められずに残された寺子屋が四百近くもあつて、それが皆私立小學校として存續して居たから、此處に公立と私立との對立を見ることになり、私立小學校の方では組合を作り、組合長、副組合長等の役員を擧げて一致團結して公立と相拮抗するやうな態勢をとるに至つた。

其の後明治十九年小學校令が布かれて義務教育が強要せられるやうになり、學齡兒童の父母、後見人は公立小學校若くは之に代用する私立小學校に於て、尋常小學校の教育を卒るまでは兒童を就學せしめなければならぬことになつた。そこで父祖以來多年の傳統を誇り、父兄との間の舊い因縁に據つて頑張つてゐた私立小學校も、其の維持經營の關係から代用小學校の指定を希望するものが續出したが、東京府に於ては一定の基準を設けて之に合格したものだけを認定することとし、資格検査の結果これに合格した者は全體の約三分の一、即ち百校内外に過ぎなかつた。其の他の二百何十校は小學校と認められなかつたので自然に廢校の餘儀なきに至り、學制頒布當時の四百餘の寺子屋的小學校はかくて次第に消滅したのであつた。

併しながら此の代用私立小學校と公立小學校との間は、公には等しく東京府の監督を受け一樣に義務教育を授ける機關として立場を同じくしてゐたといふものゝ、内面的には常に依然對立の形勢を持してゐて、殊に數に於て代用小學校は公立小學校に比して遙に多かつたのみならず、校長其の人に於ても亦代用私立小學校には其の地方に牢固たる地盤を有し、人物手腕の優れた者が少くなかつたから、其の勢力は常に公立小學校を凌ぎ、これが府下教育界の各方面に種々なる影響を及ぼした。前項の本府教育功績者表彰の如きも、此の微妙なる關係によつて本會に於ては遂に之を實施するに至らず、會々大日本教育會よりの推薦依頼に對しても前述の如き頗る煩鎖なる手數を経て結局總會の記名投票に依て候補者を選定したといふが如きも、また此の間の複雑なる消息を物語るもので、然かも其の當選者は代用私立小學校長中の有力者たる芳林小學校長金子治喜氏であつたことなどは、以て當時府下教育

界の事情の一端を察すべきである。

八、小學校制度要領取調

明治二十三年一月、本會通常會に於て「小學校制度要領取調委員を設くる件」が可決せられ、會員の公選に依て左記十五名の調査委員が選出せられた。

日下部 三之介	大東 重善	多田房之輔	矢島 錦藏	元田 直
宇川盛三郎	小谷 茂實	帖佐 雄介	金子 治喜	水野 浩
丹所 啓行	色川 罔士	松本 貢	木寺 安敦	山崎 彦八

此の問題は如何なる動機によつて提出せられたのか。而してこれが常議員會の決議を経ずして直に通常會の議題となつたのか。其の調査委員も他の多くの問題は會長の特選で人員も五名乃至九名に過ぎないのに、此の委員に限つて會員の公選で然かも十五名といふ多數であつたのは何故か。それ等に就ては何の記録も残されて居らぬが、思ふに同年十月に發布せられた小學校令の改正に先立て、當局の参考に供せんとする意圖により急に此の問題を取上げて研究することになつたのであらうと推察せられるのである。かくて委員は屢々會合して熱心に審議を遂げ、同年三月の通常會に左の調査案を報告し、案は満場一致で可決せられたのであつた。

此の調査案は國民教育の制度全般に涉つて頗る廣汎なもので、殊に其の内容が往々現行の國民教育制度と精神に於て相一致するものが少くない。これが五十年前の本會の調査案であることは、或は我が國の教育制度の先驅を爲せる卓見であるといつても差支ないではなからうか。斯様な意味で少し長過ぎる感はあるが、左に其の全文を採録する。

教育制度要領調査案

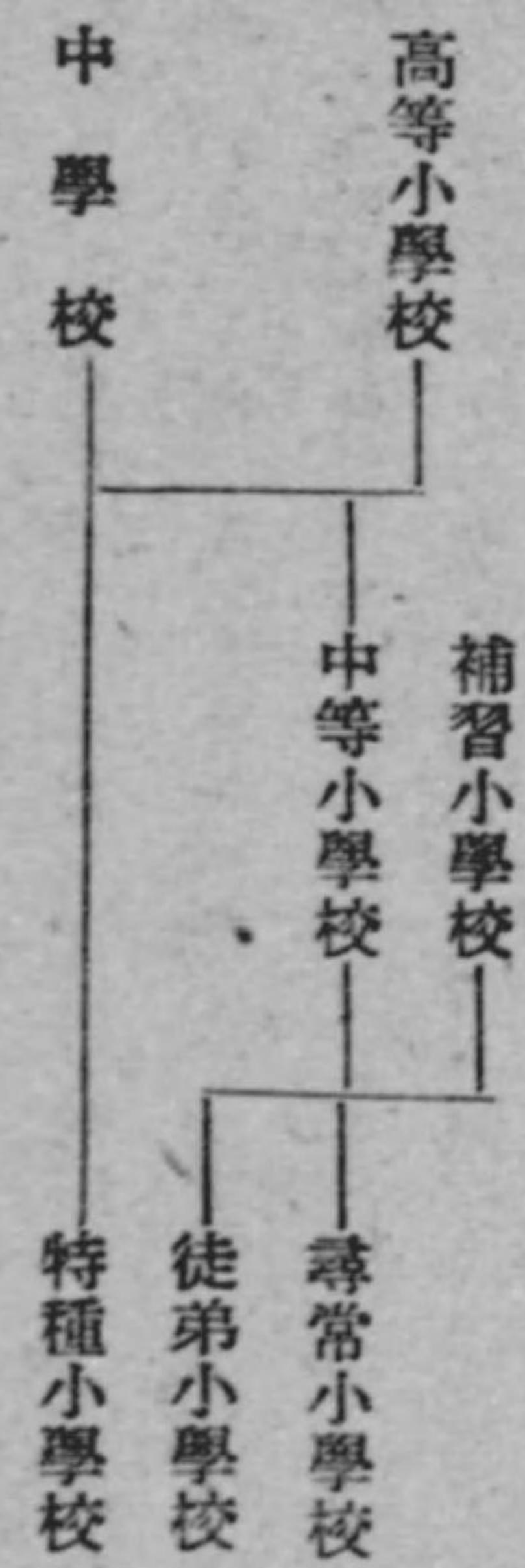
第一、小學校の目的

小學校は完全なる國民を養成する爲の普通教育を施す所とす。これを要するに普通教育の目的に於ては國民的の教育を採り、個人的の教育を取らざるにあり。然るに從來の普通教育を回想するときは、兎角個人教育に流るゝの傾きにありて、小學校の綱領にも一個人の資格を養成するを主として、却て國民たるの資格を陶冶するを以て客となすが如し。中等教育の如きに至りては純然たる個人教育の目的を以て其の目的と定むるに似たり。普通教育の目的をして此の如くならしむるに於ては國民教育の目的は達し得べきものにあらざるなり。これ本會が特に小學校の目的として國民的の主義を採用せんことを希望する所以なり。

第二、小學校の種類

小學校の種類は尋常小學校、中等小學校、高等小學校、特種小學校、補習小學校、徒弟小學校及び幼稚園等とす。其の小學

校の系統は尋常小學校、中等小學校、高等小學校は相連続するものにして、尋常小學校を以て終るものは補習小學校に入り、中學校に入らんとするものは中等小學校より直ちに轉學することを得るものとす。又徒弟の多き場所にては徒弟小學校を設置して其子弟を茲に送り、中人以上の社會に於ては特種小學校を設置して其子弟を茲に送ることを得せしむべし。以上の小學校の系統を圖解せば左の如し。



以上の學校に於て尋常、中等、高等、特種及び徒弟の小學校には凡て正則の學科を教授し、中等小學校は中學校の豫備小學校として、補習小學校は中等、高等小學校に入學する能はざるものゝ入る所とす。故に補習學校は土地の便宜に任し晝間夜間便宜の時を以て教授をなすことを得べし。徒弟學校も亦然り。特種小學校は中人以上の子弟に特別に國民教育を施行する所なれば、この施設方法は凡て通常の小學校と關係なきものなれども、その教授すべき學科と課目に於ては國民教育の目的を離るべからざるを要するなり。

第三、小學校の教科學期

小學校の教科は正科と副科との二種に分ち、正科は必修の教科にして副科は土地の情況により設くることを得るものとす。左に之を示す。

○尋常小學校の教科

正科 教訓、國語(讀み方、作文、話し方)、算術、習字、本邦地理歴史の大意、體操

但教訓の中にて本邦法令の大意を教へ本邦地理歴史の大意は國語中讀み方の處にて授くるものとす

副科 唱歌、圖畫、手藝

○中等小學校の教科

正科 教訓、國語(讀み方、作文、話し方)、算術、習字、圖畫、本邦地理歴史大意、體操

但し前に同じ

副科 唱歌、手藝、理化の大意

○高等小學校の教科

正科 教訓、國語(讀み方、作文、話し方)、算術、習字、圖畫、本邦地理歴史の大意、理化の大意、體操

但教訓の中にて本邦法令の大意を教ふ

副科 唱歌、手藝、農商工業の大意、外國地理歴史の大意

特種小學校は尋常小學校、中等小學校と同一の教科を課し、別に所要(外國語の如き)の學科を加ふることを得。徒弟小學校は尋常小學校と同じ。補習小學校は土地の便宜に應じて實業上須要の教科を課すものとす。

以上の教科は文部大臣の定むる所とし、且文部大臣は各教科教授の大意を附するを以て最も緊要なることとす。例へば教訓の課に就きて云へば國民たる者は尊王愛國の志操を養成し孝悌忠信の行爲を實踐するが如き、地理の教科にては我國の神聖にして祖先の遺せし邦土なること及び勝地名蹟の神聖なることを知らしむるが如し。歴史にては建國の體裁、仁君英主の恩政、忠臣義士の行跡等を知らしめんことを要す。これ國民教育の目的に應じてその教科を撰擇する所以なり。

小學校の學期年度は尋常小學校四年、中等小學校を二年、高等小學校を二年、特種小學校六年、徒弟小學校を四年、補習小

學校を一年乃至二年とす。

第四、小學校教科用書

小學校に於て採用する教科書は先づ文部大臣に於て其適否を檢定したるものを廣告し、府縣知事は適當の委員を設けて檢定書に關して地方の便宜を考へ之を選擇し、尙ほ府縣學務參事會の意見を聞きて之を制定するものとすべし。一度採用したる教科書は容易に變更するを得ざるの法を設くるを要す。是れ教科書の變更は教育上害あるのみならず、又費用に大損あるものなればなり。

第五、學齡及就學

小學校の學齡は男子は滿七歳より滿十五歳迄、女子は滿六歳より十四歳迄、即ち滿八ヶ年とするを要す。男女の就學年限を區別するの故は大にその原因あり。取りも直さず女子は男子よりも心意の發達早きものなれば、女子の滿六年と男子の滿七年は智力發達の程度略同じきものゆゑ、自ら就學年限の末に至りても男子の滿十五年は女子の滿十四年と其成績を同うするものゝ如し。而して猶從來の經驗によれば男子の滿六年は早きに過ぐるものに似たり。これを證するに兒童の入學する當時に於て六年内外の子女は一時心意の發達を促進するものなれども、頓て少年の時期に向はんとする頃には却て智力の發達を妨げ、或は精神の活潑を失ひて體軀の健康を害するが如きは實驗に徴して明かなるものなり。これ亦男子の滿六年を以て入學期となすの早きを證するものとす。

就學の義務は國民教育の一大要件なれば、此の個條にして確立せざれば國民教育の目的は到底全うすべきにあらず。而して就學義務を定むるに學制上二種の方法あり、一は兒童の修むべき學力の程度にして、一は年齢なり。即ち何年間に既定の學科を修めざる時は就學の義務を免れざること、好しその就學の年限に滿たざるも學力既に其の上に達する時は就學の義務を免ず

ること、及び縱令學齡の超過に及ぶも其の學力未だ國民須要の小學校に達せざる以上は、尙就學の義務を有する等これなり。此等の事項によりては各々其方法制裁を設け、就學義務、上校義務の區別を明にし、其の履行を全うせしむべし。

蓋し就學の義務は法令の範圍内に於て猶豫を與ふるも上校の義務は止むを得ざるの外父兄をしてその義務を全うせしめざるべからず。故に上校義務、就學義務と共にその方法を定められんことを望むものなり。

我國に於て國民の免るべからざる就學義務の年限は滿四ヶ年とし、學科は尋常小學校を卒業する程度とす。其年限と學科の履修は必ず責任を免るべからざるものとす。これ前段所謂就學義務及上校義務を定むる所以なり。

就學義務の要綱に就きては種々必要なる箇條ありといへども、其の主なるものは父兄後見人若しくは屋主は必ず學齡中四ヶ年間は市町村の尋常小學校に入學せしむる事。兒童の學校に入る於て止むを得ざる事項あるときはこれが猶豫をなすこと。瘋癩白痴の子女は就學を免るゝこと。就學の義務を怠りたるときは制裁を加ふる等これなり。

上校義務の主なる事項に就きては、父母後見人若しくは屋主をして規則通り其の學齡兒童を上校せしむべき事。生徒休學許可の事生徒自身の疾病及家族中の激烈なる疾病、非常の事故に付上校を止むること。及び是等の場合には教員若しくは市町村の學務員に於て該生徒の上校を停止する權を有せしむべき事。學校又は教員に對する訴願のこと。及び是等の訴願は市町村はその學務參事會、郡は郡學務參事會、府縣は府縣學務參事會に於て處分する事。上校の義務規定を犯したる父兄後見人若しくは屋主には罰金を加ふる事等これなり。

これを要するに就學義務、上校義務は充分なる制裁法を設けざるべからず。就學上校の義務にして制裁なくんば到底國民をして國民教育の責任を盡さしむることを得ざるものとす。是れ本會の特に熟議を要せし所なりとす。

第六、小學校職員

小學校の職員を分ちて校長、訓導、訓導試補、助教とす。校長は三ヶ年以上教員の職にありて實功ある者を以て之に任じ、

學校統理の職に當らしめ、訓導は一ケ年以上訓導試補の職に従事したるものを以て之に任じ児童教養の任に當らしめ、訓導試補は師範學校を卒業したるもの及び訓導試験に及第したるものを以て之に任じ訓導に同じ、助教は助教試験に及第したる者を以て之に任じ、訓導の助手として授業に従事するものとす。而して校長訓導試補は判任官として之を待つものとす。又校長訓導試補助教の教職に關しては其學術品行の檢定、職務の懲戒、管治の權利等を明にする爲め教員の義務と權利とに關する條例を定むるを要す。

第七、小學校職員の待遇

國民教育の改良を圖るには學校職員の改良を以て最とす。而して小學校職員の改良は小學職員の待遇を厚ふするにありとす。

思ふに小學職員の仕事たる随分困難なるものなれども、これに報ゆる俸給は容易に満足を與へ得しむべからざるものなれば、他に待遇の法を厚ふし名譽の職務として安心永住の途を求めしめざるべからず。

これを要するに判任の取扱をなし、亦年功によつて増給の方法を設け、或は奏任の取扱を爲さしめんことを欲す。思ふに小學校といへども其宏大なるものに至りては、校長の俸給も四五十圓に及び、數多の教員の上に立ちてこれが監督をなすものなれば、奏任の取扱をなさざるべからず。これ國家教育上地位を高むるに於て主要の方便なりとす。

加ふるに多年職務に従事し謹慎勉勵の功勞ある者及び充分の功績をなしたるものゝ爲には、老年恩給の方法を設け、若しくは勳章を下賜する方法を設けられんことを欲す。これ小學教員をして名譽の職任たらしむる一手段なりと信ず。

第八、小學校の設立維持

尋常小學校は各市町村の區域に於て設立すべきものとす。これを要するに文部大臣は市町村學事條例を設け尋常小學校の設

備に關する諸般の事項を定め、各市町村内に於ける國家教育の義務を全うせしむるにあり。而して市町村にして若し尋常小學校を維持する能はざる場合には市町村の組合を以てし、若しくは郡の補助を請ふことを得るものとす。此等の事項は凡て市町村學事條例によつて定むるものとす。

中等小學校、高等小學校及補習小學校は土地の情況により一市町村内に之を設立し或は市町村の組合を以て設立するものとす。以上の小學校も亦止むを得ざる場合には郡の補助を請ふことを得べし。徒弟小學校は徒弟を使用する雇主之を設立することを得る者とす。或場合によりては市町村之を補助することを得るものとす。特種小學校は中人以上の部内に於て之を設立することを得るものとす。幼稚園は尋常小學校の中に併置するを得べく、又獨立して設立することを得。凡て小學校の設置廢止の規定は文部大臣之を定め府縣知事之を執行するものとす。

尋常小學校に關する費用は市町村税若しくは學費積立金の利子等を以て之を支辨するものとす。而して就學を妨げざる限りは授業料を徴收することを得るものとす。

第九、小學校の監督及管理

小學校の監督は府縣知事の職權に屬し、其の管理は市町村立に係るものは市町村の學務參事會に於て之を管理し、郡の管理すべきものは郡學務參事會に於て管理するものとす。而して此等學務參事會の組織及權限は左の如し。

市町村學務參事會は市町村長、學校長若しくは首座訓導、議員、市町村學務委員より組織して市町村長之が議長となる。其の權限は政府の命する法律の實施に任じ、學校財産の管理、學校經費の豫算、學校教育の成績を調査して父兄の訴願に關する處置をなす。之を要するに文部省に於ては其の權限組織に關する準則を定むるものとす。郡學務參事會は郡長、郡參事會員、郡内の高等小學校長、郡の督學より成立し、會長は郡長之に任じ、其の權限は郡に關する教育を管掌し併せて市町村學務參事會の請求及上訴を判決すべきものとす。

以上は凡て法律の定むる所によるものとす。

第十、學務官の組織

府縣學務官は各府縣に學務部を置き、知事の監督を受けて管内教育の事務を執行するものなり。而して其の主任は學務部長と稱し、部員は學務副と稱し、判任官と定む。且つ各府縣に小學督學官を置き、府縣教育の實況、教員の勤惰等を視察し、學務參事會の顧問となすものなり。

郡學務官は郡長の監督を受け、郡内の教育事務を管理し、併せて郡學務參事會の事務を掌るものとし、是亦判任官と定む。

市町村學務員はその區域内に於て三名の候補者を選び、更に三名の中にて市町村會議員の復選するものとす。而して市町村學務委員は市町村學務條例の範圍内に於て小學校に關する一切の事務を管理するものとす。

第十一、私立小學校

私立小學校は市町村立小學校を代用するものなれば、小學教育に關する法律の趣旨に基き、これを準備する上は、府縣知事の認可を得て之を設置するを得るものとす。而して私立小學校の管理も同じく市町村學務參事會に任ずるものとす。

私立小學校に於て市町村立小學校と異なる所は職員の進退及權限、學校經濟の事、存廢のこと等なりとす。而して私立小學校の爲には市町村に於て幾分の補助をなすことを得。これ私立小學校の改良完全を圖るは國民教育上大切なことにして亦國家の義務なればなり。

第十二、特別學制

前數項に述べたるは總て全國一般に應ずる所のものなり。尙茲に特書せざるを得ざるものは東京、京都、大阪、三市の學制是れなり。三市は他の市町村と全く狀況を異にするを以て、此の土地には特別の學制を頒布せられ、市内の一區を以て小學校

の設置區域となし、此の一區が獨り學校の事のみに關しては全く獨立自治の機關を有せしめんことを望むなり。抑三府内の一區は市制より觀する時は只市内の一區域にして獨立自治の體を備へざるも、其實は他の地方の一市よりも尙大なる者あるに、若し強て市制に拘泥して之を取扱ふに於ては、啻に無益の煩雜を來すのみならず、自然劃一主義に制せられて教育の普及進歩を妨ぐるの慮あるや必然なり。彼の市制に於て三市に特別制を設けられたるも其精神に於ては畢竟同一の道理より出でたるものなるに、市制のみにては未だ充分なりと謂ふべからず。現に東京の如き叢叢の下にありては各種各様の人民僅々數里の内に住居する所なれば、從て小學校に種々の施設を要することあるべく、實に一市内といへども頗る其狀況と利害得失とを異にする所多ければ、到底他の地方と同一の制度を以て律すべからず。府知事は各區長をして直に國の行政事務、即ち小學校に關する事項を市制に拘らずして管理するを得せしめ、區長をして其區内の行政事務を補助執行せしむることを得るは特別市制第六條にも明文あることなり。各其區に適應する運動をなして教育の普及進歩を計ること誠に肝要なり。是れ即ち三市に限り特別學制を要する所以なり。

以上

附言

此取調書は府縣制、郡制、及び學務に關する官制を既定せしものと假想して該當の事項を記述せり。

九、參事員商議員の新規程

明治二十三年五月、役員任期満了につき改選を行つた。時恰も總裁高崎五六氏は元老院議員に轉任し、侯爵

須賀茂昭氏が代つて東京府知事に就任せられたので、これを總裁に推し、更に副會長一名の代りに三名の參事員を置いて會長を輔佐することにした。而して五十名の常議員も三十名に減じて之を商議員と改めた。其の氏名は左の通りである。

總裁	須賀茂昭		
會長	渡邊孝 (重任)		
參事員	元田直	宇川盛三郎	大東重善
商議員	大東重善	色川園士	多田房之輔
	矢島錦藏	和久正辰	丹所啓行
	元田直	宇川盛三郎	水野浩
	海老澤左七郎	帖佐雄介	今泉祐善
	永江正直	松本貢	大河内正質
	須田要	岡村増太郎	水谷篤藏
	和田貫一郎	木寺安教	水上泰健
	伊藤正信	角田眞平	
理事	勝浦頼雄	布施仲男	小谷茂實
			日下部三之介
			金子治善
			勝浦頼雄
			山崎彦八
			小谷茂實
			井上守久
			市川雅飭

八月會長は前總裁高崎男爵及び前副會長元田直、理事矢島錦藏、日下部三之介の諸氏の多年會務に盡瘁せられし功勞に對して感謝狀を贈つた。然るに會長渡邊孝氏も亦同年十月奈良縣書記官に轉任を命ぜられ本會長を辭退せられたので、其の後任會長選舉の爲に同十一月臨時總會を開いて投票を行つた結果は、本年五月まで文部大臣に在官した子爵榎本武揚氏 (當時は樞密顧問官であつた) が大多數を以て當選したことは、まさに從來の型を破つたものであつた。想ふにこれは前の文部大臣であるからといふよりは、勿論それも主なる理由の一つではあつたらうが、それよりも榎本子爵が舊幕臣であり、我が東京府とは淺からぬ因縁があつたからではなかつたか。孰れにしても同子爵は本會役員の熱心なる懇請にも拘はらず、己むを得ざる事情の爲めに固辭して受けなかつたから、更に十二月再び臨時總會を開いて、本會創設當時の教育談會の會長であつた銀林綱男氏を選舉して同氏の受諾を得たのである。

翌二十四年七月總裁須賀侯は東京府知事を退官せられたので、同十月後任知事富田鐵之助氏を總裁に推し、二十五年四月の改選期には總裁及び會長は重任、參事員には大東重善氏の再選の外、日下部三之介、和久正辰の兩氏が元田直 (元田氏は二十三年十月に本府師範學校長を退職した) 宇川盛三郎の兩氏に代つて當選し、商業員には新に梅澤親行、布施仲男、清水直義、本莊太一郎、田中登作、岡田敬輔、伊澤修二の諸氏の當選を見たけれども、其他は概ね再選せられ、理事には勝浦氏、小谷氏に代つて和田貫一郎氏、山崎彦八氏が新に當選し、布施仲男氏は再選留任したのである。

明治二十五年十二月、會長銀林綱男氏は埼玉縣知事に榮轉せられ、次で理事布施、和田、山崎の三氏も亦辭職した。銀林氏は多年本會の會長として功勞洵に尠ならず、今回其の榮轉を見るに至つたので、本會は祝賀と感謝を兼ねて江東中村樓に送別會を開き、特に金製の功德章を贈呈した。來會者百二十餘名で頗る盛會であつた。翌二十六年二月の常集會に於て後任東京府書記官山縣伊三郎氏を會長に選舉し、理事の補充には商義員會の豫選を経て井上守久氏(庶務)、布施伸男氏(會計)、鳥山讓氏(編輯)の三氏を委嘱した。

總裁富田鐵之助氏は在任漸く二年にして東京府知事を退官し、本會總裁を辭任せられたので、明治二十六年十二月後任東京府知事三浦安氏を總裁に推し、同時に會長を辭退せられた山縣伊三郎氏の後任會長の選舉を總會に於て行つた結果、時の東京府會議長芳野世經氏の當選を見た。芳野氏は彼の幕末の鴻儒芳野金陵先生の後であつて、府會に於ても聲望特に高かつた人である。本會が創設以來常に東京府の學務擔當の書記官を會長に選舉し來つた多年の慣例を破つて、茲に始めて民間の名士を會長に迎へたことは、頗る注意すべき事例であると思はれる。

(48)

一〇、各府縣聯合教育會

全國教育者大懇親會開催の議

明治二十三年は全國民待望の第一回帝國議會の開かれる年であり、昨年の憲法發布祝賀の當時より計畫せられた

第三回内國勸業博覽會が、本年四月東京に於て開催せられる時でもあり、而も此の博覽會には特に教育學藝の一部門も設けられることになつて居るので、此の機會に本會に於て各府縣聯合教育會を開いて大に全國的に氣脈を通じ、且大懇親會を催しては如何といふことが問題となり、會長は宇川盛三郎氏外十名の委員を委嘱して其の實行に關して調査せしむる所があつたが、是より先、大日本教育會は早くも同年五月を以て全國教育者大會開催の議を決して、着々其の準備を進めることになつたので、本會の計畫は之を中止し、右教育者大會には本會より小谷茂實、永江正直、勝浦頼雄の三氏を代表として出席せしめることにした。

此の大會は五月二十五日より同三十日まで六日間を會期として、議事は二十五、六の二日間を以て終り、二十七日以後は午前諸官省各學校の參觀、午後は名士の講演等あり、出席者は一道三府三十八縣に亘り總員八百八十名に達し、非常な盛會であつた。而して此の會の討議題は「小學校に實業教育を施設する方法」、「學齡兒童の就學を増加する方法、附貧民子女の就學方法」の二題であつて、此の外に「市町村制實施以來教育に及ぼしたる影響」等の會員の五分間演説も行はれたのである。

此の年十月三十日、畏くも明治天皇より教育に關する勅語を下し賜はり、尙之に先立て十月二日には法律を以て「地方學事通則」が定められ、同六日には勅令を以て新に「小學校令」を公布せられるなど、我が國の教育史上極めて重大なる時期に際會し、教育者の責任いよいよ重きを加へたのに鑑みて、大日本教育會は曩に本會が企畫した全國聯合教育會を、その翌二十四年四月二十六日より五日間に亘りて開催した。この會は全國道府縣教育會の聯

(49)

合會であつて、前年の教育者大會とは其の組織を異にし、各地方教育會より一名乃至三名の代表者を出席せしめ、全國教育會と大日本教育會との間に氣脈を通じて本邦教育の普及改良及び上進を圖らんとするもので、主催者たる大日本教育會からは「中央教育議會を設立する方法」といふ大問題を提出し、「文部大臣及文部省官吏、學士會院會員、帝國議會議長、諸官立學校長、其他教育上經驗に富める者を會員とする帝室管理の純然たる中央教育議會を設立して、帝國教育の方針に變動なからしめなければならぬ」といふやうな決議を爲し、之を文部大臣に建議してゐる。

尙同時に「小學校教育費國庫補助の件」も可決され、「兩陛下の御眞影を全國尋常小學校へ下附せられんことを本會より文部省へ上申すること」をも可決した。以て當時の一般教育界の思潮が如何なる傾向にあつたかを知るべきである。

一一、機關雜誌の發行

本會機關雜誌の發行は、明治二十一年七月東京府教育會としての發足以來、會則に規定した通り隔月一回之を刊行して會員に配付した。是より先明治十六年東京教育談會時代に於ても、略ぼ一年一回の割合を以て報告書を發行して會員に頒ち、それが前後八冊に達したといふことであるが、今は遺憾ながらそれを見るすべもない。かくて本

會發行の『東京府教育會雜誌』は其の幾許もなくして月刊に發展したが、其の時期に就ては明確なる記録がない。而して發刊の當初は理事に於て之が編輯を擔當したやうであるが、二十二年一月に至つて特に雜誌編輯委員六名を會長より委嘱して居るのを以て見れば、多分此頃から毎月一回の發行を始めたのではなからうか。當時委嘱せられた編輯委員の氏名は左の通りである。

小田 深 造 小 谷 茂 實 竹 尾 住 清 松 本 貢 大 澤 彌 治
清 水 直 義

同年九月、會長は更に山崎彦八、黒木安雄の二氏に編輯委員を委嘱したが、同十二年には委員小谷茂實氏を編輯主任として専ら之に當らしむることにした。

同二十四年五月、弘く府下全體に互つて雜誌掲載の材料を蒐集する爲に通信員を置くこととなり、通信員規則を定め、會長の名を以て各郡區に二名宛の通信員を委嘱し、通信に關する實費は之を本會より支給することにした。併しながら漸く年を経るに従つて其の編輯振に嫌らぬ聲が會員の間に高くなつて來たものゝ如く、同二十六年九月の商議員會は「從來の雜誌に甘んぜず、成るべく會員に満足を與へるものと爲すべく、一人にて編纂するは自ら不完全のものたるを免れず」との理由に依て、新たに左記五名の雜誌編纂委員を定めた。

多田房之輔 鳥 山 讓 清 水 直 義 山 崎 彦 八 野 尻 精 一
委員の任期は一ヶ年として、委員の互選を以て野尻精一氏を委員長に、鳥山讓氏を主査に推し、大に内容の改善

に努めたのである。

翌二十七年三月の商議員會では、編輯委員の任期を二ヶ年に延長し、更めて委員の選挙を行つた結果は、前編纂委員中の山崎彦八氏を除く他の四氏が其の儘再選せられて、同年四月より大要左記に依り雑誌を改良し、大に一般の寄書を募集することになった。

- 一、毎號論說、學藝、叢譚、雜錄、彙報、輿論一斑、教育法令の七欄を設く
- 一、論說欄は普通教育に關する意見を掲載す
- 一、學藝欄は普通教育に關する諸學科中の事項を掲載す
- 一、叢譚欄は普通教育上参考となるへき逸話史談を掲載す
- 一、雜報欄は普通教育に關する事實、統計、教授、訓練、管理の方法を掲載す
- 一、彙報欄は普通教育に關する新事實を掲載す
- 一、輿論一斑欄は普通教育上現在の事實に對する意見を掲載す
- 一、教育法令欄は教育に關する法令を掲載す
- 一、委員及理事は右七欄を分擔して其材料を蒐集し理事之を整理す
- 一、委員及理事は各自分擔の材料を纏め毎月十五日に集會し當月の材料を協議決定し且つ翌月の論說を評定す

かくして委員は毎月定日に委員會を開き、雑誌の編輯に努めて大に其の面目を改めた。二十九年四月任期満了につき新に中山民生氏を編輯主任に、今井市三郎、清水直義の兩氏を編輯委員に委嘱し、更に二ヶ年後の三十一年四

月には清水、中山の二氏の他、新に風當朔朗氏を同委員に囑託すると共に、本會理事中より二名の編輯事務分擔者を定めて編輯に關與せしむることとなり、今井市三郎、伊藤房太郎の兩理事が之に當ることとなった。而して之と同時に誌名を『東京教育雑誌』と改題したのである。

二、森子爵獎學金の寄託

本會資金募集の實行

明治二十二年二月十一日、森文部大臣は兎徒の爲に不慮の最期を遂げられ、朝野これを悼み惜まぬはなく、殊に我が教育界にとつては實に痛嘆すべき一大恨事であつた。本會は渡邊會長が會員一同を代表して、大臣在世中教育の爲に盡されたる數々の勳勞を感謝し、不慮の薨去に對する深き哀悼の意を披瀝した弔辭を捧げたのであるが、會員中の有志は尙之を以て足れりとせず、香花供養の資に代へて故森子爵獎學金の募集を企て、會内外の賛同により義損金額九百八拾餘圓に達した。依て之を如何に處理すべきかに就て種々協議を重ね、森子爵家の了解を得て遂に其の管理を本會に委託することとなり、同二十四年十二月發起人より左の書面を以て本會に申出で、本會は之を受理して基本金の一部に加へることにした。

明治二十一年二月故文部大臣森子爵薨去の際我輩發起となり香花供養の奠に代るに普通教育の爲め獎學金募集の事を以てせし

に有志者誘寄せられ其金額別記の通りに相成然るに其支出方法等未だ議定せず在再今日に至り候處今般發起者一同協議の上該金圓貴念へ御委託申度候條發起の趣旨により御處理相成度右希望相添此段申進候也

明治二十四年十二月一日

故森子爵獎學金發起者

丸山淑人 ● 勝浦頼雄
矢島錦藏 大東重善
帖佐雄介 元田直
渡邊孝

東京府教育會長 銀林綱男殿

追て將來發起人に於て本金に關する帳簿類の閲覧を求めたるときは何時たりとも御差許相成度申進候也

引繼 目錄

- 一、故森子爵獎學金に關する帳簿一冊
 - 但獎學金募集廣告及寄贈人へ報告並に寄附人名金額等の記録
 - 一、金九百八拾壹圓拾參錢四厘 寄贈金
 - 一、金百參拾參圓七拾七錢壹厘 利 金
 - 但二十四年十二月公債證書利子包含せり
 - 計 金千百拾五圓七拾錢五厘
- 内

- 金九百九拾八圓五拾錢 公債證書額面五百圓貳枚購求代金
- 金四拾貳圓貳拾錢五厘 雜費並新聞廣告料
- 差引殘金 七拾五圓也 現 金
- 右及引繼候也

尙寄託の條件として(一)本金は總て故森子爵獎學金の名稱を附すること、(二)元金千圓即ち整理公債證書額面五百圓二枚は東京府知事に保管を依託し永く費消せざること、(三)元金の利子を以て普通教育の爲めに支辨するは差支なしと雖も可成該利子の内幾分を元金に組入れ漸時増殖を謀ること、(四)元金を費消せざるを得ざる場合生ずるときは豫め發起者の中過半數の同意を得尙故森子爵の家族へ協議の上支辨すること、但し發起者各地散亂其の同意を得る能はざるときは教育會は商議員過半數の同意を得支辨することを得、(五)總て支辨方法確定の上は故森子爵家族へ報告すること等の箇條書きが、引繼書に添付せられて居た。

是より先、明治二十一年三月本會規則改定以來、原亮一郎、坂上半七、石塚徳次郎、吉川半七、小林義則、宮川保全等の諸氏より本會維持費中に寄附金あり、又東京府廳よりも同維持費として金百圓の下附があつたが、更に二十九年十月に至り左の資金募集方法を定め委員を設けて之を實行した。

資金募集方法

- 一、寄附金は一時又は月賦とし寄附者の隨意とす
 - 二、寄附申込期限は明治三十年四月二十日迄とし拂込期限は明治三十一年三月三十一日迄とす
 - 三、本會は寄附金募集事務取扱委員を置き會長之を選任す
 - 四、毎郡區に寄附金募集委員を置き寄附金募集を委嘱す
 - 五、募集したる寄附金を豫定の費途に充用せんとするときは議員會の議決を経て之を定む
 - 六、寄附金の申込あるときは其金額氏名を本會雜誌に廣告し現金の拂込あるときは本會より領收證を發す
 - 七、寄附者優待の方法は別に之を定む
- かくて三十一年九月會長は菊池三五郎、櫻井紀男、細谷定道、外松謙の四氏に資金募集委員を委嘱し、本會役員は勿論右委員等に於ても大に盡力するところあり、其の結果二十一年以降三十五年までに合計三千百拾貳圓七十錢の寄附金を得たのである。

一三、臨時教育講談會の開催

學校體育衛生の調査

明治二十三年十月改正の新小學校令發布に引續き、文部省は之に伴ふ各種の法令を定めて、同二十四年中に「小學校設備準則」、「小學校教則大綱」、「學級編制等ニ關スル規則」、「小學校長及教員ノ任用解職其ノ他進退ニ關スル

規則」、「小學校長及教員職務及服務規則」等、其他幾多の規程を公布した。而して同年十一月には地方學務官を本省に召集して、大木文部大臣より新令の要旨徹底に就て指示する所があつた。そこで本會に於ても亦此の新小學校令の要旨を府下教育關係者に普ねく理解せしむる爲に、同月廿六日京橋區木挽町厚生館に於て臨時教育講談會を開催して、「教育制度の本旨」、「教育の大趣旨」、「國政上より小學教育の目的を論ず」、「市町村の負擔及小學校の經濟」、「就學及小學校の設置」、「國の教育」、「監獄と教育との關係」、「管理監督」、「小學校の編制及學科」、「公私立學校の區別」等の演題を以て、大東重善、加藤弘之、日下部三之介、山崎彦八、元田直、矢島錦藏、杉浦重剛、松本貢、田中登作、宇川盛三郎氏が講演を行った。此日の來聽者は本府郡區長、小學校委員、學區會員、小學校長及教員等約八百名に達し非常な盛會で、十分其の目的を達することが出來たことを喜んだ。

小學校に於ける體育衛生方面に就ては、本會の夙に留意する所であつたが、前記學務官會議に於ても文部大臣は特に此の點を強調せられて「身體ハ百事ヲ爲スノ根源タリ幼時身體發育旺盛ノ時ニ在リテ之ヲ忽ニスルトキハ成長ノ後遂ニ羸弱ノ民トナルヘシ小學校ニ於テハ殊ニ茲ニ留意セサルヘカラス」と訓示せられたので、本會は二十五年十一月特に學校衛生取調委員を設けて之が調査に着手し、爾來數次の會合を重ねて左の諸件を協議決定した。

- 一、體操法の改良をなさんが爲に先づ本會附屬體操傳習所を設け小學校體操教員の傳習をなすこと
- 二、該傳習所規則書草案其他豫算案を調査すること

三、體操法特に女子の體操法及遊戯法を調査すること

右調査は寺田、坪井、野尻の三氏に託す

四、生徒の衛生法實行の第一着として府下各所に小學校生徒の遊戯場に充つるを目的とせる小公園を設置せられんことを本會の名義にて東京市會に建議すること

尙左の擔任を定めて調査を續行することにした。

- 一、學校建築に就て、土地、校地、建築材料、附屬建物(便所の類)……緒方、三島、寺田の三氏擔任
- 二、教室構造法に就て、窓構造、教室幅員、生徒一人に對する坪數……多田、和田、井上の三氏擔任
- 三、内部構造に就て、建具、床、壁、天井……多田、市川、梅澤の三氏擔任
- 四、生徒の疾病に關する件に就て、机、腰掛、燬室法、換氣法、空氣分量……緒方、三島の二氏擔任
- 五、體操法及體操具(男女共)に就て……坪井、肝付、多田、野尻、吉田、山崎の六氏擔任
- 六、教授時間に就て……野尻、多田の二氏擔任
- 七、生徒の衛生法及學校清潔法に就て……寺田、三島の二氏擔任
- 八、學校醫設置方法に就て……三島、武の二氏擔任

此の調査は其の後如何に進行し、如何なる成案を得て之を具現したかは詳かでないが、ともかく斯様な調査項目を擧げて、當時其の道の權威ともいふべき人々に之が分擔調査を託したことは、以て本會の體育衛生に對する熱心なる態度を知るべきである。

一四、芳野會長時代の役員異動

郡區支會規則の設定

明治二十六年十二月本會々長に當選せられた芳野世經氏は、同三十二年五月本會が社團法人として新たなる組織の下に躍進の一步を踏出すまで、前後六ヶ年間本會總理の任に當られた。其の間二十七年三月には商議員の改選あり、當選の商議員は左の通りである。

伊澤 修二	金子 治喜	日下部 三之介	野尻 精一	丹所 啓行
梅澤 親行	井上 守久	和久 正辰	奥村 憲令	山崎 彦八
勝浦 頼雄	田中正 兄	色川 園士	永江 正直	木寺 安敦
多田房之輔	須 須 要	今井市三郎	岡田 敬輔	太田 安茂
戸倉 廣胖	市川 雅筋	杉浦 恂太郎	清水 直義	杉浦 重剛
岡村 増太郎	鳥 山 讓	逸見 幸太郎	中山 民生	小澤 政胤

同二十九年五月、臨時總集會に於て會則の一部に改正を加へ、議員の定數は其の儘として其選出員數を市部郡部に分ち、市部居住會員中より二十一名、郡部居住會員中より九名を選擧することにした。尙同時に理事長一名は議

員と同じく總會に於て之を選挙することに改め、参事員七名は議員會に於て選挙することを規定した。改選の結果は左の通りである。

會長	長 芳 野 世 經			
理事長	野 尻 精 一			
市部議員	市 川 雅 節	金 子 治 喜	梅 澤 親 行	多 田 房 之 輔
	丹 所 啓 行	日 下 部 三 之 介	井 上 守 久	小 澤 政 胤
	山 崎 彦 八	今 井 市 三 郎	勝 浦 柄 雄	逸 見 幸 太 郎
	中 山 民 生	杉 浦 恂 太 郎	清 水 直 義	奥 村 憲 令
	風 當 朝 朗	田 中 正 久	和 久 正 辰	水 野 浩
郡部議員	五十嵐 文太郎	伊 藤 房 太 郎	山 城 彦 熊	日 根 富 三 郎
	田 中 瑞 穂	田 口 兼 吉	大 久 保 等	木 下 欣 平
	中 田 多 平			

翌四月、高橋磯八郎、杉浦恂太郎、中山民生の三氏は會長より理事を囑託せられて議員を辭退したので、次點中より須田要、成瀬勝文、井上榮次郎、小野義倫、湊功太郎の諸氏を補缺當選者として加へることとなり、議員の總數は三十三名となつた。而して同月の議員會にて参事員七名の選挙を行ひ、左の諸氏が當選したのである。

日下部	三之介	市川雅節	丹所啓行	山崎彦八
和久	正辰	角谷源之助	井上守久	

是より先、本會は前の東京府教育談會當時に設置した各郡區の部會を廢して中央集權の制を採り來つたこと茲に七年、郡部に於ける會員數も漸く増加して市部の五百餘名に對して郡部二百餘名、合せて七百九十八名となり、且市部の各區には既に區教育會の設置あり、郡部に於ても郡教育會の設立次第に多く、それ等の郡教育會より本會との連絡提携を希望するも少くなかつたので、之れが商議員會の問題となり、遂に二十八年四月に至つて總會の決議を経て支會設置の附則を設定するに至つた。

東京府教育會規則附則 (二十八年四月追加)

- 一、本會ハ府下郡部ニ支會ヲ設クルコトヲ得
- 一、支會ハ其役員二名以内ヲ以テ本會商議員會ニ列席セシムルコトヲ得、其權限ハ商議員ニ同ジ
- 一、支會會員ハ本會ノ常集會及總集會ニ列席スルコトヲ得、但役員ノ選挙及會務ノ議ニ與ル事ヲ得ズ
- 一、支會員ノ本會ニ納ムベキ會費ハ一名ニ付一ケ年金六十錢トス
- 一、支會ニ關スル細則ハ會長之ヲ定ム

同時に會長は左の細則を定めた。

東京府教育會支會設置規則

- 第一條 府下各郡ニ於テ支會ヲ設置セント欲スルトキハ其規則案ヲ具シテ本會ノ承認ヲ經ベシ
但支會ハ常ニ本會員二十名以上ヲ有スルヲ要ス
- 第二條 支會ハ其會員住所氏名及役員ノ氏名ヲ本會ニ通知スベシ
- 第三條 支會ハ其會ニ在ル本會會員及支會會員ノ本會ニ納ムヘキ會費ヲ取經メテ三ヶ月毎ニ本會ニ送付スベシ
- 第四條 支會ハ其記事及學事ノ狀況ヲ本會ニ通知スベシ
- 第五條 本會ハ支會會員ニ本會雜誌ヲ配付スベシ
- 第六條 支會ヨリ本會會員ノ出張ヲ請求スルトキハ本會ヘ務メテ之ニ應スベシ
但旅費ハ實費ヲ以テ支辨スルモノトス
- 第七條 支會ヨリ建議書差出シタルトキハ商議員會ニ附シテ之ヲ評決スルモノトス
- 第八條 本會長ハ支會役員ヲ召集シテ協議會ヲ開クコトアルベシ

附 則

各郡部教育會ニ於テ此規定ニ據ルモノハ其名稱ヲ變ゼズシテ本會ノ支會タルコトヲ承認スベシ
かくて本會は既に各郡に設置せられてある郡教育會も、又今後設立せんとする郡教育會も悉く之を本會の支會として統制提携して以て府下教育の振興に資せんとする機構を整へたのであつた。

明治二十八年七月、商議員會議長伊澤修二氏は臺灣總督府民政局事務官學務部長に赴任につき議長を辭任せられ、

東京府尋常師範學校長野尻精一氏代つて議長に選舉せられた。然るに前記二十九年三月規則の一部改正により野尻氏は理事長に選任せられたので、商議員會の議長は府立中學校長勝浦頼雄氏が代ることになった。

同年九月、新に參事員七名を置き、從來商議員會に附議せる事項の一部は之を參事會に於て協議決定して直に實行に移し、重要な事項は之を商議員會の議題とすること、恰も府縣會又は市會に於ける參事會の如きものにした。それと同時に商議員の名稱も單に議員と改め、市部郡部に分つて選舉を行つた結果は前記の諸氏が當選したのであつた。次で九月に參事會議規程、十月に議員會議規程が新に制定せられ、參事會は毎月一回定日に開會し、議員會は必要ある場合に會長之を召集することになった。

同三十年四月の總會に於て議員の改選を行つた。當選者の氏名は左の如くである。

市部議員	丹 所 啓 行	清 水 直 義	勝 浦 頼 雄	角 谷 源 之 助
	風 當 朔 朗	湊 功 太 郎	井 上 守 久	日 下 部 三 之 介
	井 上 榮 次 郎	金 田 藤 吉	大 橋 鴻 三 郎	大 槻 震 八 郎
	飯 山 七 三 郎	八 木 金 一 郎	金 子 忠 平	今 井 市 三 郎
	梅 澤 親 行	浦 部 虎 松	金 子 治 喜	高 橋 卯 之 助
	山 田 菊 三 郎	田 村 森 太 郎	多 田 房 之 輔	小 澤 卯 之 助
郡部議員	伊 藤 房 太 郎	五十嵐 文 太 郎	湯 地 孝 平	大 久 保 欣 平

河谷雄太郎 北條友猪 相澤榮次郎 田代準四郎
渡邊峰吉 金成龜次郎 矢野俊太郎 小池菊次郎

須田要 星松三郎 山崎元吉 清水澄

山崎彦八 逸見幸太郎 山口袈裟治

同時に理事の分擔を左の如く定めた。

庶務 梅澤親行 金田藤吉 伊藤房太郎
會計 成瀬勝文 逸見幸太郎

この選舉に於て議員の定数は三十六名に増員せられてゐるが、其の顔振れに於て著るしく眼立つことは新人の登場である。即ち舊議員の再選は市部に十一名、郡部に二名、合せて十三名に過ぎないが、之に對して新に當選した者は其の約二倍の二十二名で、孰れも新進氣鋭の人々である。所謂時代の推移の然らしめた結果とも言ふべきであらうか。その後三十二年四月まで滿一ヶ年間に理事及び議員に若干の異動はあつたが、大體に於て此の顔振に變化はなかつたのである。

一五、箝口訓令と本會の態度

日清戰役後の教育調査事項

明治二十四五年、我が教育界に一大紛擾を捲き起し、遂に彼の有名なる箝口訓令の發動を見るに至つた小學教育費國庫補助の問題は、其の起因遠く明治十三年の改正教育令にある。此の教育令は去る明治五年學制の發布以來政府が補助してゐた小學校扶助金に關する條項を全部削除して、小學教育費は悉くこれを市町村の負擔とし、補助の必要ある場合には府縣會の議定を経て之を地方稅から支給させることに改めた。併しながら其の補助額は教育費負擔の増加に伴はず、却て年々減少する爲に、市町村は己むを得ず授業料の増徴を以て之が財源に充てることになり其の結果は學齡兒童の就學に大影響を及ぼし、就學率の低下を來したのである。是に於て小學教育費國庫補助の要求が各地方から盛んに起り、中央では伊澤修二氏等が國立教育期成同盟會を組織して議會に懇へ、大日本教育會も亦教育界の輿論を代表して政府に迫るといふことになつた。

然るに時の文部大臣井上毅氏は此の國庫補助に對して反對の意見を有するものとして新聞紙上に其の談話が傳へられたので、これが端なく一般教育界に大きな衝動を與へ、文相に對する非難の聲が囂々として起り、遂に明治二十六年九月の大日本教育會創立十周年記念會の席上、辻會長、伊澤國家教育社長等の在野教育家の首腦者が、苟も

文部大臣ともあらう者が、今や滿天下の輿論たる小學教育費國庫補助の急務なることを理解しないとは何事であるかと、頗る激越なる口調を以て當局を攻撃するに至つた。

此の形勢を見て事態容易ならずと考へた井上文相は、その翌十月文部省訓令第十一號を以て「教育は政論の外に立つべく(中略)教育の名稱に於ける團體にして純粹なる教育事項の範圍の外に出で、教育上又は其他の行政に涉り時事を論議し、政治上の新聞雜誌を發行する時は一種の政論をなす者と認めざるを得ず、其團體は法律上の手續を履み相當なる政論の自由あると否とに拘はらず、學校教員たる者の職務上の義務は此等團體の會員たるを許さざる者とす」と嚴達した。これが所謂箝口訓令である。

此の訓令が當時の教育界に果して如何なる影響を與へたか。それは今茲に敢て述べる必要はないが、此の訓令の結果我が東京府教育會に於ては、總會及び常集會に於て從來行つて來た演説講談等に就て特別の注意を拂はねばならぬこととなり、同二十七年六月左の内規を設定した。

常集會講談者選定方法

- 一、會長は商議員の評決を経て豫め常集會講談者を定め置くべき事
 - 一、講談者を定むるには先づ其講談すべき種類事項題號を定めて各適當なる人々に委嘱すべき事
 - 一、常集會講談者は左の種類によるべき事
- 教育事務に關する事項
學術に關する事項

小學校管理及教授法に關する事項

- 一、豫定せる講談者に差支を生じたるときは成るべく同一の事項を擔任せる他の講談者に依頼すべき事
- 一、講談者へは會長より委嘱狀を發すべき事
但職員訪問の上其承諾を受くべし
- 一、講談者の報酬は豫定し置くべき事

明治二十七、八年の日清戰役は當時我が建國以來の非常なる大事件であつた。二十七年七月二十五日豊島沖に海戰の火蓋を切つてから、八月一日に宣戰の大詔は煥發せられ、それまで事毎に烈しい政争を續けて來た朝野の議論は茲に忽ち鳴を鎮めて、舉國一致、官民結束、敢然必勝を期して總力を膺憲完遂の一途に集注した。これは勿論我が國體と國民性の當に然るべき所であるが、隨て我が教育界も亦只管戰時下の緊張裡に始終して、特に積極的の教育運動といふものはなかつたのである。

併しながら、二十八年四月平和克復となり、更に三國干涉の爲に遼東半島を還附するに及んで、戦後經營の根本國策たる教育の振興發展は、國力の充實、國威の伸展と共に最も緊切重要な問題であつたから、大日本教育會は此の點に就て左の調査事項を本會にも照會して來た。

大日本教育會より照會の調査事項

- 一、中小學校生徒に勤儉尙武の風を養成する方法
 - 一、愛國心と博愛心とを調和發達せしむる方法
 - 一、海事思想を發達せしむる方法
 - 一、移住思想を養成する方法
 - 一、風俗改善に關する目下の要件
 - 一、貧民子弟を就學せしむる方法
 - 一、小學校卒業生補習教育方法
 - 一、中學生徒の訓練方法
 - 一、戰役條約改正後に必要な教育の事項並に方法
- 之に對して本會に於ては、各問題毎に五名の調査委員を擧げて之に調査を依託し、尙左の規程を定めて處理の方法を明かにした。

調査事項處理規程

- 一、調査すべき事項を本會雜誌に掲載して時日を限り廣く會員の意見書を徵する事
但意見ある會員は常集會に於て口演せしむへし
- 二、各事項に三名乃至五名の委員を置いて調査起草せしむる事
- 三、各事項分擔を委員調査済の上は本會委員總會を開きて之を整理する事
- 四、本調査の上は大日本教育會に復牒する事
- 五、時宜により代表者を出して大日本教育會にて演說せしむる事

右の規程に依つて調査は進行せられたものと思はれるが、如何なる成案を得たかは記録を缺いて居るので不明である。唯斯様にして戰後新たな展開の機運が我が教育界にも又本會にも次第に勃興して、殊に明治三十一年八月我が國最初の政黨内閣の文部大臣尾崎行雄氏によつて、彼の箝口訓令が撤廢せられたことは、一層教育界を明朗にし活氣づけることになつた。

一六、會務擴張の運動

明治三十年四月、本會は戰後教育界の情勢に鑑み、大に會務を擴張し事業の振興を圖る爲に、特に委員を設けて調査した結果、先づ其の第一着手として會員の大募集を行ふことになつた。當時の會員は名譽會員として

子爵	芳川 顯正	渡邊 洪基	男爵	高崎 五六
侯爵	蜂須賀茂韶	富田鐵之助	文學博士	加藤弘之
辻 新次	芳野世經	子爵	榎本武揚	
銀林綱男	三浦安	侯爵	久我通久	

の十二氏の外に、終身會員の數は約百名、特別會員の數は明かでないが、普通會員の數は

明治二十九年三月末現在 八二六名

同 三十年三月末現在 九八〇名 (市部六一九名、郡部三一七名、管外四名)
 未だ一千名に充たなかつた。そこで議員會に於ても尙大に募集の餘地ありとし、本會の事業を擴張する爲には先以て府下の教育關係者を普ねく糾合して、一層實質を強化するの必要があるとの説が頗る有力であつたので、遂に同年七月に至り會務擴張方案第一號に依り會員募集委員を左の諸氏に委嘱した。

- 東京府第三課員 清水 澄 太田安茂
 府下各郡委員 平林百太郎 森 孝則 藤野了介
 中 村 賢 村上定一 中村盛太郎
 小林榮之助 小林祐之 城 至誠
 重富柳太郎 岩崎虎吉

公立小學校教員 丹所啓行 (外九十五名)
 私立小學校設立者 梅澤親行 (外十七名)

即ち百二十五名の募集委員を設けたのである。次で十月會長は會務擴張會員募集事務取扱委員を左の五氏に囑託した。

- 野尻精一 杉浦恂太郎 中山民生 日下部三之介
 今井市三郎

かくて委員は會員募集につき、各其の分擔區域を定めて盡力したので、着々其の効果が現はれて

明治三十一年三月末現在

市部 七五五 郡部 五六一 管外 六九 合計 一、三八五名

明治三十二年三月末現在

市部 九七九 郡部 六二四 管外 六一 島嶼 一八 合計 一、六八二名

即ち最初の一ヶ年間は約四百名を増加して一千三百八十五名となり、次の一ヶ年間は約三百名を増して一千六百八十二名となつた。其の後は概ね一千七百名の範圍に於て毎年多少の異動はあつたが著るしい増減はなかつたのである。

是より先、二十九年八月、本會は從來郡區の區別なく中央の役員に於て總ての事務を處理して居たが、漸次會員の増加に伴ひ自ら事務の膨脹を來し、中央の役員だけでは其の整理に困難になつたので、府下各郡に郡部委員會を置いて會費の徵集、入會の勧誘、教育事項の通信等に関して盡力を求むることとなり、會長より左の諸氏に郡部委員を委嘱した。

- 荏原郡 平林百太郎 豐多摩郡 森 孝則 北豊島郡 藤野了介
 南足立郡 中 村 賢 南葛飾郡 村上定一 南多摩郡 小林祐之
 西多摩郡 中村盛太郎 北多摩郡 内野吉次郎

其の後二三の異動があつて、三十一年一月には北多摩郡は重富柳太郎氏、豊多摩郡は相原喜一氏、南足立郡は圓藤光太郎氏に代つたが、同年八月相原氏が死去したので其の後任には田口兼吉氏を委嘱した。

當時本會の事務所は神田區一橋通二十一番地帝國教育會内に在り、其の前は麴町區内山下町一丁目二番地にあつて、帝國教育會（大日本教育會が國家教育社と併合して明治二十九年十二月帝國教育會と改稱す）内に移轉したのは三十一年八月であつた。

一七、本會の活動情況

明治三十年、同三十一年に於ける本會の活動は、前項の會務擴張に關する實行以外に、尙種々なる調査や實際施設が行はれたが、其の主なるものは

一、臨時教育事項の審査

戦後の國民教育に對する施設は、曩に大日本教育會の照會に應じて特に委員を設けて調査復讐する所があつたが、本會に於ても別に實際教育の全般に亘つて研究調査を行ふ必要があるといふので、野尻精一氏を委員長に、多田房之輔、日下部三之介の兩氏を主査に擧げて、角谷源之助氏外五名の委員が隔週一回調査會を開き、之が調査を續行することになつた。

二、小學校教授細目の調査

小學校の教授細目の編製は、小學校長の職務に屬することではあるが、一定の教科書を使用せざる教科目は、特に本府教育の實情に鑑み、之が基準となるべき細目編製の必要あるを認めて、先づ其の第一着手として英語、體操、唱歌、圖畫、裁縫の五科目に就て調査することになり、各科毎に特に其の科に造詣深き五名の委員を依囑して調査を開始した。

三、全國聯合教育會の議題審議

帝國教育會は三十年十月を以て全國聯合教育會を開催することを決定し、本會に對して參加を求め、同時に同會提出の議題を通知し來つたので、之が對案を審議する爲に毎題五名の委員を依囑した。尙其の議題は左の通りである。

- (イ) 義務教育の年限を延長すると、義務教育を普及すると何れが急務なるや
- (ロ) 小學校生徒に地理歴史理科の教科書を持たしむるの可否
- (ハ) 本邦尋常中學校の教育方法として寄宿制度を施行するの可否
- (ニ) 尋常中學校の入學程度を高むるの可否

此の聯合教育會には本會よりも左の議題を提出した。

- (一) 議員半數以上小學校教員を有する地方教育會議を設くるの可否

(二) 尋常中學校の教科目に現行法令及經濟初歩の二科目を加ふるの可否

(三) 警察令中少年に喫煙を禁制するの條項を加ふるの可否

(四) 小學校教科書の製本を洋製にするの可否

(五) 小學校教員優待法如何

四、小學校教育品展覽會の開催

前項の第一回全國聯合教育會の附設として帝國教育品展覽會が開かれるので、或は其の出品物豫選の爲でもあつたかと想像せられるのであるが、本會では之に先立て三十年四月に府下小學校教育品展覽會を開催した。會場並に會期等は不明であるが、あまり大きな規模ではなかつたやうである。

五、夏季女子講習會の開催

本會は既に教員養成の常設的附屬事業を經營して相當の成績を擧げてゐるが、更に女教員の爲に夏季講習會を企畫し、其の第一回を三十一年七月二十五日より八月二十五日に亘り開催した。講習科目及び講師は國語を府立第一高等女學校教諭小島政吉氏に、裁縫教授法を女子高等師範學校教授矢田部順子氏に依頼し、會場は神田橋外東京府第一高等女學校を借用し、百六十三名の講習員は毎日出席して頗る熱心に聴講したのであつた。

六、郡區聯合教育會の開催

府下各郡區の教育會は總て本會の支會として之が統合を期し、支會設置に關する規則までも制定したことは前既に記した通りであるが、郡區教育會には夫々特殊の沿革もあり事情もあつて、實際にはなか／＼容易に之が實現は出来なかつた。併しながら相互に連絡提携して府下教育の進展向上に努めやうとする點に就ては勿論一致してゐるので、遂に三十一年五月本會議員會に於て府下郡區聯合教育會開催の件を決議し、之に關する一切の準備を湯地孝平、市川雅飭、井上守久、高橋磯八郎、清水直義、松下專吉、山口袈裟治等七氏の委員に託した。其の後委員は數次の協議を重ねて會員並に討議題等を整理し、會場としては東京府會議事堂を借用する許可を得、準備全く成て同年十月十六日、十七日の二日間毎日午前九時より會議を開いた。郡區教育會代議員の出席せる者七十一名、第一日には肥塚東京府知事、第二日には松田東京市長來場して挨拶を述べ、東京府知事の諮問案外數件の議事日程を終つて閉會した。

議題は左の數件であつた。

一、東京府知事諮問問題

府下小學校教員補充法の最も適切なる方法如何

一、本會提出議題

(一) 市町村立小學校專科教員給料標準額を訂正するの議

本問題は標準額の最高を貳拾圓とし以下之に準じて訂正すべき事に決定

(二) 市町村費を以て市町村立小學校教員の住宅を設くるか又は教員に住宅料を與ふべき事(可決)

右二題は諮問の答申と共に東京府知事に建議として差出す事

(三) 尋常中學校の入學程度を高め且つ其の修業年限を短縮すべき事(可決)

(四) 市町村立小學校教員俸給を國庫支辨とすべき事(可決)

(五) 高等教育會議議員中へ小學校教員若干名を加ふべき事(可決)

(六) 教育と外國人との關係(調査案可決)

右四題は之を文部大臣に建議する事

尙此の聯合會は之を第一回として今後毎年繼續して開會することを決議し、會則の立案等は之を本會に依託して
次回の會議に於て決定することに申合せた。

右の他、此の期間に本會は教育法令の編纂發行を企畫し、之を完成して書肆をして刊行發賣させた。又從來市内
に於てのみ開會して居た本會の常集會を、三十一年七月以降郡部にも開會することにした。

此の如く本會は明治三十年四月の議員改選以後、時勢の進運に伴つて新鋭の意氣を以て活潑なる運動を展開し、
遂に三十二年五月、社團法人としての組織を確立するに至つた。

第二章 東京府教育會第二期

明治三十一年二月—同三十六年七月

一、社團法人の設定

子爵岡部長職氏の會長就任

本會の社團法人設定は會務擴張の一方案として夙に新議員間の話題に上つて居たのであるが、是より先、明治三十一年二月の議員會に於て、本會の現行規則が制定以來既に十年の歳月を閲みし、其の間臨時の必要に應じて數次の改正及び追加等が行はれた結果、其の形式が一見甚だ整備を缺けるのみならず、内容に就ても更に検討を要するものあるを以て、此際全般に涉り之が修正改訂を行ふべしとの議が起つて、議員會は滿場一致之を可決し、直に調査委員として湯地孝平、日下部三之介、梅澤親行、伊藤房太郎、風當朝朗の五氏を選び其の調査を依託したのである。其の後委員は屢々會合を重ね審議を盡し、民法施行法に依り公益法人設定の認可申請の場合をも豫料して、法定の條項を具備するやうに規則の全般に涉つて整理修正を施したのである。其の規則の全文は左の通である。

東京府教育會定款

第一章 總 則

- 第一條 本會ハ東京府下教育ノ改良進歩ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハ東京府教育會ト稱ス
- 第三條 本會ハ事務所ヲ東京市神田區一ツ橋通り町二十一番地ニ置ク
- 第四條 成年以上ニシテ本會ノ目的ニ同意ノモノハ會員タルコトヲ得
但教員タル資格ヲ有スルモノハ未成年者ト雖モ妨ケナシ
- 第五條 議員會ニ於テ特ニ本會ニ裨益アリト認メタルモノハ名譽會員トス
- 第六條 會費トシテ一時ニ金貳拾圓以上ヲ納メタルモノハ終身會員トス
- 第七條 入會セントスルモノハ住所、族稱、業務、氏名、年齢ヲ記載シ本會事務所ニ申込ムヘシ
- 第八條 退會セントスルモノハ其旨ヲ本會事務所ニ届出ツヘシ
- 第九條 會員ハ會費トシテ一ヶ月金拾錢ノ割合ヲ以テ三ヶ月以上ノ分ヲ前納スルコトヲ要ス、
- 第十條 會員ハ會務ニ關シ意見アルトキハ會長又ハ議員會ニ建議スルコトヲ得
- 第十一條 總會二ヶ月以前ニ會員ノ名簿ニ登録セラレタル者ニ非サレハ會長及議員ノ選舉ヲ行ヒ及定款ニ關スル議事ノ議決數ニ加ハルコトヲ得ス

第十二條 本會ハ毎年一回通常總會ヲ開キ左ノ事項ヲ舉行ス

但事宜ニ依リ臨時總會ヲ開クコトアルヘシ

一、重要ナル會務ノ報告

二、議 事

三、會長幹事長及議員ノ選舉

四、教育ニ關スル演說談話及討論

第十三條 總會ニ於テハ會長ヲ以テ議長トス

第十四條 總會ノ議事ハ出席會員ノ過半數ヲ以テ決ス、可否同數ナルトキハ議長ノ決スル處ニ依ル

第十五條 總會ニ出席セザル會員ハ書面又ハ代理人ヲ以テ議決ヲ爲シ若クハ選舉ヲ行フコトヲ得ズ

第十六條 本會ハ毎年三回市内ニ於テ通常會ヲ開キ教育ニ關スル演說談話及討論ヲナス

但便宜郡部ニ於テ臨時之ヲ開クコトアルヘシ

第十七條 通常會ニ於テハ會務ニ就キ決議スルコトヲ得ズ

第十八條 總會及通常會ノ招集ハ東京教育雜誌ヲ以テ通知ス

但時宜ニ依リ適當ト認メタル他ノ方法ヲ以テ通知スルコトアルヘシ

第十九條 本會ハ他ノ教育會ト聯合會ヲ開クコトアルヘシ

第二十條 臨時總會ハ理事若クハ議員會ニ於テ其必要ヲ認メタル時又ハ會員五十名以上ヨリ會議ノ目的タル事項ヲ示シテ請求シタル時之ヲ招集ス

第二十一條 會員中本會ノ定款ヲ遵守セス又ハ本會ノ名譽ヲ毀損スル行爲アリタルトキハ會長ハ之ヲ除名スルコトヲ得

第二十二條 本會ノ定款ハ總會ノ決議ヲ經ルニ非サレバ變更スルコトヲ得ズ

第二十三條 本會ノ事務所ハ會長ニ於テ便宜之ヲ變更スルコトヲ得

第二章 事業

第二十四條 本會事業ノ概目左ノ如シ

- 一、教育上ノ雜誌ヲ發行スルコト
- 二、教育事項ヲ審査スルコト
- 三、教育事業ヲ獎勵スルコト
- 四、教育功績者ヲ表彰スルコト
- 五、教員及保母ノ養成所ヲ設置スルコト
- 六、學術講習會ヲ開設スルコト
- 七、教育ニ關スル圖書類ヲ出版スルコト

第二十五條 本會ノ事業ハ議員會ノ協賛ヲ經テ執行スルモノトス

但議員會ノ發議ニ關スルモノハ會長ノ同意ヲ得ルヲ要ス

第三章 役員

第二十六條 本會ノ理事トシテ左ノ役員ヲ置ク

- 一、會長 一名
- 二、幹事長 一名
- 三、幹事 六名

第二十七條 本會役員ノ職務ハ左ノ如シ

會長ハ本會ヲ代表シ會務ヲ總理ス
幹事長ハ會長ヲ補佐シ一切ノ會務ヲ整理シ會長故障アルトキハ其職務ヲ代理ス
幹事ハ會務ヲ分掌ス

第二十八條 會長ハ總會ニ於テ幹事長及幹事ハ議員會ニ於テ會員中ヨリ之ヲ選舉シ其任期ヲ各二ケ年トス

第二十九條 役員ニ缺員ヲ生シタルトキハ補任者ノ任期ハ各其規定ニ從ヒテ前任者ノ殘任期間トス

第三十條 會長ハ書記ヲ置キ會務ニ從事セシムルコトヲ得

第三十一條 會長ハ委員ヲ設ケ之ニ特定ノ事項ヲ委任スルコトヲ得

第三十二條 會長ハ役員及委員等ニ手當又ハ報酬ヲ與フルコトヲ得

第三十三條 會長ハ處務細則ヲ定ムルコトヲ得

第三十四條 役員ハ便宜職員ヲ雇用スルコトヲ得

第四章 議員 會

第三十五條 本會ニ議員會ヲ置キ議員ヲ五十名トシ市部ヨリ三十名郡部ヨリ二十名ヲ選出ス

第三十六條 議員ハ半數ヲ總會ニ於テ公選シ半數ヲ會長ニ於テ特選シ各其任期ヲ二ケ年トス

但公選シタル議員ニ缺員ヲ生シタル時ハ議員會ニ於テ選舉ス

第三十七條 議員會ハ會長ニ於テ必要ヲ認メタルトキ若クハ議員五名以上ノ請求アリタルトキハ之ヲ招集ス

第三十八條 議員會ハ議員三分ノ一以上出席スルニ非サレハ議スルコトヲ得ズ

第三十九條 議員會ニ議長副議長ヲ置キ議員ノ互選トシ其任期ハ議員ニ同シ

第四十條 議員會ノ會議規定ハ會長ノ認可ヲ經テ議員會之ヲ定ム

第五章 會 計

第四十一條 本會ノ經費ハ會費寄附金及其他ノ收入金ヲ以テ之ニ充ツ

但餘剩ヲ生スルトキハ之ヲ蓄積シテ基本金トナスコトアルヘシ

第四十二條 本會ノ基本財産ハ議員會ニ於テ適當ト認メタル方法ヲ以テ之ヲ管理ス

第四十三條 本會基本財産ノ利子ハ議員會ノ決議ヲ經テ之ヲ使用スルコトヲ得其元本ヲ使用セントスルトキハ總會ノ決議ヲ經ルヲ要ス

第四十四條 本會ノ收支豫算ハ每會計年度前(四月ニ起リ翌年三月ニ終ル)議員會ノ決議ヲ經テ之ヲ定メ毎年度ノ

決算ハ該年度ノ終ヨリ三ヶ月内ニ議員會ノ承認ヲ經ルヲ要ス

但豫算外支出ヲ要スルトキハ豫メ議員會ノ決議ヲ經ヘシ

第四十五條 本會ノ出納及財産ニ關シテハ每會計年度ノ始ニ於テ議員中ヨリ互選ヲ以テ監査員五名ヲ定メ該年度内

ニ二回以上検査ヲ行ヒ其結果ヲ議員會ニ報告スヘシ

第四十六條 監査員ノ任期ハ一ケ年トシ缺員ヲ生シタルトキハ第二十八條役員ノ例ニ依ル

この規則は明治三十一年三月十九日開會の議員會に於て原案に多少の修正を加へて可決し、尋で同四月二十四日の總會に附議し満場一致を以て可決確定した。そこで新規則により直に役員の改選を行ふべきであつたが、現役員は未だ任期中であるから、一時規則改正の結果として六名の理事だけを選挙することにして、同月直に議員會を開いて選舉を行ひ、左記の諸氏が當選した。

杉浦 恂 太郎

◆井市 三 郎

梅 澤 親 行

菅 井 米 吉

伊藤 房 太郎

金 田 藤 吉

然るに杉浦、菅井の二氏は一身上の都合により辭任せられたので、同月更に開かれた議員會に於て、後任として

左の二氏を選挙した。

逸見幸太郎

成瀬勝文

同年四月理事長日下部三之介氏辭任し、會長以下役員の任期は未だ満期に至らざるも、既に規則を改正して社團法人の設定を決したる此の際、改正定款に依る新役員の選挙を行ふ必要があつたので、同年五月二十八日臨時總會を開いて、會長以下役員選挙を行ひ、會長には本會名譽會員子爵岡部長職氏を推し、幹事長には東京府尋常師範學校長田中敬一氏を選挙した。議員其他役員の名は左の通りである。

會長 岡部長職

幹事長 田中敬一

議員 風當朔朗

金田藤吉

松下專吉

金子忠平

奥田茂太郎

飯山七三郎

宮崎源三郎

丹所啓行

宮川盛

田村森太郎

土川五郎

八木金一郎

中村牧太郎

水野淺次郎

浦部虎松

高瀬菊次郎

今井市三郎

高橋卯之助

刈谷龍馬

中山民生

井上守久

清水直義

菅井米吉

梅澤親行

(以上市部)

伊藤房太郎

湯地孝平

大久保欣平

五十嵐文太郎

渡邊峰吉

金成龜次郎

小池菊次郎

小林榮之助

大山一夫

鈴木乙治

圓藤光太郎

山口袈裟治

長島彌三郎

相澤榮次郎

大岡六之助

奥野禎次郎

(以上郡部)

引續き同六日の議員會に於て、左の諸氏が幹事に當選した。

幹事 今井市三郎

逸見幸太郎

富岡總藏

金田藤吉

鈴木光愛

後藤東

同十二月幹事富岡氏辭任に付宮川盛氏補缺當選して、事務分擔を左の如く定めた。

庶務主任 鈴木光愛

金田藤吉

後藤東

今井市三郎

會計主任 逸見幸太郎

宮川盛

會長岡部長職子爵は舊泉州岸和田藩主岡部美濃守長發の長男に生れて、學習院卒業後米國に留學し、更に英國劍橋大學に學び、卒業後は英國公使館付となり、歸朝して外務次官を経て特命全權公使に任ぜられ、前東京府知事久我通久侯爵の後を承けて東京府知事に就任したのが明治三十年の十月であつた。在職僅に十ヶ月にして同三十一年

七月退官したのであるが、今回役員懇請を容れ本會長に就任せられ、其の後二十有餘年間稀代の名會長として本會統理の任務に當られたのであつた。

同三十二年十月十五日、民法施行法第十九條の規定により社團法人の認可願書を東京府を経て文部大臣に提出し同年十一月四日付を以て認可の令達を受け、同月二十九日登記を完了した。

二、東京府市補助金の交附

當時會員の數は市部に於て一〇三一名、郡部に於て六五七名、島嶼及び管外に於て八六名、合計一七一三名（三十二年三月末現在）に達し、新に前東京府知事肥塚龍及び現知事男爵千家尊福、現東京市長松田秀雄の三氏を名譽會員に推し、教員保姆傳習所の事業擴張、夏季女子講習會の開催、郡區聯合教育會の開設、全國市教育談話會の開催等、益々本府教育の發展向上に力を輸すと共に、更に活動の資源を確保して本會財政上の基礎を鞏固にする必要上、役員會に於て種々討究の後、終に補助金の下附を東京府及び東京市に請願することに決し、同三十二年七月議員會の決議を経て之を府市兩當局に出願した。然かも此の件に關しては固より府市會議員の贊助支援に依るのでなければ、其の實現は容易でないので、會員中より各郡區に亘つて毎區三名乃至五名の實行委員を依頼し、其の郡區選出の府市會議員に對して運動を開始したのであつた。かくて役員及び委員一同の熱心なる奔走の結果は遂に酬い

られて、翌年度の補助費豫算額は決定せられ、三十三年三月東京府知事は本會の請願を容れ、三十三年度本會經費の中へ金壹千圓、同東京市長は金六百圓の補助金交付の指令を發せられたのである。

此の補助金は其の後毎年府及び市より同額の交附があつて數年に及んでゐるが、本會の事業が之に依つて更に一段の發展充實を見るに至つたことは、獨り本會の爲のみならず、本府教育の爲にも亦大に欣幸とする所であることは勿論である。

三、調査部の開設

本會は從來調査を要する問題毎に委員を設けて之が審議を託して居たのであるが、かくては徒らに事務を煩雜ならしむるのみならず、調査の進捗も亦十分ならざる憾みがあるので、茲に更めて常設の調査機關を置くことになり明治三十二年十月教務及び市郡學制調査部を設け、部長、主事、委員を左の諸氏に委嘱した。

○教務調査部 部長 田中敬一

主事	中山民生	村田亮輔	今井市三郎
委員	稻枝俊太郎	森田勝	多田房之輔
	横須賀純	千葉喜作	渡邊勇助
			風當朔朗

○市學制調査部 部長 伊澤修二

主 事 沼田 悟郎 菅井米吉

日下部 三之介

委 員 山崎 彦八

磯部武者五郎

松見 文平

清水直義

高橋磯八郎

井上 守久

角谷源之助

○郡學制調査部 部長 相澤喜兵衛

主 事 後 藤 東

湯地 孝平

伊藤房太郎

委 員 山口 袈裟治

大久保 等

田中 瑞穂

高松喜六

塗師谷 秀教

圓藤光太郎

同三十三年第一回調査部會を開いて、本會理事長日下部三之介氏より本部設置の趣旨及び注意を述べ、次で左の協議をした。

一、調査部内規を定むる爲に主事に起草を託し本月中に決定履行のこと

此の如にして調査部の活動は直に開始せられたものと思はれるが、然かも尙從來委員に依頼した問題に就ては此の後も暫らく繼續して調査を進めることにしたやうである。

同三十四年六月、議員會は調査部の組織を改め、新に左の規程を定めた。

東京府教育會調査部規程

第一條 本部は教育に關する事項を調査す

第二條 本部は左の常務委員を置き部務を整理す

部長 一人 委員 九人

第三條 部長は議員會に於て選舉し委員は會長之を囑託す。其任期は各二ケ年とす。

この規程によつて多田房之輔氏が調査部長に當選し、同七月左記の諸氏に調査部委員を囑託した。

委 員 丹 羽 勉

山田 久作

大戸 榮吉

前田 捨松

加納友之助

奥野 頑次郎

千葉 喜作

成瀬 勝文

金子 忠平

同九月に委員の定員一名を増し、山崎彦八氏に委員を依頼したが、越えて十二月に至つて議員會は再び調査部規程の改正を決議し、同時に會長は改めて部員を囑託した。即ち左の通りである。

東京府教育會調査部規程

第一條 本部は教育に關する事項を調査す

第二條 本部は左の部員を常設す

部長 一人 主事 二人

委員 若干人

第三條 部長主事及委員は會長之れを囑託す

第四條 本部に關する細則は會長之れを定む

尋で會長は部員を左記の通り依頼した。

部長	岡五郎	村田亮輔	大塚 薫	山崎彦八
主事	田中瑞穂	弘瀬時治	成瀬勝文	金子忠平
委員	山田久作	千葉喜作	清水直義	高松喜六
	奥野禎次郎	小杉彦治	井上守久	磯部武者五郎
	林 俊 彌	松長光吉	松尾清次郎	伊藤貞勝
	松山傳十郎	中島謙吉		
	今 景 彦			
	勝浦 軔 雄			

その後岡五郎氏は辭任して湯本武比古氏が後任部長となつた。而して翌三十五年に至つて調査委員會を開き、左の問題に就て決議をした。

一、公德養成に關する件

右は範圍を小學校兒童と限定して調査する事

一、兒童の感化に影響を及ぼす事項取締の件

右は悪影響と限定し東京市内に行はるゝ事項に付調査する事

一、兒童の快樂を増進する方法

右は東京市内を中心として調査する事

二、植物園設立に關する件

以上四項に就て部長は調査委員を選定指名することになり、左の諸氏を指名した。

第一項	湯本武比古	小杉彦治	清水直義
第二項	松山傳十郎	大戸榮吉	金子忠平
第三項	山崎彦八	千葉喜作	山口袈裟治
第四項	林 俊 彌	小杉彦治	清水直義

四、前調査委員の成果

前項の調査部設置以前、既に調査委員に依託せられた幾多の問題の中、特に府下教育の實際に顧みて、本會に於て積極的に實行した二三の事項を挙げれば、

一、小學校習字帖語文編纂の件

小學校習字帖の改良に就ては曩に明治二十四年より二十五年に亘つて、小學校兒童の一週間に學習する字數並に其の大小の基準、及び習字帖の材料たる語文の撰定等、種々なる研究調査が行はれたが、時勢の變遷に伴れて更に之が再検討の必要を認めて、同三十三年九月の議員會の決議に依り、會長より編纂委員として、森田勝、岸田松二郎、八木金一郎、平田芳太郎、日根富三郎、服部乙次郎、大塚薫、逸見幸太郎、立柄教俊、今井市三郎の諸氏を囑託し、委員は其の後屢々會合して研究を遂げ、成稿の上之を會長に報告した。會長は更に之を府知事に建議して其の採擇を請願したのである。

一、東京府民公德唱歌撰定の件

當時我が國民の公德は未だ一般に遺憾の點少からず、殊に全國の首都たる本府民は範を全國に示す意味に於ても率先して之が實踐指導に力むる必要あり、その爲には先以て公德養成上適切なる唱歌を作製して小學校兒童に授け、之が普及を圖るを捷徑とするといふ議員會の決議に基き、明治三十四年七月、會長は山崎彦八、岸田松二郎、小出雷吉、松山傳十郎、田中瑞穂の五氏を右撰定委員に擧げ、委員は審議の後、歌詞の製作を大和田建樹氏に依頼した。大和田氏は當時斯道の大家として一般に推された人である。同氏の初稿は委員會に於て検討の上意見を附して、更に同氏の推敲訂正を得て脱稿し、作曲は小山作之助氏に依頼して、三十五年三月完成した。そこで書肆自省堂に命じて出版させ、府下各小學校に配布すると共に同年四月二日、作曲者小山作之助氏を聘して府下各小學校唱歌擔任の教師四百餘名に講習せしめた。

一、國語讀本庶物標本撰定の件

小學校の國語讀本中に採録せられたる動植物其他の工作品の標本の教育上必要なることは今更謂ふまでもないが、之が適當なる標本の製作と出來得る限り低廉なる價格を以て供給せしむる方法を講究する目的を以て、撰定委員を設けることになり、會長は今井市三郎、飯山七三郎、山口袈裟治、清水直義、松下專吉、平田芳太郎、湯澤直藏の七氏に委員を依頼し、委員は屢々會合して熱心に調査研究の結果、三十四年九月に至つて一先づ撰定を完了して會長に報告した。よつて本會では之を教育用品合資會社に託して、其の製造販賣に當らせることにした。

五、教員養成事業の概況

明治三十二年、本會法人設定以後の教員養成事業は益々健實なる發展を遂げ、教員傳習所主幹中山民生氏、家事科教員養成所主幹谷田部じゆん氏、幼稚園保姆傳習所主幹田中ふさ氏、外各所囑託講師の熱心なる指導により、毎年多數の卒業生を斯界に輩出せしめたのである。即ち

一、教員傳習所卒業生

明治三十二年十月

第十回卒業生

四十二名

同 三十三年七月 第十一回同 三十九名
 同 三十四年四月 第十二回同 五十一名
 同 第十三回同 四十名

(三十四年五月本所教室として東京府第四中學校々舎の一部借用の件許可せらる)

同 三十四年十月 第十四回同 四十六名
 同 三十五年四月 第十五回同 五十九名
 同 年十月 第十六回同 五十四名

一、家事科教員傳習所

明治三十二年四月 第十四回卒業生 三十一名
 同 年十二月 第十五回同 四十七名
 同 三十三年五月 第十六回 普通科同 三十二名
 同 年十一月 第十七回 本科同 五名
 高等科同 三名
 (三十四年三月本所教室として東京府第一高等女學校校舎の一部借用の件許可せらる)
 同 三十四年四月 第十八回卒業生 四十名
 (同年四月會長は東京府第一高等女學校校長伊藤貞勝氏に本所長を委囑す)

同 年十月 第十九回卒業生 二十六名
 同 三十五年四月 第二十回同 四十二名
 同 年十月 第二十一回同 四十五名

一、幼稚園保婦講習所

本講習所は三十一年七月を以て一時休止し、同三十三年十二月に更めて設置の認可を受け、翌三十四年一月傳習所用として東京府第一高等女學校校舎の一部借用の件許可せられた。依て同月二十三日帝國教育會の講堂に於て本所開設の披露並に傳習生募集依頼の爲に、東京府小學校長、幼稚園主、同設立者等を招待して、會長代理今井幹事より依頼する所あり、所長には中村五六氏を依頼して同月授業を開始した。

明治三十四年七月 第一回卒業生 四十名
 同 三十五年四月 第二回同 三十一名

一、英語教員傳習所

本所は明治三十一年十月、主幹を文學士村上直次郎氏に、講師を増野悅興、茨木清次郎、和田琳熊、大村信二郎の四氏に囑託して、十一月一日開所式舉行、同月七日授業を開始した。三十二年九月村上主幹海外留學の爲辭任につき、講師和田琳熊氏に主幹を囑託する。

明治三十三年四月 第一回卒業生 三十三名

同月和田主幹京都同志社へ赴任につき辭任し、文學士雀部顯宜氏に主幹を囑託す。然るに同年十月小學校令の改正に依り本傳習所の學科課程に改正を加ふる必要を生じたので一時休止の件を府知事に申請して直に認可を得た。而して在學中の生徒には同年十一月に至つて他の傳習所卒業生と同時に卒業證書を授與したのである。

明治三十三年十一月 第二回卒業生

十六名

かくて英語教員傳習所は卒業生を出すこと僅に二回にして休止することになつたのであるが、此の間即ち明治三十二年以降、此等各種の教員養成事業の事務に盡力せられた委員並に書記等の諸氏は左の通りであつた。

本會理事長	日下部 三之介	田中 敬一	逸見幸太郎
(本會幹事)	後 藤 束	金田藤吉	梅澤親行
(傳習所主任)	山崎彦八	井上守久	市川雅飾
傳習所委員	沼田悟郎	圓藤光太郎	大塚 薫
	田中次郎三	澁谷元良	村田亮輔
同 書記	高橋至誠	弘瀨時治	

六、講習會の開設

一、第二回夏季女子講習會 明治三十一年七月開設の第一回夏季女子講習會は頗る盛況であつたことは既に記述した通りである。そこで翌三十二年にも之を開催することとなり、同年四月第二回夏季講習會主幹を梅澤親行氏に、理事を逸見幸太郎、金田藤吉の兩氏に、委員を丹所啓行、村田亮輔、岸田松二郎、中村条次郎、風當朝朗、小島政吉、富岡總藏の七氏に依囑して、(富岡、風當の二氏は後に主任幹事となり、委員に杉浦洵太郎、伊藤貞勝の二氏を追加す)尙臨時委員として種村ゆき、明石よし、星つね、青木つね、田中ふさ、植村くに、須磨さだの諸氏を囑託して、諸般の準備を整へ、同年七月二十七日を以て開講した。會場は東京府第一高等女學校で、講師は左の諸氏であつた。

一、音 樂	小山作之助	一、家 政	後閑菊野
一、裁縫教授法	谷田部順	一、國 語	原田長松

開講中に講習員に左の學校を參觀せしめた。

東京盲啞學校 女子高等師範學校 東京音樂學校

八月十七日講習を終り、二百四十八名に修了證明書を授與した。

二、第三回夏季講習會 翌三十三年度よりは更に之を擴張して、男、女兩講習會を開催することとなり、同年四月村田亮輔、清水直義、森田勝、雀部顯宜、小島政吉、長坂頼幸、宮川盛、中山民生、黒澤道五郎、今井市三郎、山田久作の諸氏に委員を委囑し、講習科目を

男子部 國語、算術、教育、體操
女子部 國語、算術、家事、唱歌

と決定し、講師を小山作之助、後閑菊野、弘瀬時治、吉田彌平、中山民生、大島奎五郎、小島政吉の七氏に依頼し、会場は神田一橋通町高等師範學校附屬小學校内を借用して、七月二十六日を以て始業式を擧げ、八月十六日閉會式を擧行した。講習員は男子百三十五名、女子百五十五名で、然かも其の出身地は二府二十二縣の廣區域に亘り、遠きは鹿兒島縣より特に受講の爲に上京したのもあつた。開講中に講習員に參觀せしめた場所は

日本體育會、東京電燈株式會社發電所、千住製絨所、横須賀造船所、帝國軍艦八島、新宿植物御苑、東京瓦斯株式會社製造所、東京市水道部淀橋淨水工場、東京衛生試驗所、東京帝國大學工科大学、東京天文臺等にして、是亦講習員一同の最も歓迎したところであつた。

三、第四回夏季講習會 かくて本會の講習會は今や全國的の夏季施設として發展したので、本會に於ても大に之に力を得て、翌三十四年二月第四回夏季講習會委員を村田亮輔、清水直義、小島政吉、中山民生、宮川盛、今井市三郎、逸見幸太郎の諸氏に委嘱して準備を進め、今回は女子講習會として、

- 一、開講日時及期限は八月一日より三週間とすること
- 二、學科は教育、國語、裁縫教授法、音楽、禮式とすること
- 三、中山民生氏を講習會委員長に推し、理事は委員長の指名とすること

を決定し、講師は大體前回と同じく、科外の講演として辻新次氏、棚橋絢子女史、清水直義氏等を依頼し、八月一日東京府第一高等女學校に於て開會式を擧げ、直に講習を開始して、八月二十二日閉會式を行つた。今回證明狀を授與した講習員は三百八十五名であつて、其の地域は二府二十三縣の廣きに及んだのであつた。

四、第五回夏季講習會 第五回の夏季講習會は引續き翌三十五年七月に開會した。今回も講習員を特に女子のみに限ることとし、委員は前回の通り中山民生氏外十一氏に依頼し、

- 一、中山民生氏を委員長に推し、村田亮輔、今井市三郎、溝口鹿次郎の三氏を理事に選定すること
- 二、講習期日は七月二十八日より八月十六日まで三週間とすること
- 三、學科及講師は左の諸氏とすること

國語 前田捨松 音楽 小山作之助
家政 波多野とく子

四、講習会場は東京府第一高等女學校を借用することとし、講習時間は午前中とすること

五、尙裁縫教授法及び遊戯の科外講演を開くこと
等を決定した。

五、女子學術講習會 前記の通り本會は明治三十一年以降毎年夏季講習會を開催して常に多大の成績を擧げ來りしも、當時府下の女教員其他女子の向學心は頗る盛んであつて、未だ之を以て満足せざる情勢に鑑みて、本會に於

ては遂に常時に於ける女子學術講習會の開設を決行するに至つた。即ち明治三十四年十二月會長は村田亮輪、中山民生、梅澤親行、今井市三郎、溝口鹿次郎、前田捨松、杉浦恂太郎の七氏を擧げて女子學術講習會委員とし、之が實施に關する一切の計畫及び其の施行に當らせることにした。委員會は五選の上中山民生氏を委員長に、村田亮輪今井市三郎の兩氏を理事として、協議の結果、學科は理科及び家庭教育の二科目とし、講習期間は三ヶ月、毎週日曜日の午前三時間と定め、講師は理科を女子高等師範學校教授岩川友太郎氏に、家庭教育を下田歌子女史に託し、三十五年二月第一回女子學術講習會の開講式を行つた。當日までに入會を申込みたる者三百十二名であつた。講習は豫定の通り進捗して同年四月二十日府立第一高等女學校に於て講習證明狀授與式を行ひ、修了生二百四十九名に對して證書を授與した。

次で第二回女子學術講習會は、同年五月開設、學科及び講師は博物を理學博士齋田功太郎氏に、禮式を小笠原清務氏に託し、期間其の他は大體前回に準すること、して開講し、同年七月二十日を以て修了、東京高等師範學校附屬小學校に於て證明狀授與式を行つた。此の講習の證明狀受領者は八十名であつた。

引續いて第三回女子學術講習會を同年十月に開講した。學科及び講師其の他は總て前回の通りで、此の講習期間中に下田歌子女史、安井哲子女史の科外講演あり、十二月十四日を以て終了、當日證明狀を授與したる者百四十五名であつた。

七、通信講義録の發行

本會は前記の通り女子教育の趨勢に顧みて既に數回の講習會を開催せしも、これは孰にも通學可能者の爲にするものであつて、遠隔の地若しくは通學の暇なき者にして修學の希望を有する者に對しては満足を與ふること能はざる憾あるを以て、更に通信教授の方法を企畫し、明治三十四年十二月林吾一氏を委員長に、清水直義、村田亮輔の兩氏を主事に、風當朝朗、後藤東の兩氏を委員に依頼して、女子講學會設定の事を掌らしむることにした。委員諸氏は種々協議を重ねて遂に同三十五年二月を以て左の規則に依り女子學術講義録第壹卷第壹號を發行したのである。

東京府敎 育會附屬 女子講學會規則

- 第一條 本會は女子に必要な學術技藝を授け其の智徳を高むるを以て目的とす
- 第二條 本會は前條の目的を達せんが爲めに女子學術講義と名くる講義録を發行するものとす
- 第三條 本會々員たらんと欲する者は入會申込書に入會金貳拾錢を添へて本會に申込むべし
- 第四條 本會々員は會費として一學期間即ち十八ヶ月間分金四圓五拾錢を前納すべきものとす
但三回乃至六回に分納するも差支なし
- 第五條 本會は毎月一回紙數凡百五十頁の講義録を發行し之を會員に配付するものとす
- 第六條 本會に左の職員を置く

一、會長 一名 二、講師 若干名 三、委員 若干名

第七條 本會は東京府教育會長を會長とす

第八條 本會講義録は一ヶ年半を以て一期とし其間連續閱讀したる會員には講師に於て連署し會長に於て承認したる講義修了證を授與するものとす

第九條 本會々員は講義録所掲の事項に關し隨意質問することを得
但其應答は講義録に掲載す

第十條 本會々員は和歌詩文其他の投稿を爲すことを得

附 則

第十一條 本會第一期講義録は明治三十五年二月三日を以て第壹號を發行し爾後毎月三日を以て發行定日とす

第十二條 本會第壹期講義録には左の諸件を掲載す

- 一、修身 一、國語 一、地理
- 一、歴史 一、理科 一、家政
- 一、作法 一、兒童心理 一、女子衛生
- 一、割烹 一、女子に必要なる大家論說 一、女子に必要なる社會事件の報告
- 一、女子の娛樂に供すべき文藝諸件 一、其他女子に必要なる諸件

この講義録及び講師は左の通りであつた。

- 一、修身科 篠田利英 一、國語科 佐方鏡子

- 一、地理科 伊藤貞勝 一、歴史科 高木みつ子
- 一、理科 林吾一 一、家政科 下田歌子
- 一、裁縫科 喜多見佐喜子 一、作法 小笠原清務
- 一、兒童心理 松本孝次郎 一、女子衛生 鷺山彌生子
- 一、割烹科 赤堀峰吉

八、東京府聯合教育會の開催

明治三十一年十月開催の第一回本府聯合教育會の決議に基き、本會は同三十二年八月左の規則を制定した。

東京府郡區聯合教育會規則

第一條 東京府教育會及東京府下各郡區教育會ハ東京府教育ノ改良進歩ヲ謀ル目的ヲ以テ聯合教育會ヲ開クモノトス

第二條 本會ハ東京府郡區聯合教育會ト稱シ左ノ代議員ヲ以テ之ヲ組織ス

- 一 東京府教育會代議員十五名
 - 一 各郡區教育會代議員三名以内
- 但シ各郡區ニ教育會ノ設ナキトキハ該郡區ハ便宜ノ方法ヲ以テ代議員ヲ參會セシムルコトヲ得

第三條 本會ハ毎年一回便宜ノ地ニ於テ之ヲ開ク

但シ緊急ノ議案アルトキハ臨時會ヲ開クコトヲ得

第四條 本會ノ常務ヲ處理スルタメ委員十名ヲ置ク其選出法左ノ如シ

但シ委員ノ任期ハ一ケ年トス

一、東京府教育會ヨリ五名

一、各郡區教育會ハ通常會ノ際順次抽籤ヲ以テ當番ヲ定メ區教育會ニ於テ各三名、郡教育會ニ於テ各二名

第五條 本會ノ議案ハ聯合シタル教育會之ヲ出案シ委員會ニ於テ取捨整理シ開會三週間以前ニ聯合シタル各郡區教育會ニ送附

スルモノトス

但シ議案提出ノ期限ハ委員ヨリ聯合シタル教育會ニ通知スヘシ

第六條 聯合シタル各教育會ハ左ノ割合ニ據リ費用ヲ負擔スルモノトス

一、東京府教育會 總費用ノ三分ノ一

一、各郡區教育會 總費用ノ三分ノ二

第七條 本會ノ收支豫算ハ委員會ニ於テ之ヲ定メ其ノ決算ハ聯合シタル各教育會ヘ報告スルモノトス

但シ聯合シタル各教育會ハ委員ノ通知ニヨリ費用ヲ融出スヘシ

第八條 本會議長ハ東京府教育會長之ニ當リ議長代理者ハ出席議員ノ互選ヲ以テ之ヲ定ム

第九條 議事ハ普通議事法ニヨル

第十條 會議ハ代議員半數以上出席スルニアラザレバ開クコトヲ得ズ

第十一條 議事ハ出席代議員ノ過半數ヲ以テ決ス、可否同數ノトキハ議長之ヲ決ス

第十二條 此規則施行ニ關スル細則ハ委員會ニ於テ之ヲ定ム

此の規則の制定と同時に第二回郡區聯合教育會委員及臨時委員を左の諸氏に委嘱した。

委員 金子忠平 清水直義 松下專吉 宮川盛

山口袈裟治 奥田茂太郎 大山一夫

臨時委員 松田常盤 山田久作 福寄幸三郎 中村条次郎

梶浦鯉之助 田住織江 岸田松二郎

委員會は爾後三回會合して、開會日時、問題選定、討議問題提出日限、其他一切の準備に就て協議し、同十月の

議員會に於ては左の諸氏を本會代議員に互選した。

代議員 田中敬一 岡五郎 鈴木光愛 清水直義

梅澤親行 日下部三之介 丹所啓行 沼田悟郎

中山民生 山田弘毅 奥田茂太郎 八木金一郎

松下專吉 井上守久 金子忠平 (以上十五名)

第二回東京府聯合教育會 かくて第二回の郡區聯合教育會は第一回の例により東京府議事堂を會場として、同年十一月十八、十九の二日間開會、出席議員七十一名、豫定の議案及び府知事よりの諮問案を議し、其の間諸種の委員を舉げて殆んど日程全部を議了して閉會した。閉會後出席者一同帝國教育會に於て懇談會を開いて尙大に意見の交換を行つたのである。

此の聯合教育會の議案中、可決の上其の筋に建議したる事項は左の如くである。

一、文部大臣に建議したる事項

- 一、小學校教員の俸給を國庫支辨とせられたきこと
- 二、東京府町村立小學校教員俸給義務額を高められたきこと
- 三、小學校教員免許狀を全國を通じて効力あるものとせられたきこと

一、東京府知事に建議したる事項

- 一、小學校長若くは首席教員の住宅を設けられたきこと
- 二、小學校教員に住宅料を支給せられたきこと
- 三、東京府教育會議を設けられたきこと
- 四、現行小學校教科用圖書を速に更定せられたきこと
- 五、中學校及高等女學校を増設せられたきこと
- 六、小學校教員講習會を郡部便宜の地に定期開設せられたきこと

一、東京市長に建議したる事項

- 一、東京市役所に教育部を設け且視學專務吏員を置かれたきこと
- 二、中學校高等女學校を増設せられたきこと
- 三、東京市に教育調査會を設け本市教育の施設計畫を調査せしめられたきこと

第三回東京府郡區聯合教育會 は明治三十三年十一月廿四、廿五日を以て東京府議事堂に開いた。本會より選出の

代議員は左の諸氏である。

瀧澤菊太郎	岡五郎	林吾一	金子忠平	清水直義
奥田茂太郎	松下專吉	中山民生	梅澤親行	日下部三之介
丹所啓行	高橋卯之助	山田久作		

出席代議員は六十九名であつて、府知事諮問案外十六件を議了した。其の中文部大臣及び東京府知事東京市長に建議したる事項は左の九件であつた。

一、文部大臣へ建議

- 一、市町立小學校教員俸給を國庫支辨とすること
- 二、明治三十年勅令第二號小學校教員俸給義務額を適當に増加すること

一、東京府知事に建議

- 一、東京府教育會議を設けること
- 二、現今小學校教科用圖書を更定すること
- 三、成るべく速に各區に低度の實業學校を設置せんことを獎勵すること
- 四、東京府に於ける高等小學校の第三四學年は校數を限りて設置すること

一、東京市に建議

- 一、成るべく速に各區に低度の實業學校を設置せんことを獎勵すること

- 二、東京市に於ける高等小學校の第三四學年は校數を限りて設置すること
- 三、東京市役所に教育部を設け且視學事務の吏員を置くこと

第四回東京府聯合教育會 は明治三十四年十月十九、二十の兩日開會、今回より從來の郡區聯合教育會の名稱を改めて、單に東京府聯合教育會と稱することにした。出席の本會代議員は左の諸氏である。

岡	五郎	中山	民生	日下部	三之介	瀧澤	菊太郎	林	吾一
清水	直義	今井	市三郎	逸見	幸太郎	松山	傳十郎	多田	房之輔
松下	專吉	千葉	喜作	梅澤	親行	高松	喜六	小杉	彦治

出席代議員の總數六十七名、決議により左の十二件を夫々其の筋に建議したのである。

一、文部大臣に建議

一、小學校令施行規則規定の字音假名遣と國語假名遣を一般に適用すること

一、東京府知事へ建議

- 一、明治三十四年府令第四號を以て更定せられたる小學校教科用圖書全部を來學年度の始より各學年の兒童に用ひしむること
- 二、本府小學校に學校長住宅を附設し教員には住宅若しくは住宅料を給すること
- 三、本府小學校教員獎勵規程を設けること
- 四、教育基金令第八條によりて小學校教員獎勵規程を設けること

五、東京府教育會議を設けること

六、郡市に小學校長會を設けること

七、本府師範學校に研究科を設けること

八、小學校兒童用教科用書の紙質製本等を粗悪ならしめざる様監督を嚴にすること

一、東京市長に建議

一、東京市に教育部を設け視學事務の吏員を置くこと

二、東京市教育調査會を設け若干の常設委員を置くこと

三、小學校増設に關する東京市の補助費を建設費の二分の一に増加すること

第五回東京府聯合教育會 は同三十五年十月二十五、二十六の兩日東京府廳議事堂に開會す。本會代議員は左の諸氏で、今回は従前の例によらず、七名に減員したのは如何なる事情であつたらうか。

日下部	三之介	山崎	彦八	清水	直義	松下	專吉	金田	藤吉
村田	亮輔	逸見	幸太郎						

出席代議員六十六名、東京府知事の諮問案を始め、聯合各教育會より提出の議案二十八件を議了し、其の内其の筋に建議した事項は左の通りである。

一、文部大臣に建議

一、小學校に於て教授する國民禮法の標準を定むること

- 二、小學校は尋常高等の區別を廢し修業年限を六ヶ年とし且修業年限三ヶ年以内の補習科を附設するものとする
- 三、高等小學校女子の每週教授時數を二十八時間に減ずること

一、東京府知事に建議

- 一、東京府の各郡及東京市の各區に簡易圖書閱覽所を設けること
- 二、毎年二回以上無授業料の教員講習會を郡市便宜の地に開くこと
- 三、簡易實業補習科教員を養成する方法を設けること
- 四、師範學校甲種講習科の學科を農業とし明年度より開始すること
- 五、市内各所に兒童の爲め遊園を設けること
- 六、小學校兒童轉校の場合に必ず學籍簿の寫を授受すること
- 七、明治三十三年本府令第八十六號第二十二條但し書及び第二十五條本文を改正すること
- 八、高等小學校女子の每週教授時數を二十八時間に減ずること
- 九、次回の乙種講習會を女教員養成の爲め本府女子師範學校に開設すること
- 十、本府小學校英語教科書を更定すること
- 十一、本府市町村立小學校屋外體操場を一般兒童の遊戯場に充つる爲め其の開放を實施すること
- 十二、東京府の高等小學校は二年程度のものとし且大ぎの三項の如くすること
- 土地の情況により一年程度又は二年程度の補習科を附設すること
- 土地の情況により四年程度の高等小學校を設置し得しむること
- 尋常小學校の卒業者は二年程度の高等小學校に入り卒業するを期せしむべく勉めて勸誘すること

一、東京市長に建議

- 一、市内各所に兒童の爲め遊園を設けること
- 二、東京市の各區に簡易圖書閱覽所を設けること

九、全國市教育談話會

是より先、帝國教育會は曩に明治二十四年に開催せし全國聯合教育會を繼承して、三十年十月第一回の全國聯合教育會を開き、一道三府三十八縣下の代議員百五十餘名を會して非常に盛會であつたが、此の機會を利用して本會も亦全國市聯合教育會の開會を企畫し、委員を擧げて帝國教育會に交渉したのである。然るに日程其の他の關係上この計畫は遂に實現するに至らずして止んだ。依て同三十二年四月第二回の全國聯合教育會開會の際には、早くより委員を選んで帝國教育會と交渉を遂げ、同會の日程中に加へて同四月十九日本會の主催を以て全國市教育談話會を開會した。會する者百餘名、全國市教育者が互に膝を交へて各市の教育情況を語り、今後の連絡提携に就て意見を交換し、演説に談話に殆んど盡くる所を知らざる盛況にて、來會者孰れも大に満足せしものゝ如く、本會に於ても亦其の成功を喜んだのであつた。

一〇、關東教育大會

帝國教育會主催の全國聯合教育會は、前記の通り明治三十年を第一回として爾後隔年一回開會して全國教育界の氣脈を通じ、輿論を天下に發表する機會を作ることになつてゐたが、本會は更に關東地區を統合して一層緊密なる連絡提携を圖り、相共に教育問題を研究討論して以て斯界の振興發展に寄與すべく、明治三十四年十月の第四回東京府聯合教育會に關東教育大會開催の議を提案し、同會は滿場一致之を可決したので、茲に委員を設けて其の準備に着手した。

委員は村田亮輔氏外二十名であつて、協議の結果、主催者は東京府教育會、開會時期は三十五年五月と決定し、參加區域を神奈川縣、千葉縣、茨城縣、埼玉縣、栃木縣、群馬縣、山梨縣、長野縣及び東京府の一府八縣として、暫定的に大會規則を定め、各縣に對して勸誘狀を發送し、同時に議案の提出を求めたのであつた。然るに其の反響は頗る盛んであつた。孰れも奮つて代議員を參加せしむべく、且各地方教育會の決議を以て續々議案を提出し來つた。

そこで本會に於ては三十五年四月代議員として、岡五郎、瀧澤菊太郎、黒田綱彦、日下部三之介、磯部武者五郎、清水直義、今井市三郎、梅澤親行、水野浩、松山傳十郎の諸氏を會長より指名し、尙大會委員として松下專吉、清

水直義、林吾一、井田忠信、後藤東の五氏を委嘱し、諸般の準備を整へ、議事、庶務、會計、應接等の各係員を設け、東京府會議事堂を會場として、豫定の通り三十五年五月廿二日より廿五日に至る三日間、關東教育大會を開催した。出席の代議員は百二名であつた。

關東教育大會提出議案

甲號議案

一、教育制度ニ關スル議案

- (1) 教育銀行ノ設立ヲ其筋ニ建議スルコト

要 領

學校新設及設備ニ對シ資金ヲ貸付スルヲ以テ目的トシ其組織ハ日本勸業銀行日本興業銀行農工銀行等ノ如クスルヲ要ス

- (2) 義務教育ニ關スル費用ノ一部ヲ國庫支辨トスベキコトヲ其筋ニ建議スルコト (以上東京府教育會提出)

- (3) 小學校圖書審查委員會ヲ廢止セラレンコトヲ文部大臣ニ建議スル件 (茨城縣稻敷郡教育會提出)

- (4) 小學校教科用圖書審查制度變更ノ議 (千葉縣教育會提出)

- (5) 尋常小學校卒業者ニ對シ教育點呼ヲ行フノ議及其方法如何 (山梨縣教育會中巨摩郡支會提出)

- (6) 市ニ視學ヲ置クコトヲ其筋ニ建議スルコト (茨城縣教育會提出)

- 但市ノ大小ニヨリ專任若クハ兼任トナスコトヲ得ルコト

二、教員待遇ニ關スル議案

- (1) 小學校教員俸給ヲ國庫支辨トスルコト (神奈川縣三浦郡教育會提出)

- (2) 教育功績者ニ對シ特別ノ表彰法ヲ制定セラレンコトヲ建議スルコト (山梨縣教育會提出)
- 三、教科用圖書ニ關スル議案
 - (1) 小學校兒童用教科書ヲ國定トセラレンコトヲ其筋ニ建議スルコト (東京府北多摩郡教育會提出)
 - (2) 尋常小學校ノ教科用圖書ヲ全國一定ニスルコト (神奈川縣三浦郡教育會提出)
 - (3) 小學校用教科用圖書ハ總テ國定トナシ或制限ノ下ニ個人ヲシテ之ヲ出版發賣セシムルコトヲ其筋ニ建議スルコト (山梨縣教育會提出)
- 四、教育會ニ關スル議案
 - (1) 關東教育大會繼續ノ件 (千葉縣教育會提出)
 - (2) 系統的教育會ノ設立ヲ其筋ニ建議スルコト (茨城縣教育會提出)
 - (3) 系統的教育會ヲ公設セラレンコトヲ其筋ニ建議スルコト (山梨縣教育會入代支會提出)
- 五、教授訓練ニ關スル議案
 - (1) 國語假名遣モ字音假名遣ノ如ク改定セラレンコトヲ其筋ニ建議スルコト (山梨縣教育會提出)
 - (2) 新定字音假名遣法ヲ國語ノ範圍ニモ及スコト (神奈川縣三浦郡教育會提出)
 - (3) 尋常小學校兒童ニ授クヘキ國語綴リ方ハ言文一致體トナスコト (以上東京府北多摩郡教育會提出)
 - (4) 國語假名遣ハ新定ノ字音假名遣ヲ準用シテ發音通リトナスコト

乙號議案

一、教育制度ニ關スル議案

- (1) 小學校令第四十七條但書ヲ削除スルコトヲ文部大臣ニ建議スルコト (茨城縣筑波郡教育會提出)

- (2) 小學校字音假名遣ヲ中學校ニモ準用セラレンコトヲ文部大臣ニ建議スルコト (山梨縣教育會中巨摩郡支會提出)
- (3) 師範學校生徒給費ヲ半官費トシテ其定員ヲ増加シ從テ卒業生服務年限ヲ減少スルノ議 (東京府南葛飾郡教育會提出)
- (4) 小學校令施行規則第三十一條第三項ニ左ノ但書ヲ加ヘラレンコトヲ文部大臣ニ建議スルコト (茨城縣筑波郡教育會提出)
 - 「但特別ノ事情アルトキハ此限ニアラス」
- 二、教員待遇ニ關スル議案
 - (1) 小學校教員俸給ヲ府縣稅支辨トナスコト (山梨縣教育會南都留郡支會提出)
 - (2) 明治三十年勅令第二號小學校俸給義務額ヲ高メラレンコトヲ其筋ニ建議スルコト (茨城縣筑波郡教育會、山梨縣教育會西入代支會提出)
 - (3) 小學校長ニ職給ヲ給スル様規定セラレンコトヲ文部大臣ニ建議スルコト (茨城縣筑波郡教育會提出)
 - (4) 師範學校訓導ニ府縣郡視學トナリ又普通免許狀ヲ得且ツ年功加俸ヲ受ケシムルコトヲ得ルノ道ヲ開カレンコトヲ其筋ニ建議スルコト (茨城縣教育會提出)
- 三、教科用圖書ニ關スル議案
 - (1) 小學校教科用圖書ハ文部省ニ於テ編纂セラレンコトヲ其筋ニ建議スル件 (茨城縣新治郡教育會提出)

以上

尙此の關東教育大會の開催を機會として、本會は東京市教育會と共同して東京府教育品展覽會を開設し、畏くも皇后陛下の臺臨を辱うし優渥なる御沙汰を賜はり、無上の光榮に感激した詳細は、別項「教育品展覽會」の條下に記した通りである。

第二回關東聯合教育會 明治三十六年六月六日より八日に至る三日間、今回は千葉縣教育會を主催會として、第二回關東聯合教育會を千葉町千葉縣會議事堂に開會した。一府八縣、各府縣市郡區の加盟團體約六十。出席代議員九十二名。提出議題の數五十餘の内、可決した主なる議案は左の通りである。

一、義務教育の年限を六ヶ年とし土地の情況により四ヶ年又は五ヶ年となすことを得と改正せられんことを其筋へ建議すること

二、義務教育に對し國庫補助法を制定せられんことを其筋に建議すること

三、小學校教員俸給を國庫支辨とせられんことを其筋に建議すること

四、小學校教員免許狀を全國共通有効にせられんことを其筋に建議すること

是より先、同五月二、三、四の三日間、大阪市に於て開會せられた第四回全國聯合教育會は、矢張同様に「國民義務教育の年限を六ヶ年に延長すること」

前項の年限は止むを得ざる事情ある地方に限り當分五ヶ年又は四ヶ年に短縮するを得しむること」を決議してゐる。即ち義務教育年限の延長は、當時早くも全國教育界の輿論として、國運の發展に伴ふ國民教育必然の要望と見るべきものであつた。

一一、雜誌及圖書出版

一、本會雜誌の躍進 明治三十一年八月、尾崎文相の英斷によつて箱口訓令が撤廢せられ、多年の暗雲が一掃せられて、我が教育界は頗る明朝の氣分に更生したことは前既に記した所である。かくて中央に於ては勿論地方に於ても教育會の會合の席上、或は學政制度に關し或は教員の待遇に關し、或は教育費の國庫支辨の問題に就て、或は教科書の國定編纂の問題に就て、その他種々なる論議が行はれ新たな檢討が加へられるに至つたのであるが、之を其の會の發表機關たる雜誌に掲載せんとする場合には、新聞紙條例により法定の保證金を管轄廳に納付するにあらざれば教育行政に關して意見を發表するの自由を許されないもので、本會に於ては明治三十一年十二月議員會の決議を経て此の手續きを完了し、茲に掲載發表の自由を得ることになつたことは、蓋し本會雜誌の一躍進として特筆すべきであつた。

同三十二年二月、新聞雜誌記者の有志によつて組織せられた同志記者教育同盟會は、小學校教育費國庫補助の問題、並に日清戰役に於ける清國償金の一部を教育基金に充つる問題に就て、國立教育期成同盟會、學制研究會等の諸團體と呼應して其の達成を期すべく運動を開始するに當つて、本會に對しても其の加盟を勧誘し來たので、本會は之に應じて書記高橋至誠氏を本會雜誌記者代表として、麩町區富士見軒に於ける會合に出席せしめたのである。

當時本會雜誌の編輯委員は今井市三郎、清水直義、山田久作、風當朝朗、鈴木光愛、澁谷元良の諸氏であつて、今井、鈴木の兩氏が編輯主任に當つて居た。

明治三十三年十一月には、同八月に改正發布せられたる小學校令及び同施行規則、並に本府の同實施に關する規程等を全部印刷して本會雜誌の號外として會員に配付した。

同三十四年六月本會幹事の事務分擔を定むるに當り、幹事今井市三郎、後藤東、田中瑞穂の三氏が雜誌事務擔任となり、後に幹事松下專吉氏もまた編輯事務を分擔することゝなつた。

當時本會雜誌の發行部数は毎月凡そ一千八百五十部であつた。

二、圖書の出版 本會の圖書出版に就ては敢て取立て言ふほどのものはない。只時の必要に應じて事務的のものを印刷刊行したに過ぎぬ。左に其の書目を舉げて置く。

- 一、改正小學校令の施行細則 明治二十三年刊行
- 一、小學校習字帖語文 同 二十七年刊行
- 一、東京府學事關係職員錄 同 三十年刊行
- 一、東京府教育品展覽會報告書 同 二十二年刊行
- 一、小學校令施行規則實施に關する規程 同 三十四年刊行
- 一、東京府民公德唱歌 同 三十五年刊行

一二、本會功勞者の人々

斯の如くにして本會は明治三十六年を迎へ、茲に創始以來滿二十年の歳月を経て、會運益々隆んに、基礎愈々固く、本府教育の發展向上に寄與する所尠からず、又全國首都の教育團體として時勢の進歩に伴ひ輿論の趨向に考へて、率先して各般の教育運動に参加し、進んで種々なる教育施設を企畫實行する等、常に其の使命の達成を期して多大の力を輸したのである。

而して此の間、本會の首腦者としての歴代の會長を始め、或は樞機に參與して事業の計畫を定め、或は實際活動に努力して目的の完遂に當られた役職員諸氏の勤勞の如何に大なるものありしかは今更謂ふを須たざる所である。今其の記録の存するものに就て見るに、

- 一、明治二十三年八月、前總裁男爵高崎五六閣下並に前副會長元田直、理事矢島錦藏、日下部三之介の諸氏に對して感謝狀を贈る。
- 一、同二十六年一月、前會長銀林綱男氏埼玉縣知事に榮轉につき特に送別會を開いて功德章を贈る。
- 一、同二十九年五月、前會計理事井上守久氏、前庶務理事太田安茂氏に對して謝狀に絹地一反を添へて贈呈す。
- 一、同三十二年八月前役員日下部三之介、成瀬勝文、伊藤房太郎、梅澤親行の四氏に對して感謝狀並に物品を贈

呈す。

- 一、同三十三年八月、舊幹事長田中敬一氏臺灣總督府國語學校長に榮轉につき特に送別會を開き謝意を表す。
- 一、同三十五年五月、幹事今井市三郎氏の急逝に際し、多年の勤勞功績を讃へたる長文の弔詞と共に祭資料として金百圓を贈呈す。

一、同三十五年十月、附屬傳習所委員市川雅飭氏死去につき弔詞及び香奠を贈る。

以上は特に役職員の解任若くは死亡に際して、其の多年の功勞に對して本會より謝意を表せる二、三の事例に過ぎないのであるが、更に明治三十五年末の記録によれば、本會創立以來滿拾ケ年以上本會の役員職員委員等に就任せられたる諸君は左の如し」として

十九ケ年	日下部 三之介君	十八ケ年	金子 治 喜君
十六ケ年	丹 所 啓 行君	十六ケ年	梅 澤 親 行君
十四ケ年	山 崎 彦 八君	十四ケ年	清 水 直 義君
十三ケ年	井 上 守 久君	十二ケ年	須 田 要君
十ケ年	杉 浦 恂 太郎君	十ケ年	逸 見 幸 太郎君
十ケ年	須 摩 サ ダ君		

の十一氏を擧げてゐる。此等の諸氏は勿論本會の最功勞者として推重すべき人々であるが、尙其の他にも期間の長

短に拘はらず、本會の幹部として役員として本會二十年間の發達に寄與貢獻せられた幾多の人々のあることを忘れてはならぬのである。

一三、創立滿二十年當時の役員

明治三十六年七月現在の本會役員及び常務委員は左の通りであつた。

會 長	子爵 岡 部 長 職			
幹 事 長	日下部 三之介			
幹 事	井 上 守 久	山 田 久 作	松 下 專 吉	後 藤 東
	岸 田 松 二 郎	清 水 直 義		
議員會議長	黒 田 綱 彦			
副 議 長	林 吾 一			
議 員	岡 五 郎	小 澤 政 胤	金 子 治 喜	横 須 賀 純
	瀧 澤 菊 太 郎	梅 澤 親 行	井 上 守 久	日 下 部 三 之 介
	山 崎 彦 八	山 田 久 作	松 下 專 吉	風 當 朝 朗

は彼澤柳政太郎といふものゝエラサに今更一驚を喫したかの有様であつた。

▲彼の演説は徹頭徹尾進軍喇叭的である。斷々乎として突貫衝撃の態度をとつて毫も退嬰自守的のところがない。文部省攻撃の仲間を眼下に見下して縦横に論難したところは、まことに晴々しいものであつた。

▲座間には教育時論の湯本自由選擧隊長はじめ非國定の連中がウヨウヨ居たのである。それを木葉の如く吹きまくつた舌頭の風はすざましいもので、一々急所を捉へては止めを刺し、細頸を抑へては捻ぢ切つて仕舞つた武者振は、文部省隨一の花武者であることを證明した。

▲學制研究會といへばエライ教育家の團體である。されど澤柳の眼中には有るか無きかの有様で、一口に言つて退けられた。高田早苗君といふ進歩黨唯一の教育通外國通も鎧袖一揮でとばされた。其他の非國定連は散々に叩かれた。

▲大膽なる彼は此の公會の席で明に宣言した。文部省はドコ迄も國定を斷行する。議會が費用を削つたが、そんなことは關はない。一枚三厘九毛のものが一枚二厘五毛で出来るだけでも斷行する價值がある」と斷言した。即ちこれまで「文部省はどうするだらうか」と疑つて居たものどもへ「如何もしない、斷行することだ」と答へたのである。眞に小氣味よい男ではないか。

▲彼はいふだけのことを言つて置いて、惜しげもなく降壇した。そして悠然として階下の俱樂部へいつて、何處を風が吹いたかといふ態度で嬉々として談笑してゐる。

▲彼を取巻いてさまざまの所謂大教育家なるものや大教育論客なるものが、彼の演説に對して質問の矢を放つ、攻撃の彈を飛ばす、卓上に唾沫の花を散らすといふ有様である。

▲圓滿なる顔に笑を湛へた彼は自由自在に應答する論駁する。急所を捉へてはメあげ得手にはめては投げ出すといふ有様で、包圍攻撃の連中は攻めあぐんで見えなばかりか、一寸旗色しられてヒタ崩れといふ模様であつた。

▲この不景氣な氣勢の揚らない文部省官吏の仲間、彼の如き意氣のある快男子を見るのは實に愉快でたまらない。好漢、請ふ須らく自愛せよ。である。

蓋し明治教育史上、最も聲譽すべき不詳なる教科書事件は、昨三十五年十二月中旬を以て司直の摘發する所となり、審査採定に絡はる贈收賄の嫌疑によつて、地方書記官、視學官、視學、師範學校長、中學校長、及び教科書肆等の檢擧せらるゝ者陸續踵を接し、遂に文部省視學官、圖書審査官、高等師範學校教授にまでも及んで、全國に亘り百餘名に達し、内有罪の判決を受けた者六十餘人を數ふるに至つた。是に於て文部省は三十六年四月十一日、勅令を以て小學校令の一部を改正し、明治二十年以來實施し來つた小學校教科用圖書審査委員會の制度を廢止し、小學校の教科用圖書は文部省に於て著作権を有するものとし、修身、日本歴史、地理の教科用圖書、國語讀本以外の教科用圖書に限り、文部省に於て著作権を有するもの及び文部大臣の檢定したるものにつき、府縣知事をして採定せしむることに改めた。是が即ち國定教科書制度の創始であつて、以て積年の弊害を一掃することを期したのである。

是より先、明治二十九年に貴族院は院議を以て小學校教科用圖書は國費を以て編纂すべきことを建議し、又同三十一年には高等教育會議より、同三十二年には衆議院よりも同様の建議があつたので、文部省は翌三十三年四月、省内に修身教科書調査委員を設け、加藤弘之氏を委員長として之が編纂を進めて居た。而して今回の改正によつて

更に修身教科書以外の國語讀本、歴史地理等の教科書をも文部省に於て編纂することにしたのであるが、民間には早くも之に反對を唱ふる者少からず、就中學制研究會は國定制度は各地方特異の事情を無視したるものにして、且つ競争による教科書の進歩を阻害する者なり等の理由を以て、小學校令改正の發布に先立ち、同三十六年三月十六日神田錦輝館に教科書國定反對演說會を開催し、高田早苗、根本正、湯本武比古の諸氏が盛んに文部省を非難し自由採定の主張を高調した。而已ならず同月二十九日の衆議院豫算委員會は、文部省要求の國定教科書編纂費の豫算二萬圓を否決した。前記の澤柳普通學務局長の演説は、即ち此の間に於ける當局の牢乎たる決意を明かにしたるものとして、頗る社會の注意を喚起したのである。

二、第六回東京府聯合教育會

明治三十六年十月三十一日及び十一月一日の兩日、本會主催の第六回東京府聯合教育會を東京府議事堂に於て開く。出席者は本府市郡區教育會の代議員八十一名であつて、第一日は岡部會長の挨拶の後、千家府知事並に尾崎市長の祝辭、聯合教育會委員長山崎彦八氏の報告あり、直に議事に入り先づ府知事諮問の二案を議題とし、質問應答を経て調査委員に附託し、次で他の議案に移り、第二日に亘りて議事を續行し、審議を了つて閉會した。議案の主なるものは左の通りであつた。

○府知事諮問案

- 一、實業補習學校の設置尙多からざる理由及其設置を促すべき方法如何
- 二、體操場の開放尙其の實行を見るに至らざる原因及其實行を速かならしむる方法如何

○教育會提出議案

- 一、東京府小學校教員一般に住宅料を給すること
- 二、學校附近に於て教育上妨害となるべき行商又は營業者に對し適當の取締法を設けられんことを警視總監に打合せられべき旨本府知事に建議すること
- 三、明治三十七年度より本府に於ては國定教科書を採用せられんとを其筋に建議すること

(以下省略)

實業補習學校規程は明治二十六年十一月に始めて發布せられ、其の後三十五年一月改正を加へられ、政府は熱心に之が設置を勸奨してゐるけれども、當時本府に於ては郡部農村以外には其の數甚だ少く、中には名は實業補習學校と稱するものも、其の實は往々高等小學校の教科に幾分の變更を施したるに過ぎざる有様であつた。府知事諮問案の第一號は即ち之が設置促進の適切なる方法を講究せしめんとするものであつて、答申案としては、補習教育に對する一般の父兄及び雇傭者の理解、經費の補助、教員の養成等が、最先に擧げられた條項であつた。第二號諮問案の體操場の開放に就ても文部省は最近普通學務局長より各地方長官に對して「小學校の校舎校地等の使用に關しては小學校令第三十條の規定有之候處公衆體育の爲め體操場を公開し又は公の集會に校舎を使用する等の場合に於

て教育上障害を來すの虞れなきときは相當取締の下に便宜認可を與ふる方針を執られ可然云々」との通牒を發せられて居るが、校舎の管理、使用者の監督等の困難の爲に、一般に市立小學校長は之を喜ばぬ傾向あり、或は區長に於て特に管理員を設くべしといひ、或は警察官をして監督を擔任せしむべしといふが如き意見も發表せられた模様であつた。

尙此の聯合教育會の決議に基き、同會議長岡部本會長は同十二月二十六日、東京市長に對して左の建議を提出した。

建議

一、成るべく速に各區に低度の實業學校(農工商業)を設置せんことを奨励すること

(要旨) 義務教育を終りたる兒童の就學すべき二年若くは三年の實業學校を、土地の情況に應じ公費を以て設置せしめ、實業教育の發達を圖られんことを望む

一、東京市に於ける高等小學校の第三四學年は校數を限りて設置すること

(要旨) 高等小學校の第三四學年修學者は各校其數額に減少するを以て、三四學年を合して一學級となすか若くは僅少の兒童を以て一學級を組織せざるべからず、故に一は不完全にして一は不經濟たることを免れず、依て本市に於ては適當の方法に依り、校數を限りて設置すること、せば經濟上及教育上利益尠からずと信じ、本文の如く實施せられんことを望む

一、東京市役所に教育部を設け、且つ視學事務の吏員を置くこと

(要旨) 我が東京市の教育事業は規模頗る廣大にして自今益々之を發達せしめんことを期せざるべからず、即ち其教育行政の機關も亦規模廣大にして整備したるものたらざるべからず、依て教育部を設け視學吏員を置き以て能く視察管理の實效を擧げられんことを望む

三、文部廢省問題と市教育界の動搖

此の明治三十六年の後半期は、我が東京府教育會の事業そのものに直接の關係はなかつたが、大小の相當重要な問題が相次で起つて、帝都の教育界は頗る多事多端、本會も亦獨其の圈外に超然たるを許されなかつた。

其一 は文部省廢止問題である。同年七月十六日、文部大臣菊池大麓氏其の職を辭し、内務大臣兼臺灣總督兒玉源太郎氏が文部大臣を兼任した。これが端なく文部省廢止の風説となつて世上に流布され、政府は行財政整理の爲に文部省を廢して教育行政の事務を内務省に附屬せしめ、教育事業は大に緊縮して豫算を削減する意向である。内務大臣の文相兼任は即ち其の準備であるといふ噂が、當時有力なる新聞雜誌によつて喧傳せられたのである。これは實に容易ならぬ大問題であつた。そこで教育關係の有志者は急遽帝國教育會に會合して凝議の結果、文部省廢止反對同志會を組織し、委員を擧げて其の真相を兒玉文相に質したが、文相は明答を避けたので、八月二十五日同志會は文部廢省反對趣意書を發表して、廣く天下の志士に訴へ、模様によつては更に大々的運動を開始することにし

た。學制研究會も亦起つて反對決議を行ひ、我が東京府教育會も九月五日の評議員會に於て特に之を議題として協議する所あり、事、政府の政策に關するものであるから、會としての活動は遠慮すべきであるが、會員個人としては飽くまで廢省反對に賛同合流すべきことを申合せた。越えて九月二十一日同志會は神田青年會館に廢省反對政談演說會を公開して、大隈重信、辻新次、江原素六、星松三郎、木下尙江、園城寺清、湯本武比古、多田房之輔の諸氏が交々立て熱辯を振ひ、文部省存置の氣勢を揚げた。然るに其の翌二十二日兒玉文相の兼任は解かれて、久保田讓氏新たに文部大臣に就任するに至つて、此の問題は全く終熄した。左の新聞記事は當時の消息を傳へたものである。

初め文部省廢止の噂出づるや、前文相菊池氏は桂總理に面會して其の虚傳ならざるを確め、容易ならざる事なりとて、之を教育界の老將久保田、辻氏等に相談し、遂に帝國教育會にて反對運動を開始するに至れり。此時久保田氏の奔走は非常にて、熱心に元老中を説き廻り、大に其人物を揚げたりければ、内閣にて文部廢省を沙汰止とし、愈々專任大臣の候補者談となりてはあれ程迄文部省に忠義なれば誰彼と云はず寧ろ久保田にしては如何との相談となり、中原の鹿は思はぬ人の所に落ち來りしかの如く推察せらる。(東京日々新聞)

其二 は東京市立小學校高等三四學年廢止問題である。同年九月東京市學務委員會は市立小學校に現在併置しある高等科の第三四學年を全部撤廢すべしとの建議を可決して、之を東京市長に提出し其の實行を要求した。建議の要旨は「本市教育施設の現状に鑑み、義務教育の完全を謀り、不就學兒童をなからしむる爲には、現在市立小學校

高等科第三四學年に在學する兒童は、之を總て別に設くる補習學校に入學せしめて、其の教室に尋常小學校の兒童を收容するを以て得策とす。高等第二學年を修了して直に上級學校に入學する以外の兒童は、寧ろ之を補習學校に移して實業的教育を受けしむるに如かず。新設の補習學校は一區一校又は二校とし、事情によりては便宜既設の公立小學校の一部を充用するも可なり。要は現在の如く多數の市立小學校に高等第三四學年の學級を併置するは甚だ不經濟なるを以て之を補習學校に整理統合して、之に依て得たる小學校の剩餘教室を義務教育の爲に利用せんとするにあり。」といふのである。此の建議の提案者は學務委員長江原素六氏であつて、氏の熱心なる主張は遂に委員會の建議となつて市長に提出せらるゝに至つたのである。併しながら是は尙大に研究を要する問題であつて、現在市立小學校第三四學年に在學する兒童は、必ずしも全部實業的教育を希望する者でなく、中には中等學校進學志望者も少からず、然らざるも、幾分たりともより高き普通教育を修めしめんとする熱心なる父兄の向學心を阻止することとなり、本市の教育上甚だ好ましからぬ結果を來たすのみならず、時勢の進歩に反するものである。斯様な見地から市立小學校長會は代表者を以て、市學務委員會の建議は更に十分慎重なる検討を要する旨を市長に申出で、市當局も亦種々調査の末、市立小學校高等科第三四學年の廢止は到底普通教育の効果を全からしむる所以にあらず却て本市教育の品位を低下せしむるものであるといふ結論に達し、之を採用せざることに決定した。而して此の問題に就ても亦我が東京府教育會は市校長會の反對意見を支持して、側面より力強き聲援を爲したのである。

其三 は東京市小學校長の大更迭である。此の年六月東京市長松田秀雄氏は任期満了につき退職し、尾崎行雄氏代つて新に市長の職に就いた。而して八月十五日法學士島田俊雄氏を法曹界より拔擢して市教育課長に任命した。島田氏は明治三十三年東京帝國大學法科を卒業したばかりの、未だ二十何歳かの青年であつて、それが一躍市教育行政の首脳者として登場したのであるから、これは教育界の人々の頗る意外とした所である。

島田課長就任の直後、八月二十四日に尾崎市長は市内各區長に對して「小學校長及教員は自今市長に於て直接人選すべきに付、従前の如く區長より内申に及ばず云々」との内達を通牒した。これは固より市長の權限に屬するものであるが、區費を以て教員俸給を支辨する關係から、教員の任用までも區長に於て銓衡推薦し、市は法規上單に之を取次ぐに過ぎないやうな慣習を、何時とはなしに定例として來たことも既に久しいものであつた。尾崎市長は斷然この舊慣を廢して推薦權を市の手に收めたので、市教育界には早くも小學校長大更迭の風説が傳はり、不安の空氣が低迷するに至つた。翌九月九日、市學務委員中の小學校教員から出て居た山崎彦八、小野義倫、森田勝、横須賀純の四氏は其の任を解かれて、新に松下專吉、金子忠平の二氏が學務委員を命ぜられた。松下氏は本郷小學校長、金子氏は寶田小學校長であつて、孰れも明治二十三年頃の本府師範學校出身である。校長としての經歷は未だ一二年に過ぎないが、新進有爲の少壯校長として夙に斯界に知られた人であつた。當時の學務委員長は江原素六氏、委員は松崎權四郎、坪谷善四郎、佐治實然、石川顯一郎、湯本武比古、松山傳十郎、井上守久の諸氏で、松下、金子の兩氏と共に、本會の評議員又は理事として關係淺からぬ人々である。此の委員等は二班に分れて毎週一回必ず

市内小學校を巡廻し、其の學校の教育情況を視察考覈して詳細に之を市長に報告し、教育課長は之に依て市小學校長の人物と實績とを概ね明かにすることが出來た。殊に新聞記者であつた松山傳十郎氏及び松下、金子の兩校長は最も市教育の事情に精通して居たので、それ等の意見を參酌して秘かに成案を決定し、府知事の決裁を得て、遂に年末十二月二十六日を以て一舉に校長大異動を斷行した。即ち三ヶ月の休職を命じた者十五名、市内轉任を命じた者十九名、訓導より校長に拔擢した者十四名、全市立小學校の殆んど二分の一の範圍に及ぶ大更迭であつた。期する所は沈滯不振の現状を打破して清新潑刺の氣運を展開し、以て本市教育を刷新改善せんとするにあつたことは勿論である。然るに此の異動に對して間もなく一部民間から囂々たる苦情が起つて、遂に市會の問題となり、市會は調査委員を擧げて調査の結果、「銓考を誤り、輕躁に失す。」との決議をなし、市長に警告するに至つた。けれども教育界は一般に市教育當局の積弊を爰除し刷新を企圖する熱心と勇氣とに對して寧ろ却て贊意を寄せ、其の英斷を多とした者も少くなかつたのである。

四、東京府、市教育會の合併問題

東京市教育會は明治三十三年の創立で（詳細は第三篇にあり）創設以來既に三年を經過し、其の活動は頗る眼覺ましいものがあつた。三十六年十一月十三日、本會及び市教育會理事松山傳十郎氏外四名より左の覺書を岡部本會

長並に江原市教育會長に提出した。

覺 書

東京府教育會と東京市教育會とを合併して其規模を擴張し以て會務を進捗することは最も時宜に適し且兩會員多數の希望に副ふべきものなることを信ず

吾等は本會員中の有志者に代り右希望を陳べて閣下の同意を求む閣下希くは速に其目的を達する手段を講ぜられんことをこの覺書を受理した兩會に於ては、之を評議員會の問題として委員を擧げて調査することになつたが、市教育會評議員中には合併反對の氣勢頗る濃厚で、調査は殆んど停頓の情況であつた。左は當時の「國民新聞」の記事である。

東京府と東京市との二教育會を合併せんとし、委員を設けて目下合併の方法に就き交渉調査中なるが、之に反對する側の説を聞くに、府市兩教育會を合併せんとするもの説く所は、其の事業同一にして會員も役員も同一なりとの事を理由とすれども斯ることは市教育會が組織せらるゝ當時に在つて既に分り切つたるものにして、今更之れを繰返すの要あらず。然かも市教育會の獨立して起りたる所以のものは一目的がある故なり。其の目的とは市の教育を統一するといふ事なり。されば市教育會は此の目的に向つて諸種の事業を計畫し、今日に至りては稍々其の緒に就きしと雖も、大成に至るまでは前途甚だ遠し、而して本會の事業は兒童の教育のみならず、父兄の教育をも爲さんと目的を有して實行しつゝあるものなり。且つ市の補助を得て實業的の學校を經營したるも、是れとて將來は獨立の基礎を立てざるべからず。東京市教育會の事業は決して少しとせず、今日に於て府教育會に合併するが如きは當初の目的に違ふものと云ふべし。然れども本會には定款のあるあり、若し多數の合併同意者ありて會議の結果合併に決する上は已むを得ざれども、我々は存在の目的より反對せざるを得ずと云へり。

斯くて合併問題は市教育會の方に於て、殆んど何等の進捗も見ざるまゝ、在昔時日を経過するに至つたのである。東京市教育會の創立及び其の後の活動に就ては、別に篇を改めて其の概要を記することにする。

五、日露戰役と教育界

教育獎勵の御沙汰を賜はる

日露の風雲漸く急に、我が國民は皆齊しく兩國々交の前途に一抹の不安を懷きつゝ、否寧ろ臥薪嘗膽の過去十年間の鬱憤に腕を扼しつゝ、明治三十七年の新春を迎へた。然るに果然、二月五日我が最後の通牒は發せられ、同八日仁川沖に於て彼我海軍の間に開戦の火蓋は切られた。尋で二月十日宣戰の大詔は煥發せられ、全國民は猛然として奮ひ起つた。二月十三日一億圓の戰時國債公募の發表あるや、只一日にして四億五千二百萬圓の應募ありしを以て見るも、其の敢闘必勝の意氣の如何に熾烈であつたかを知るべきである。斯くて翌三十八年九月五日の講和條約成立に至るまでの約一年七ヶ月は、國內の總てを擧げて戰爭完遂の一色に塗り潰して了つた。隨て教育會の新活動の如きは全く休止の状態であつたのである。

二月十日、久保田文部大臣は訓令を發して、此の非常の際に於ける教育者の心得並に學生々徒の訓育に就て告諭する所あり、更に二月二十日に地方市町村に對して「軍費供給の必要は教育界にも影響を及ぼし、新事業又は設備

等に関し一時の緊縮を來すは己むる得ざる所とす。然れとも之か爲に教員の俸給を削減し、又は兒童の就學を減少し、其の他教育の効果を減退せしむるが如きは、國力發展の基礎を損傷するものなれば務めて之を避けざるべからず。而して經濟と節約を圖らんか爲には、小學校に於ては二部教授の法を採り、其の他の學校に於ても亦臨機適宜の法を講ずる等、適當の處置を爲すべし」と訓令した。

三月七日の臨時東京府會に、府知事者は此際地方經費の緊縮を旨として、從來我が東京府教育會に對して毎年千五百圓づゝの補助金を交付し、教員養成事業を獎勵し來りし金額を、全部豫算の原案より削除して提案した。之を發見した本會評議員である府會議員井田忠信氏は、戰時の今日こそ教育の普及上進は一層必要なるに拘はらず、之を中止するは其の意を得たるものに非すと痛論し、氏の熱心なる論議が遂に他の多數議員を動かして豫算を復活せしめ、本年度は千圓を補助することに決定した。又同日に開かれた東京市會に於ては、市理事者は從來の例により東京府教育會補助費六百圓を原案に計上提出したのであるが、反對者一名の多數を以て脆くも否決せられた。いづれも時局の反映として見るべき一の現象である。

七月十一日、東京帝國大學の卒業式に親臨し給ひし 天皇陛下には、畏くも文部大臣を御前に召されて、親しく教育獎勵に関し優渥なる御沙汰を下し給はつた。 聖慮の深遠なるに恐懼感激せる文部大臣は、直に訓令を發して聖旨のある所を告示した。

叙聖文武ナル 天皇陛下ハ軍國多事ノ時ニ當リ、此ノ炎熱ヲモ厭ハセラレズ、畏クモ本月十一日ヲ以テ東京帝國大學ニ御臨幸アラセラレ、且親シク本大臣ヲ召シテ左ノ御沙汰ヲ賜ヘリ

軍國多事ノ際ト雖教育ノ事ハ忽ニスヘカラス其局ニ當ル者克ク勵精セヨ

本大臣ハ此ノ優渥ナルノ御旨ヲ拜シ感激措ク所ヲ知ラズ、謹テ之ヲ教育ニ關係アルモノ一般ニ告知ス。庶幾クハ國ヲ擧ケテ 聖意ノ在ル所ヲ奉體シ、益々奮勵シテ教育ノ效果ヲ完ウセンコトヲ。

是より先、全國府縣に於て小學校教員の休退職は頻々として行はれ、中にも長野縣の一千一百人、兵庫縣の七百人、岡山縣の四百人等は最も世人の耳目を聳動せしめたものであつて、是等の多數は代用教員、準教員、若しくは専科教員であり、正教員は極めて少數であつたといへ、之が教育の效果に及ぼす影響は輕々に看過し難いものであつた。一般に小學校の教育費は教員俸給以外は極度に減額せられ、教員慰勞手當、生徒賞與費、旅費等は殆んど削除せられ、學校の新設又は増築は何れも中止して、二部教授を以て經費の節約を圖るといふ状態であつた。

然しながら、此の戰役が我が國民的自覺の確保、國家觀念の再認識の上に、如何に貴重なる教育の機會を與へたかは今更言ふまでもない。即ち學校に於ては内外あらゆる施設を通じて、眼前豊富なる資料を利用して、忠君愛國義勇奉公の志操を鼓舞し、勤儉貯蓄堅忍力行の實踐を獎勵し、教育團體も亦之に呼應して一般民衆の指導啓發に努めた。之に關して文部省普通學務局は、「時局の教育に及ぼせる影響」と題して、左の報告を三十八年三月の官報に公表した。

「曩に日露戦役の起るや、地方財政の緊縮となり、教育事業は他の諸般の事業と共に之が影響を蒙り、其の改良發達上多少の阻害を來したるは掩ふべからざる事實なり。然れども此等不良の影響は教育當局者に幾多の新經驗を得しめ、感激奮起の動機を興へ、所謂禍を轉じて福となすの効果を顯はすものなくんばあらず。又其の佳良の影響と認むべきものと雖も、時局日尙淺くして未だ其の効果を確認するを得ざるのみならず、若し一時の感情に出て熱慮深思を缺くものならんには、能く堅忍持久、好果を他日に期する能はざるべし。要するに本編時局に關する教育上の影響は單に現状の觀察に基きて叙述したるに過ぎざるなり。

(一) 佳良の影響

時局の社會教育及び學校教育に及ぼせる影響の佳良なるもの蓋し尠少にあらざるべしと雖も、其の最も著しきものは學校教育の内容、特に精神教育に關するものなり、今其の學校生徒、兒童及び父兄に及ぼせる影響に就き概括列陳すれば、

- 一、大に教育學藝の必要を感じ向學心を奮起せしめたること
- 一、世界的及び國家的觀念を明かにし經濟地理科軍事等の知識を興へたること
- 一、愛國心、公共心、義侠心、及び同情、尙武、克己、服從、自重等の美德を養ひ大進取の氣風を養ふべき機會を興へたること
- 一、實業の重んずべきを知らしめ勤儉貯蓄の習慣を養ふべき機會を興へたること
- 一、父兄及び公共團體をして學校基本財産設置の必要を認めしむるに至れること
- 一、規律衛生の重んずべきことを知らしめたること

(二) 不良の影響

時局の教育に及ぼせる不良の影響にして其の主なるものは地方財政緊縮に基くもの是なり。換言すれば直接の影響は學校設備に關するもの最も多し。試に本年度の教育費を以て前年度に比するときは、府縣費に於て約百六十萬

圓、郡費に於て二十三萬圓、市町村費に於て九百萬圓、計一千八十萬圓以上の減額を來せり。而して此の節約は主として臨時費に於て行はれたるものにして、之を經常費に比すれば殆ど一に對する四の割合に當れり。此等教育費節減の程度及び結果は地方によりて一様ならざれども凡そ左の如し。

- 一、校舎の増築新築の工事を繰延又は中止し爲に民家寺院其他不完全なる校舎を假用するの止むを得ざるに至れること
- 一、學校の設置殊に近時著るしく發達の氣運に向ひたる實業補習學校の設置に阻害を興へたること
- 一、圖書標本教授用器械等備品費の節減に因り教授上不便を來したること
- 一、學級數を減じ又は専科教員、補助教員を減じ爲に學級擔任の負擔を重からしめたるに拘はらず其の俸給を増加すること能はざるに至れること
- 一、遽に前項負擔の加重を來し學校長の學校統一上便宜を缺くに至れること
- 一、教育會、小學校教員講習會等に對する縣郡費の補助を削減し爲に講習會の事業を縮少し又は全く廢絶し、教員をして學事視察又は研究の便を失はしめたること
- 一、一旦廢止したる尋常小學校授業料を再び徵收するに至れるものあること
- 一、以上の阻害により直接間接に教育の改良發達を妨げたること

(以下省略)

日露開戦の事起るや、明治三十七年四月、帝國教育會は機を飛ぼして出征軍人遺族兒童の學資義捐金募集を企畫せしが、本會は此の趣旨に賛同して協力する所あり。又遼陽占領、旅順陥落、奉天會戰、日本海々戰等の捷報至る毎に、帝國教育會、東京市教育會と合同して祝捷會を開き、賀表の奉呈、陸海軍司令官に感謝狀の贈呈等のことを行ひ、三十八年十月には海軍凱旋歡迎會を催し、又平和克復祝賀會を開いて、勅語奉讀式を行つた。

六、戰時下に於ける府市教育會

本會事務所移轉と和強樂堂の新築

戰時下に於ける我が東京府並に東京市教育會の事業に就ては、既に前節によりて推知せらるゝ通り、時局關係の通俗講演會、幻燈活動寫眞會等を隨時市内及び府下郡部の各處に開催したる外、特に記すべき活動も見られなかつたのであるが、唯此の間に於て陸海皇軍の勇猛果敢なる奮闘により、極めて困難なる戦局にも拘らず、屢々大敵を撃潰し堅壘を陥落し、捷報連りに到る毎に、帝國教育會、東京府教育會、東京市教育會は合同して戦捷祝賀會を開き、賀表の奉呈、軍司令官に對する感謝狀の送呈等のことを決議實行した。殊に三十八年十月三十一日には三教育會聯合して、曩に帝都に凱旋したる海軍の將帥、東郷大將を始めとして片岡、上村、出羽、瓜生、肝付の五中將、島村、小倉、牛尾の三少將を神田橋外の和強樂堂に招待し、嚴肅なる感謝式を挙げ、辻帝國教育會會長は三教育會を代表して深厚なる感謝と祝意を披瀝せる式辭を朗讀し、之に對して東郷大將の謙遜なる代表挨拶があり、來會者は久保田文相其他二百餘名に達し、式後共に祝宴に列席して、極めて盛會裡に此の記念すべき感謝會を終つたのである。

是より先、東京府教育會は從來久しく神田區一ツ橋通帝國教育會内にありし事務所を、神田橋外の神田區錦町一丁目二十番地元東京府立第一高等女學校々舎内に移轉した。これは同會年來の希望を實現し得たものであつて、府立高等女學校は市區改正道路擴張の爲に校地の一部を收用せられ、運動場が著るしく狹隘となりしのみならず、校舎が道路に直接して街頭の騒音に妨げられ、教育上甚だ不便を感じるに至つたので、新に淺草區七軒町に敷地を求め校舎を新築して移轉した。府教育會は從來該校舎の一部を借りて附屬教員保姆養成所を設置し居りし關係上、此の機會に之が無償貸與を東京府に出願し、幸に許可を得て同所に移轉することが出来たのである。これは明治三十六年十月頃であつた。

其の後、同會は此の校舎の西方に數百人を容るゝに足る一大會堂を増築し、名づけて『和強樂堂』と稱した。三十八年四月發行の『日本之小學教師』は之に就て左の記事を掲載してゐる。

「東京府教育會は有徳なる岡部會長之を統べ、敏腕なる日下部幹事長會務を處理し、幹事評議員一致共同して事に當るが故に會務着々舉れるは世の知る所なり。而して今又數千金を投じて一大會堂を建築し、和強樂堂と稱せり。蓋し國運發展の大勢に鑑み、帝國の中樞たる我が東京府民をして、高尚の趣味、快活の氣象を養成し、以て我が人文進化の指導たらしめんと目的によりしならん。さればにや、去月十一、二日の兩日を以て音楽大會を開き、續いて本月一、二、三日の三日間、日露戰爭活動幻燈會を開き、衆庶の觀覽に供せしに、前後聽衆來觀者堂に滿ちて立錫の餘地なかりしといふ。思ふに其の府民に與ふる良影響少からざるべし。」

當時多數の會衆を收容し得る會堂としては、神田區錦町の錦輝館、美土代町の基督教青年會館等、其の他市内に

僅に二、三を數ふるのみにして、此の際和強樂堂の建設は極めて時宜に適したものであつた。それ故に此の會堂は或は演説講談會に、或は學術講習會に、或は又一般大衆を目的とする音樂演奏會に利用せられ、殊に當時最も流行せる薩摩琵琶、筑前琵琶の演奏會には、殆んど其の定席として用ひられたのである。

尙こゝに附記すべき一事は、三十八年二月十七日東京市教育課長島田俊雄氏其の職を辭し、戸野周二郎氏が代つて其の後を襲いたことである。島田氏は去るに臨んで市立小學校長の第二回の交迭を斷行し、休職を命じたる者十名、いづれも新進を拔擢して其の後任とした。在職僅に一年半に滿たざるに前後二回の大交迭を執行して、一部市會議員等の露々たる非難の裡に悠然として瀟歩し去つたのである。氏が後年政界に於ける俊傑として名を成した機鋒は、早くも此の時に窺ひ知られたのである。同月二十二日日本市教育會の有志は、氏の爲に上野不忍池畔の櫻館に二百餘名相會して、頗る盛んなる慰勞送別會を開催した。

七、第八回東京府聯合教育會

第三回關東聯合教育會

明治三十八年十月二十、二十一日の兩日間、府教育會主催の第八回東京府聯合教育會は同會附設の和強樂堂に於て開會せられた。東京府知事の諮問案及び同答申案は左の通である。

○東京府知事諮問案

一、貧困による猶豫者及缺席者なからしめ益々義務教育の普及を計らんと欲す、其の最適當なる方法如何
右答申案(要項)

- 1、子守の儘出校することを獎勵すること
- 2、幼兒委託所を設けること
- 3、學用品を給與すること
- 4、就學獎勵金として糊口の資を給與すること
- 5、小學校に晝間或は夜間の適當の時間を選び普通の學級以外に特殊の學級を設けて貧兒の收容に充つること
- 6、兒童相應の商工業に従事せしめ其の得る所を學資に充てしむる保護的團體を組織すること
- 7、兒童授産場を設けて之に特殊の小學校を附設すること

同年十一月二十五日、東京府教育會主催の第三回關東聯合教育會を和強樂堂に開會した。同會に於ては會議に先立ち、海軍中將肝付兼行氏が多年軍務の傍ら我が教育界に貢献せられたる功勞に對して表彰狀を贈呈することを決議し、第二日の二十六日其の表彰式を行つた。同會決議事項の主なるもの左の如し。

- 一、關東に於ける各府縣教育會を聯合して教育品展覽會を開設すること
但し費用は東京府教育會に於て負擔すること
- 一、小學校教員の待遇に關し左の諸項を其筋に建議すること

- 1、俸給平均義務額を高めること
- 2、俸給を國庫の支辨とせられたること

本案は之を文部大臣に建議すると共に貴衆兩院に請願すること

- 3、單級教授擔當者に特別加俸を給與せられたること

- 一、義務教育年限を六ヶ年に延長することを文部大臣に建議すること
- 一、貧困による不就學兒童に市町村補助法を制定せられんことを其筋に建議すること
- 一、高等教育會議に小學校長を加へられんことを文部大臣に建議すること
- 一、國語及字音假名遣を一致せしめ之を一般に用ひしむること
- 一、日露戰役に關する教育資料を編纂せられんことを其筋に建議すること
- 一、戰捷記念として戦利品を小學校に下附せられんことを其筋に希望すること
- 一、戰費に流用したる教育基金を速に填補せられんことを其筋に建議すること

斯くて戰後教育の振興革新の氣運は次第に我が教育界に擡頭して、三十九年一月には湯本武比古、日下部三之介、多田房之輔の三氏の首唱により、府下新聞通信社員を糾合して學政有志會なるものを組織し、學政改革運動の第一着手として、二月四日帝國教育會講堂に於て、學政演說會を開催し、衆議院議員根本正、星松三郎、法學博士高田早苗、文學士川田鐵彌等の諸氏の演說あり、聴衆約六百名に及び頗る盛會であつた。

八、第十七回總會と役員の改選

第四回關東、第九回府聯合教育會

明治三十九年十月六日、東京府教育會は同會附屬和強樂堂に於て第十七回總會を開いた。會長岡部子爵は韓國旅行中にて、日下部幹事長代つて開會の挨拶を述べ、同會經營事業の現況、會計並に基本金募集の成績其の他に就て詳細なる報告を爲し、次に定款改正の議事に入り、異議なく理事者の提案を可決した。尋で評議員の改選を行ひ、公選議員は投票の結果左の如く決定、休憩後に會長指名の議員と共に發表した。

市部議員

伊藤房太郎	千葉喜作	日下部 三之助	奥田茂太郎	湯澤直藏
山田弘毅	宮川 盛	蛭田太一郎	土川五郎	森川 滉
長坂頼幸	清水直義	杉浦恂太郎	松田英三郎	逸見幸太郎
(以上公選)				
林 吾一	土方徭三郎	岡 五郎	松山傳十郎	瀧澤菊太郎
水野 浩	澁谷元良	多田房之輔	戸野周二郎	梅澤親行

松見文平 三橋傳藏 横田清兵衛 松下專吉 井上守久
郡部議員 (以上特選)

井田忠信 相澤榮二郎 後藤東 中山喜之助 渡邊峰吉
濱中庄三郎 山口袈裟治 圓藤光太郎 久野喜之助 長島彌三郎
太田半次郎 田本房太郎 田口兼吉 川越守男 山崎明之
村上佳景 岡野美知雄 浮田久三郎 西本徳藏 中田多平
(以上公選)
(以上特選)

第四回關東聯合教育會は同三十九年十月二十日より二十二日まで三日間、山梨縣教育會の主催を以て山梨縣師範學校講堂に開會した。參加教育會は一府八縣郡市區を合せて七十一、代議員は百三十七名であつた。

此の聯合教育會は山梨縣教育大會を兼ねたもので、午前を代議員會とし午後を大會として一般に公開した。第一日の大會に於ては

一、義務教育を六ヶ年に延長して速に實施せられたし

一、戦費に流用せる教育基金を速に填補せられたし

外一件を満場一致を以て文部大臣に建議することに決し、第二日には會員の五分演説並に眞野専門學務局長、辻帝國教育會長、井上哲次郎博士、横井時敬博士、井口あぐり女史、島田三郎氏等來賓諸名士の演説あり、而して第一日より第三日までの代議員會にては各加盟教育會提出の議案に就き、左記十一件を可決した。

- 一、高等小學校第三四學年の女子にも農業又は商業を課し得べき様法令の改正を其筋へ建議すること
 - 二、高等小學校修身書を男女各別に編纂せられんことを文部大臣に建議すること
 - 三、小學校教科用作法書を文部省に於て編纂せられんことを其筋に建議すること
 - 四、尋常小學校第一第二學年用教科書の挿畫に彩色せられんことを其筋に建議すること
 - 五、小學校令施行規則第三十一條第三項を削除せられんことを其筋へ建議すること
 - 六、市町村に市町村立小學校基本財産積立方法を設けしめ之に對し國庫補助法を制定せられんことを其筋へ建議すること
 - 七、教育會法を制定せられんことを其筋へ建議すること
 - 八、戦利品を日露戰役記念品として各學校に交附せられんことを其筋に建議すること
 - 九、特殊教育(盲啞、不良少年、身體精神の不具者)を要すべき兒童に對し其の教育法を施設せられんことを其筋へ建議すること
 - 十、靖國神社祭日を小學校令施行規則第二十七條中に加へられんことを其筋へ建議すること
 - 十一、義務教育を六ヶ年に延長し速に實施せられんことを其筋に建議すること
- 尙緊急動議により小學校教員優待に關する意見書を決議して内務文部兩大臣及び貴衆兩議院に提出することを決

定した。

此の聯合會に於ては甲府市第二尋常高等小學校校長權太政氏の教育上の成績顯著なるを以て、決議により表彰狀を贈呈した。

第九回東京府聯合教育會は同十一月十八日、府會議事堂に於て開會した。出席者六十七名。岡部東京府教育會長不在の爲、假議長選舉を行ひ日下部三之介氏當選し、左記東京府知事諮問案其の他の議案を審議の上、日程全部を議了して散會した。

○東京府知事諮問案

一、女子に適切なる補習教育の方法如何

右答申案

- 一、女子の爲特に補習教育機關を設くること
- 二、義務教育を卒へたるものゝ爲に補習をなし兼て其未だ卒へざるものゝ爲に補充の教育を授くるものとす
- 三、該機關は小學校に附設するものとす、但土地の情況に依り適宜の場所に置くことを得
- 四、授業時間は尋常小學校の教授時間を妨げざるを要す
- 五、教科目は裁縫家事を主とし土地の情況に依り他の教科目を加ふることを得
- 六、開校の季節は土地の情況に依るものとす

七、修業年限は二ケ年以内とす

八、教授者は小學校教員を以て之に充つ

九、經費は市區町村又は教育會の負擔とす

但し授業料を徴收することを得

一、普通教育奨励金の一部を割きて就學奨励の費途に充て貧困に依る不就學兒童及缺席兒童なからしめんとす、之が實施に關する最も有効なる方法如何

右答申案

一、各町村内に學齡兒童就學保護會設立を企圖し其保護を確立せしめ是に對し補助金を與ふること

二、各郡區教育會に學齡兒童就學保護規程を設けしめ其保護救助の確實なるものに補助金を與ふること

其の他の決議は左の通りである。

一、小學校女教員の進退及服務に關する規程を特別に制定せられんことを其筋に建議すること

一、宣 言

初等教育は百般事業の淵源にして實に國家進運の基礎たり今や國運發展の機に際會し輦轂の下たる本府の如きは率先して初等教育の完成を期せざるべからず茲に我東京府聯合教育會は其決議を以て左の事項を宣言す

一、義務教育年限を延長して之を勵行すること

一、小學校教員の待遇を高め優良なる教員の供給を豊かならしむること

一、小學校を増設して學齡兒童の收容に遺憾なからしむること

一、授業料全廢の途を講じて義務教育の精神を貫徹すること

- 一、教育の内容實質を改良して其効果を完全ならしむること
- 二、社會教育の普及を計り府民の智徳を進むること
- 三、補習教育を奨励すること
- 四、小學校基本財産の蓄積を奨励すること

九、教員傳習所の狀況

選奨校長の祝賀會

東京府教育會附屬の小學校教員傳習所並幼稚園保母傳習所は、同會の事業として既に十數年の永き歴史を有するものであるが、同會の神田橋外に移轉の後は、教員傳習所も亦同所に移つて、益々堅實なる發展を續け、本府教育に貢献する所少なからず、保母傳習所も前既に述べし如く、一橋幼稚園を教場として再興するに至り、明治四十一年九月現在の編制及び生徒募集の員數は左の通りであつた。

○准教員養成科

- 一、豫科生 前期後期 募集人員 凡百二十名
 - 高等小學校卒業の者若くは之と同等以上の學力あるものは入學試験を要せず豫科前期に編入す、修業年限一箇年。
- 二、本科生 前期 募集人員 凡四十名

豫科卒業の程度により讀書作文習字算術の四科目に就き入學試験を行ふ、修業年限一箇年。

○正教員養成科

- 第一科 第二科 募集人員 凡百名
 - 本科後期を卒業したる者、又は尋常科准教員免許狀を有する者、又は四ヶ年の高等女學校を卒業したる者は無試験入學を許す。修業年限第一科第二科各一箇年。

○裁縫專科正教員養成科

- 一、豫科生（修業年限六ヶ月） 募集人員 凡百名
 - 高等小學校卒業の者若くは之と同等以上の學力あるものは入學試験を要せず。
- 二、本科生（修業年限一ヶ年） 募集人員 凡三十名
 - 豫科卒業の程度に依り、裁縫國語算術の三科目に就き入學試験を行ふ。

○幼稚園保母傳習所

- 一、豫科生（修業年限六ヶ月） 募集人員 凡五十名
 - 高等小學校卒業の者若くは之と同等以上の學力あるものは入學試験を要せず。
- 二、本科生（修業年限六ヶ月） 募集人員 凡五十名
 - 尋常科准教員免許狀を有する者、又は四ヶ年の高等女學校を卒業したる者は無試験入學を許す。

○卒業者の特典

- 一、准教員養成科卒業の者は本府に於て無試験檢定により免許狀を授與せらる。

- 一、裁縫専科教員養成科卒業の者は年二回特別の検定を出願することを得。
- 一、幼稚園保姆傳習所卒業の者は本府に於て無試験にて免許状を授與せらる。

明治三十九年十一月三日、文部省は此の天長節の佳辰を以て小學校教育成績規程に依る第二回の選獎を行つた。本府よりは東京市常盤尋常高等小學校校長水野浩、私立渡邊尋常小學校渡邊勇助の兩氏が此の光榮を荷つたのであるが、本府としては之が初めであつたので、同十一月二十三日東京府公立小學校長會及び帝國、東京府、東京市の三教育會は共同して、被選獎兩氏並に其の家族を招待し、和強學堂に於て祝賀會を開いた。參會者百數十名、辻帝國教育會長發起人を代表して祝辭を述べ、肝付中將、嘉納高等師範學校長、岡東京府事務官等の來賓祝辭あり、水野常盤校長より謝辭を述べ、盛會であつた。これを第一回として爾後選獎者ある毎に此の例に據ることになり、同四十二年の紀元節に於て同じく文部省の選獎を受けられたる、東京市上六尋常小學校長小野義倫、同本郷尋常小學校長松下專吉の兩氏に對しても、同じく盛んな祝賀會を帝國教育會講堂に開催した。

一〇、義務教育年限延長

小學校教員の優遇

多年教育界の輿論として要望せられつゝありし義務教育年限の延長は、愈々其の機熟して明治四十年三月二十一

日、牧野文部大臣によつて決行せられた。

同日政府は先づ小學校令及び小學校令施行規則の改正を公布し、尋常小學校の修業年限を六箇年に延長し、同月二十五日、訓令を以て「近年義務教育は著るしく普及せるのみならず、現に尋常小學校に高等小學校を併置せるもの亦大に増加し、今や改正の時機既に熟せるを認むると共に、戦後益々國民の智徳を上進するの必要あり」と其の理由を説明し、此の改正に伴つて、高等小學校の修業年限は改めて二箇年とし、延長して三箇年とすることを得しめ、尋常小學校に於ては授業料を徴收せざることを本體とし、代用私立小學校は制度の上からは之を廢止した。而して此の改正は四十一年四月一日を以て之が實施期となし、特別の事情ある市町村には當分の間、従前の規定に依ることを許した。

尙小學校教員の優遇に關しては、同年五月二十七日、勅令第二百十六號を以て、市町村立小學校の本科正教員月俸の平均額を、人口十萬以上の市に在りては二十四圓、其の他の市及市に準すべき町村に在りては二十圓、其の他の町村に在りては十六圓に増額し、同時に勅令第二百十七號を以て、北海道廳は地方費、府縣は府縣費を以て、市町村立小學校教育費を補助する爲に、教育費國庫補助法により配布する金額と同額の金額を支出すべきことを規定し、之は主として小學校教員加俸の支出又は住宅費の補助に充てしむることにした。

教育基金填補の問題は第二十二議會に於て衆議院は其の建議案を可決し、文部省に於ても大藏省に對し種々交渉

する所ありたるも、國家財政の都合上尙其の實現の運びに至らなかつた。

一一、全國教育家大集會

第五回關東聯合教育會

明治四十年三月二十日より七月三十一日まで、戦後我が國の産業並文化の促進を圖る爲に、上野公園に於て東京勸業博覽會の開催せらるゝを機會として、全國教育家大集會を開かんとするの議は、先づ東京府教育會によつて提唱せられ、帝國教育會及び東京市教育會の賛同を得て、各教育會より十名づゝの大會委員を選出し、委員は屢々會合協議の上、大集會は三教育會の共同主催とし、會長には帝國教育會長辻新次氏を推し、全國各教育會を通じて廣く一般教育家に參會を勧誘した。其の要項は次の通である。

(156)

全國教育家大集會要項

- 一、趣旨 東京勸業博覽會の開催を機とし、東京に於て全國教育家大集會を開催し、以て大捷國教育家の元氣を作振し、大に國運の發展を期せんとす、希くは全國有志教育家の奮つて參集せられんことを。
- 一、開期 明治四十年五月十一日(土曜日) 十二日(日曜日) 十三日(月曜日)の三日間とす。
- 一、開會次第 第一日(午後一時開會) 招待員演説、會員十分間談話。 第二日(午前九時開會) 故教育家追頌式、議事、懇親會。 第三日(午後一時開會) 招待員演説、會員十分間演説

- 一、會員 學事關係者及び教育會員は男女を問はず何人と雖も入會するを得るものとす。
- 一、會費 一人に付金壹圓(懇親會費共)
- 一、申込 住所氏名職業を記したる書面を以て四月末日までに申込み、五月十日までに會費を納入すべきものとす。

斯くて此の大集會は淺草藏前の東京高等工業學校講堂に於て豫定の通り開會し、千餘名の參加出席者ありて、第一日には辻會長の開會の辭に引續いて左記招待員の演説あり。

- 一、理科振興の必要 高等工業校長 手島 精 一氏
- 一、奉天の會戰 陸軍砲兵少佐 小野寺 重太郎氏
- 一、教育家の教育 農學博士法學博士 新渡戸 稻造氏
- 一、戦後の教育 伯 爵 大隈 重 信氏

(157)

第二日には、開會の始めに故教育家追頌式を行ひ、伯爵大木喬任、子爵森有禮、新島襄、中村正直、福澤諭吉、近藤眞琴の六大教育家に對する辻會長の極めて莊重なる追頌辭の朗讀あり、後引續き

- 一、故近藤眞琴君につき 色川 閑 士氏
- 一、故福澤諭吉君について 林 毅 陸氏
- 一、故新島襄君につき 横井 時 雄氏
- 一、故森有禮君につき 木場 貞 長氏

- 一、故大木喬任君につきて 澤柳政太郎氏
- 一、故中村正直君につきて 三宅雄次郎氏

の講演あり、各故人の教育上の効績を讃へ其の徳業を追頌した。

第三日には左の演説あり、

- 一、師範教育を論ず 嘉納治五郎氏
- 一、日本海々戦につきて 海軍中佐 秋山眞之氏
- 一、教育の眞意義 島田三郎氏
- 一、商科大学設置の念を論ず 男爵 澁澤榮一氏

最後に辻會長開會の辭を述べ、盛會裡に此の大會を終つたのであつた。尙此の大會第二日に「速かに教育基金を填補せられんことを望む」の議案は満場一致を以て可決せられ、而して此の日散會後小石川後樂園に於て懇談會を開いたのである。

尙今回の東京勸業博覽會には、特に第一號館に教育學藝に關する出品物を陳列し、第一區より第十七區に分ちて家庭教育より始めて幼稚園、小學校、盲啞學校等の初等教育、中等教育、師範教育、實業教育、專門教育、通俗教育、圖書館、博物館、各種學術及び體育に關する器具標本模型圖書等、所有ゆる部門を網羅し、東京府教育會の事業概表、帝國教育會の教育會沿革等の事業成績も出陳せられたのであつた。

此の博覽會の出品に關して東京市教育會は、前年十二月二十二日戸野幹事を主任とし、濱幸次郎、能勢賴俊、伊藤房太郎、金田藤吉、金成龜次郎、小池菊次郎の五氏を出品調査委員に依頼し、理科教授の順序方法及び之に附帶する標本模型等の研究調査を爲すことを決定し、爾後委員は屢々會合して熱心に調査を遂げ、參考資料として有益なる出品陳列を行つた。

明治四十年四月三十日より五月二日まで三日間、第五回關東聯合教育會は横濱市に於て開會せられた。加盟各府縣郡市區教育會より出席の代議員百六十九名、下田次郎、釋宗演、新渡戸稻造、嘉納治五郎等諸氏の演説あり、各教育會より提出の各議案に就き討議の上、可決したる主なる事項は左の如くであつた。

- 一、視學制度を改正せられんことを其筋に建議すること
- 一、義務教育年限延長の規定實施につき市町村内又は町村學校組合内の教育費負擔に關する區を設置するの規定廢止を其筋に建議すること
- 一、教育基金を速に填補せられんことを其筋に建議すること
- 一、市町村立小學校基本財産積立方法を設けしめ之に對し國庫補助法を制定せられんことを其筋に建議すること
- 一、小學校教員免許狀をして全國に共通せしむるの件
- 一、小學校教員の修養機關を設けられんことを其筋に建議するの件
- 一、小學校は肺結核に對し大要左の如き嚴重なる豫防取締の方法を設けて之を勵行し同時に之が救護の道を設定せられんこと

を其筋に建議すること(方法略す)

一一、保姆傳習所の再興

第十回府聯合教育會

東京府教育會の附屬保姆傳習所は、創立以來既に二百數十名の保姆を養成して、幼稚園保育事業に貢献する所少からざりしことは前に記した通りであるが、其の後東京府の補助費の減額其の他の事情によつて一時休止したる爲國民教育社長多田房之輔氏は之を遺憾として、明治三十八年三月、同氏經營の神田一橋幼稚園内に東京保姆養成所を開設し、既に四回の卒業生を出し、頗る良好の成績を擧げて居たのである。併しながら同氏は始めより出來得るならば東京府教育會に於て之を經營することが最も適當の事業であると考へ、四十年七月之を同會評議員會に提議し、評議員會は審議の上遂に保姆傳習所再興に決定、所長には東京府女子師範學校教諭堀田要三郎氏を依囑し、多田房之輔氏を常務委員として、教場は其の儘一橋幼稚園を充用し、同年九月一日より授業を開始した。其の他の教員傳習所及び裁縫專科教員講習所等は、市内外の小學校の新設増築等の爲、教員の需要益々多きを加ふる情況に鑑み、戰時中と雖も休止することなく授業を繼續したことは勿論である。

明治四十年四月三十日、陸軍大臣は今次の日露戰役の大捷が國民教育の普及に負ふ所大なるに稽へ、教育界の希

望に應じて、三十七八戰役の戦利兵器を全國各學校に頒附し、國民教育の資料に供せられた。

同六月十五日には、畏き邊の特別の思召を以て、東京市小學校長百餘名に對し、宮中振天府の拜觀を差許され、岡澤待從武官長自ら説明の勞を執られ、尊とき記念品の數々を隈なく拜觀せしめられしことは、校長一同の感激措く能はざる所であつた。校長等は歸校の後夫々拜觀の模様を自校の職員兒童に謹話し、此の光榮を頌つたのである。

同十一月二十四日、第十回東京府聯合教育會を府會議事堂に開き、先づ常務委員長多田房之輔氏より會務の報告あり、次で東京府知事諮問案を始め、各教育會提出の議案に就て討議を爲し、左記各項の決議を行つて閉會した。

○東京府知事諮問案

一、東京府下に適切なる小學校教員住宅の設備標準如何

右答申案は其の調査を東京府教育會に托して成案を作製し、追て答申を爲すことに決定す

○各教育會提出議題

- 一、府立師範學校を連に増設せられんことを其筋に建議すること
- 一、東京府下の私立小學校に對し左の方法を講ぜられんことを其筋に建議すること
 - 1、私立小學校の優良なるものに對しては保護獎勵の途を設くること
 - 2、私立小學校廢止の場合には相當慰勞金を與へ若くは便宜校舎を買収する等相當の方法を講ずること
- 一、地方教育會議を設置する事を其筋に建議すること

- 一、市町村立小學校専科正教員に年功加俸を給せられんことを其筋に建議すること
(以下省略)

一三、第十一回府聯合教育會

第六回關東聯合教育會

第十一回東京府聯合教育會は同四十一年十一月二十九日府會議事堂に於て開會せられ、郡市區教育會代議員六十名出席、岡部府教育會長議長席に着き、常務委員多田房之輔氏より會務の報告あり、次で東京府知事諮問案及び各教育會提出の議案に就き協議し左の如く決定した。

○東京府知事諮問案

- 一、女子補習機關の設立尙多からざる原因及其の設立を催すべき方法如何
右答申
 - 一、女子補習教育機關の設立尙多からざる原因と認むるもの左の如し
 - 1、小學校の經營の爲め女子の補習に餘力なきこと
 - 2、女子教育思想の未だ充分發達せざること
 - 3、夜間通學の故障に原因すること

- 4、土地に依り夜間教授に従事する教員に乏しきこと
 - 5、土地に依り晝間家事に多忙なること
 - 6、小學校を卒業するや賃銀を得る目的を以て女工となること
- 二、女子補習機關の設立を催すべき方法左の如し
 - 1、尋常小學校、高等小學校に補習科を設置し主として家政に關する學藝を補習すること
 - 2、郡市直營の女子補習學校を設置すること
 - 3、土曜日日曜日の如き小學校休業日を利用して補習教育を施すこと
 - 4、夏季若くは農閑期に於て補習教育を施すこと
 - 5、土地の狀況により夜間學校を開設すること
 - 6、重なる各工場に補習教育所を設けしむること
 - 7、女子に適切なる圖書を貸與して讀書の趣味を養ふこと
- 現時の情況にありては女子補習教育は最も急務なるを以て速に右の施設を獎勵し尙之に對し補助の方法を講ぜられんことを望む

○各教育會提出議案

- 一、高等小學校に第三學年を設くること、一ヶ年の補習科を設くること、何れが可なるか——(補習科を設くことを可決)
- 二、靖國神社祭日を全國小學校一定の休日とせられんことを其筋に建議すること——(原案可決)
- 三、小學校兒童が團體を組み、汽車に乗る場合は總ての乗車賃を十二歳未満の兒童と同様に取扱はれんことを其筋に建議すること——(修正可決)